253
220

予が信ずる教育改良の根本問題

居田泰輔述

始

253
220

居田泰輔述

予か信する

教育改良の根本問題

華浦小學校藏版

283-220

帝國圖書館藏

予か信する

教育改良の根本問題

大正
11. 6. 27
内交

自叙

教育改良の手段方法は決して一二の問題に止まるものではない。就中吾人の最も工夫を要することは性情陶冶の問題である。余は年來彼の吉田松陰先生の教育方法について多少の研究を重ねつゝあるのである。先生の修養問題も教育問題もその原つく所は、その學風、即ち學究態度と鮮からざる關係がある。本編は主として先生の學究態度を説きその間、吾人の修養法、吾人の教育法について、或るものを發見しようとしたのである。その研究未た完からざるものあり、加ふるにこれが記述宜しきを得ないこ

とも多々あるであらうと思ふ。併しこれが大成は他日を期し、今は眞にその研究の端緒を發表したのに過ぎない一言以てこれを卷頭にしるす。

大正十年六月初旬

教育改良の根本問題目次

第一章、教育理法の研究方について。……一
第二章、教育改良の根本問題は學究態度の研究にあること。……二
第三章、見遁されたる學究態度の三方面。……六
第四章、西洋の學究態度と東洋の學究態度。……八
第五章、朱子學と王陽明學。……一〇
第六章、兵學の見地。……一一
第七章、事實的學究態度の說明。……一六
第一節、理論と實際。……一七
第二節、事實尊重の實例。……二一
第三節、妙處は妙にあることを悟る。……二三
第四節、眞理は平凡事に示顯せらるゝこと。……二六
第五節、脚跟下に注意すること。……二九
第六節、相容相含の理。(上)……三二
第七節、相容相含の理。(下)……三六

第八章、綜合的學究態度の說明。……四二
第一節、徹底といふことについて。……四四
第二節、主從を擇ぶことの工夫について。……五六
第三節、統一といふことについて。……六一
第四節、反說的の學習方法について。……六六
第五節、氣の一字を顧みよ。……六九
第九章、求心的學究態度の說明。……七八
第一節、在來の心理學を疑ふ。……七九
第二說、反求在身の說。……八一
第三節、情を顧みよ。……八六
第四節、至誠の二字。……九一
第五節、性善擴充の說。……九七
第六節、性善擴充法の實例。……一〇四
第七節、放勳の語萬古の敎道是に盡く。……一〇七
第十章、結　論。……一一〇

敎育改良の根本問題

居田泰輔述

第一章　敎育理法の研究方について

敎育は是非或理法の下に施されねばならないことは、今更申すまでもないことであるが、然らば、其の理法は如何にして之を會得するかと言ふに、こは却々の六ヶ敷い問題である。固より敎育專門家の研究は暫く別問題として、現に實際敎育に從事してゐる傍ら、敎育理法の眞諦を得ようとするには、言ふに言はれぬ困難がある。何分にも此の一冊の書籍を讀めば、略々敎育の理法が了解せらるゝといふやうなものがあればよいけれども、今の處遺憾ながらそんな重寶なものはないのである。それで此の書籍からあの書籍へと轉々として種々のことを讀破して往かねばならないのである。而かも斯の如きことは、實際敎育の事業に身を委ねてゐる我々としては、到底時間勞力の許るさないところである。今假りにその時間や勞力は之を許したとするも、其讀書力が果してよく各種の敎育書より其の眞理を發見し來りて、之を綜合し統一して、一貫の敎育理法を組織し、確立することが出來るであらうか。遺憾ながら實以て頗る覺束ないことである。果して事實斯くの如しとせば、世の所謂敎育あるものも、頗る不安の念に堪へない次第ではあるまいか。敎育効果の一向擧らないと言ふことも無理でないことにある。由來事物の研究といふことは際限のないものであるから、是

れが終局の到達点であるといふことはあるまいけれども、貴重ある我が教育の事業に於ては、今少しく理法の徹底と言はんか、確立と言はんか、兎に角要領を得た所がおくてはならないと思ふのである。今余の如き淺學菲才の者が斯かる說述を試みるに於ては或は其の僭越を譏り其愚を笑ふかも知れない。併しながら自分も教育界に身を投じて玆に二十有余年。實地の經驗上、普通の研究方法では、到底教育の眞の理法は發見せられない。兎に角一種別樣の研究方法がなくてはならない。教育は是非確乎たる理法の下に施されねばならないといふことを確信して居る。これは余が初等教育に從事した當初より一貫した感想である。そまで在來余が教育上に於ける一大苦心は、教育の理法換言すれば教育の眞理、尙換言すれば、如何にすれば略々誤らざる教育が施し得られようかと言ふ極めて大まかな見詰りそのものであつた。最初精讀したのは**ヘルバルト**主義の教育書、それから社會的教育學、實驗的教育學、人格的教育學といふやうに、續ぎ續ぎと一通の教育學書も讀んで見た積りである。それに訓練に關する幾多の書籍教授の各論に關する雜多の書籍、時に或は心理學、論理學、倫理學、哲學と言ふやうなものも少々は讀過することを怠らなかつたのである。併し此等の書籍を讀過した結果を今より回想して見ると、何物か得る所があつたことは勿論であらうが、さればとて眞の教育の要訣は此處であると言ふやうなことは、どうも此等の書籍より得ることが出來なかつたやうに思ふのである。其內比較的參考になつたと思ふのは、教育論說である。例へば金港堂發行の獨立自營大國民（佛國の社會學者**ヅモラン**氏の著）、澤柳氏の實際的教育學、其他倫理彙編儒學史といふやうなものが、重に余が實際の教育思想を動かして呉れたではないかと信じて居るのである。併しこれとても矢張眞の教育はこれで歩めると言ふ確信は得られなかつた。斯くして余の研究は一時行詰つた時期があつたのである。併し其後余の研究をして一層有効に導いて呉れたと思ふのは。維新前に於て實際の光輝を放ちたる防長教育の史實討究と、教育の偉大なる實際効果を奏したる吉田松陰先生の教育方法とである。これが對照としては獨逸國民に告ぐと絕叫したる哲人**フイヒテ**の教育意見、乃至は白耳義の文豪にして哲學者たる**メエテルリンク**の思想等である。**フイヒテ**や**メエテルリンク**は、余の研究としては柄にないことであるから、固より此等の人の詳しき思想を承知した譯ではないけれども、松陰先生の着想から類推して往く時は、其說明の仕方こそ異なれども、其の體得に於いては互に應呼することのあるやうに思はるゝ節々が實に多いのである。要するに防長教育の史實的研究と松陰先生の教育方法の研究とは、余の從來に於ける迷夢を一掃して少なからざる光明を與へて呉れたやうに考へるのである。其處で以上は余が淺薄な思想の往き方を述べたに過ぎないことであつて、必ずしも此經路に出でなくては教育理法の研究が出來ないといふことを主張するのではないが、兎に角其方法は孰れにしても教育理法研究の方法については、多少の工夫を要する者があるではあるまいかと思ふのと、今一つは吾々が是まで考へて居つた事柄よりは、今少し深刻なる見方によつて教育が施されねばならないものはあるまいか、若し着想が此處に及ぶ時は、確かに今日よりは見上げられた教育効果が奏し得らるゝものであるといふことを、痛切に感じて居るのである。

第二章　教育改良の根本問題は學究態度の研究にあること

前章述ぶるが如く、幾ら教育學書を研究するからといつても、却々これこそといふ統一した教育理法が分

つて來ないのである。左すれば教育理法はそんなに六ケ敷いものかと云ふに、實際はさうではないのである。教育の實を擧げるといふことは、手腕と經驗とを要することであるから、固より相當困難な事であるであらうけれども、理法そのものは左まで困難なものでないといつてよからうと思ふ。然るに其困難にない理法が矢張分らないといふのはどうであるかといふに、そは畢竟其學習方法、即ち學究態度そのものが惡いからである。學究態度の事は餘り論究せられて居らないやうであるが、實は頗る重要な問題であると思ふ。從來に於ける學派に由つて岐かるゝ所は、皆此の學究態度を異にすることによつて起つたのであらうと思ふ。其處で學究態度の研究といふことは、獨り教育理法研究の上に必要なるのみならず、すべての學習方法に共通する問題であるから實は非常に重大事であるのである。從來人物養成といふことが唱へられて居る。教育はどうしても人物を養成せねばならない。所が如何にすれば人物が養成せらるゝ者かといふことは、判然して居るまいと思ふが、余はこの人物の養成といふことは此學習態度の問題に關係することが多いと思ふのである。學習態度の如何によつて識見高邁の人物も出來れば、訓詁の學に終る人物も出來るのである。其の他實用的の人間も出來れば、不實用的の人物も出來るのである。而して又從來校風の樹立といふことがよく唱へられて居るが、併し校風は如何にして樹立する事が出來るかといふと、矢張其說明は漠然として居つたのであらうと思ふ。所が校風の樹立といふことも、畢竟は此の學習態度の問題に關係が多いのである。學習態度の由つて產する結果は、略々系統を同うする人物が續々養成せらるゝことにあるのである。事實斯くなれば校風は一貫して一特徵を有する者となるであらう。左それば校風の樹立といふことも、其落着する所は學習態度の方針を確立することが、與つて力あることゝ思ふのである。從來は斯かる意味のことを、單に人格の一語に葬つてしまつて居つたのである。其學校の校風は其學校の校長職員の人格によるとか、人物の養成も矢張同樣のやうなことを言つて居たのである。固より校長職員の人格の貴重なことは勿論であるが、其人格といふことの一要素には、其學習態度に關する見地といふことが頗る重きを爲して居るのであることに着眼せねばならないと思ふ。從來動もすれば教育上の瑣末な問題が兎角誇大的に論議せられて居りはしなかつたかと思ふのであるが、余は此の學習態度の研究といふ事が、教育の効果の上に及ぼす影響の最も大なる者あるを確く信ずるを以つて、教育研究の主問題であつて、且又最も急を要するものであると思ふのである。換言すれば教育改良の根本問題はこれであると信ずるのである。現に維新前に於ける防長の教育が、あれ程の人材を造り出したのは、種々の原因もあることであらうと思ふが、兎に角最も有力なる原因の一は、防長教育の學風余のいふ學習態度が良かつたのであると思ふ。防長教育の目的は、全く人材を養成するにあつた。換言すれは當路の人物を造るにあつた。　其處で學問の研究が實用的であつて所謂學者を養成するのでなく實用的であつたことは申すまでもないが、遠く遡つて二百年間に於ける明倫館の學風も全く此處にあつたものであると思ふ。その證據には過去二三百年間に亘りて、防長の地には天下に著聞する所謂的の學者先生ある者は割合少數であつたが、併し藩政の上に於ては舊時代より少なからざる人物が輩出して居つたものであると思ふ、此等の点より類推しても、學究態度の選擇といふことは、教育の影響上一重大事であると言ふてよからうと思ふのである。

第三章　見遁されたる學究態度の三方面

學究態度の吟味といふことが、教育上如何に重要な問題であるかは前章述ぶる所により、略々其大意を了せられた事と思ふが、さて學究態度の上に如何なる吟味があるかといふに、余は現時の學究態度には見遁されたる三方面のあることを漸く感するに至つたのである。此三方面は余が思辨的討究の結果、斯く主張するのではあく、彼の松陰先生の教育方法や防長教育の史實を聊か研究した結果、遂に斯かる感想を起すに至つたのである。而して其三方面は何々かといふに、其一は事實的學究態度其二は綜合的學究態度其三は求心的學究態度のそれである。要するに今日の學究態度に於て、著しく此三方面の缺陷を生ずるに至つたのは、西洋流の學究態度に伴ふ不知不識の缺陷であるのである。西洋流の學究態度は、多くの長所を有するのであるが、矢張其缺陷の免れ難いものがあることに氣を附けねばならぬ。而して東洋流の學究態度には多くの缺陷があるであらうが、矢張言ふに言はれぬ長所の存することを觀破して來ねばならぬ。此處に言ふ三方面の學究態度は、主として東洋流の學究態度に伴ふ長所であるのである。すべての學究態度が西洋流の研究方法に基きつゝあることは勿論であるが、殊に教育理法の研究の如きは、殆んど全然西洋の學說に準據して居るのである。西洋流の學究態度は、主として分析的に流れ易く、分解的見方に傾き易いのである。例へば心といへば之を知と情と意とに別ち、更に知は斯々情は斯々意は斯々と研究して往くのであるが、併し、斯く分解して見たものゝ總計は、心そのものゝ全體の研究とあつて居るかといふに、決してさうではない。矢張心は心その儘を全體で見た所に一種の作用があるのである。其處で分解的見方を補ふに是非綜合的見方を以つてし、すべて大眼全局を一視する底の態度即ち綜合的學究態度が何事にも必要にあつて來るのである。而して又西洋の研究法は理論的組織的の所は餘程よいけれども、抽象的に流れ易いのである。然る所事實は矢張事實その儘で見た所に多くの發見があるのである。例へば理論的に論ずる時は性の善なる所あれば惡ある所もあつて、性善性惡の說が起るけれども、事實的に論ずる時は、性惡を論ずる必要あく、唯性の善ある所を見て之を教育すれば教育は夫れで目的を達することが出來るといふやうなもので、理論的立場と事實的立場とは、大に其の趣を異にするものである。其他單に抽象的に論ずれば當面のことのみの研究にて足れりとすれども、實際の事實そのものに臨みては當面の注意よりは寧ろ副貳的に關聯して居る事實の方へ多くの注意を要するが如きことが屢々ある。其處で抽象的組織的の研究態度に合せて、具體的事實的の研究態度即ち余の所謂事實的學究態度が大に必要とあつて來るのである。又西洋の研究法は經驗的歸納的推理的であるが、此の學究態度は箇々の物に存する理法を逐一に推し究めんとするのであるが故に、其有樣は遠心的の學究態度とあるのである。例へば教育と言はば兒童と教師の對照である。其處で兒童を先づ研究せねば教育は施されぬいといふから、兒童に關する種々な事柄を研究し、兒童といふ裏には家庭がある、其處で家庭を調査せねばならぬ、然るに家庭といふ外には社會がある、其處で社會を改良して來ねば完全な教育は施されぬいといふやうに、續ぎ續ぎと外へ向つて研究して往くのである。所が之れも固より一種の研究方法ではあるが、此の反對に內へ內へと考へて往く方法がある。國家の本は家である。家の本は身である。身の本は心である。心だに正しければ身も正しく、家も齊ひ國も治まるといふやうな見方、即ち求心的學究態度があるのである。遠心的學究度態に對して求心的學究態度も亦頗る重要な方法であるのである。以上列擧し來つた次第で、西洋の學習方法が普及したと同時に、東洋の長所であつた所の綜合的學究態度、事實的學究態度、求心的學

究態度等が餘程閑却せられて居るのである。併し實は此の態度の閑却せられて居る爲め、教育理法の如きは支離滅裂雜多煩瑣の教育思想に支配せられ、殆んど其統一を見ることが出來ず、大本を窺ふことが出來ないのである。理法そのものが確立しないから、其効果の如きも徹底したものがない有樣であらうと思ふ。其處で煩瑣なる教育理法も、此處にいふ三者の學究態度によつて討査する時は、比較的簡易の事柄の中に其眞理を發見することが出來て、肯綮を脱づれない教育が施し得らるゝことであると思ふ。尙又此等の學究態度によつて兒童を指導して來る時は、實用的にして堅實なる人物を養成することも出來得べきものであると信ずるのである。今は唯其大要を述べたるに過きないけれとも、以下漸次述べゆく所によつて此等の學究態度よりして、眞に如何なる所得が見出され得る者あるかを、宜しく注意して吟味して貰いたいと思ふのである。

第四章　西洋の學究態度と東洋の學究態度

前章に於て西洋の學究態度と、東洋の學究態度とに各長短あることを述べたが、元來西洋はどう東洋はかうと言ふやうなことは、余が如き淺識の者の容易に論斷すべき事柄ではないのである。而して又必しも西洋學と東洋學との長所短所を論ずることが、余の主目的ではないのである。併し已むを得ず爰に論及したのは、畢竟教育の効果を今より一層向上發展せしめんとするには、如何なる教育的改良を施さねばならないかといふ着想よりして、研究の到達點が遂に此の問題に觸れて來たのである。第一章に於て已に之を述べたる如く

從來の研究態度は、幾ら研究に研究を重ねても、一向に教育理法の大體が明かにあつて來ないのである。此の道で往けば必ず教育は之れで成効するであらうといふやうな、見詰めが少しも附かないのである。其處で漸く氣が附いたのが此の東西に於ける學究態度の問題であつたのである。文學博士井上圓了氏の奮鬪哲學といふ冊子に相容相含の說を述べ、其中に『哲學上の宇宙問題は皆此相含の理を以つて解決を下せば、千古の疑團一時に雲消霧散して、哲學中に靑天白日を仰ぐに至るべき道理である……然るに西洋は其理を知らざるが爲に議論百出、甲唱乙駁、其歸極する所何れにあるかを知らぬ有樣である。是れ亦東洋哲學の西洋哲學に一步を進めたる點と見てよい。つまり西洋哲學は分析的推理的細見により、東洋哲學は總合的直觀的大觀による結果にして、顯微鏡と望遠鏡との相違より起るのである。家を立つるに建築と雜作とある如く。西洋哲學は雜作に適し、東洋哲學は建築に適し、大綱を案出するは東洋哲學の長する所細目を造成するは西洋哲學の長する所かと思ふ』といふ。相容相含の說のことは今爰に用はないけれども、東洋哲學と西洋哲學との差違点に關する說明は、余の實際的歸納と餘程暗合する者あるを覺ゆるのである。博士は哲學をのみ論して居らるゝのであるが、すべての學究態度を通じ、西洋は分解的推理的細見による傾向があるであらうと思ふ。其處で西洋流の教育學書を見て、教育の大綱を得て來ようと思ふたのは、或は抑もの間違いであつたのも分らないのである。兎に角余の直覺的感想によれば、西洋の教育學書は教育といふものを組織的に說明することにのみ務むるものであつて、眞の教育は此處を叩けばよいといふやうに簡單に而も痛快に、且つ具體的に說明を與へて呉れるものではないと思ふ。然るに余は松陰先生の說明で成る程といふことが分つたやうに思ふが、矢張東洋在來の學說即ち孔孟の教の內には、　これが教育說であるといふやうに明から樣に區別して說明は

してゐないけれども、嚴然たる教育の理法が而かも教育法の大綱が具體的に示現せられてあるものがあると思ふ。文學博士遠藤隆吉氏の東洋倫理研究といふ書冊に、東洋哲學の三大特色を論じ、其中に『支那の哲學は眞理を的として進歩したと云はんよりは、寧ろ如何にせば一層實行に切實あるやを的として發達して來つたのである』とあるが、東洋流の教育說は矢張眞理を的としたものといふよりは、事實を本として實行に切實あることを的にしたといふべきである。眞理を的とするといふことは洵にありたいことであるが、こは學究者の研究態度で實際家の研究態度は、どうしても事實實行を本とするものでなくてはならないではないかと思ふ。事實實行を本とする理法は其應用宜しきを得ば幾年立つても變動しない事實が見てあるものであるから、西洋の教育學說の如く時々によつて變化する恐がないのである。此の眞理を的としないで實行に切實あることを的とするといふことは、餘程味のあることであるといふことをよく記憶して居らねばならないのである。要する所は西洋流の學究態度の分解的推理的理論的組織的あるに對し、東洋流の綜合的求心的事實的實行的の學習態度を加味しようと云ふのが、吾人の熱烈なる主張であるのである。

第五章　朱子學と王陽明學

本節又朱子學と王陽明學との學說を彼是論究するのではないか、朱子學が、吾人の知識を推し極めんと欲せば天下個々の事に即きて其理を究むべし、天下の事は皆な理あらざるなしと所謂格物致知を主張するに反して、王陽明學は心外無理心外無事を主張し、前者の學が動もすれば支離滅裂繁衍叢脞に流るゝ嫌あるに反し、後者の學は簡易直截一理萬通なる所は、吾人の學究態度に於て大に參酌すべきことではないかと思ふのである。西洋の學風は動もすれば朱子學の夫れの如く始終遠心的になるのである。此の際王學の如く求心的即ち內省的の學究態度を加味して來ることは、錯綜したる教育の理法を簡易明瞭にする上に頗る大切な事ではないかと思ふのである。而して此の求心的即ち內省的の學究態度は、獨り錯雜なる教育學說を簡易明瞭にするのみならず、實は此見地を徹底的に實現する時は頗る力ある吾人の活動を促すことになつて來るのであつて、區々たる學說上の問題ではなく、之を教育上に應用すれば、兒童の能不能あることは勿論であるが、或程度までは教師の働き如何によつて其効果を擧げ得るといふ信念の本に活動することゝなり、其の他一家の事は主人の心如何んによつて榮枯盛衰如何やうにもなり、一國の事は之れが長たる者の心如何によつて、治蹟は如何樣にもなるといふやうに、すべて心外無理心外無事の見地に基き、對手の如何を論しないといふのであるから、餘程活潑地の行動が實現せらるゝことゝなるのである。詳しきことは他の章に於て、述ぶる所があるであらうが、兎に角此の求心的學究態度の見地は、頗る重要な態度であることを、豫め承知して置く必要があるのと、尙又其の學理的根據は王陽明學に負ふ所が多いのであることを了解して置いて貰いたいと思ふ。

第六章　兵學の見地

上來數章に互つて之を述べたるが如く、學問研究をして一層有効ならしめ且つ大に實用的の才幹を養はんと

せぼ、是非其學究的態度を顧みねばならない。就中其學究的態度としては、綜合的事實的求心的の三方面を顧慮せねばならない。而して其三方面の學究態度は、主として東洋流の學究態度にあることを述べ、殊に求心的の學究態度は、王陽明學の主張する所であるまとを明かにして置いたのである。所が綜合的學究態度といひ、事實的學究態度といひ、求心的學究態度といひ、此の三者を最も顯著に發揮して居るものは、兵學の學習態度ではないかと思ふ。松陰先生の家兄に贈られた手紙に『人經學あることを知て兵學あることを知らず。中谷椋梨等逢ひ候度毎に經學をすゝめ、別に臨んで殊に叮嚀の意を致し候處、矩方も兵學をば大概に致し置き、全力を經學に注ぎ候はゞ一手段可有之候得共、兵學は誠に大事業にて經學の比に非す。』云々とあり。武教講錄には『李衛公攻守を論して云ふ。大にして之を言はゞ君たるの道、小にして之を言はゝ將たるの法。又云はく其心を攻むる者は所謂彼を知る者なり。吾が氣を守る者は所謂己を知る者なり。(問對下に見ゆ原文を披きて其精義を味ふべし)故に武教は修身齊家治國平天下より始め、戰勝攻守の術に至るまで包まざることなし。天子諸侯より一士一卒に至る迄、學んで不可なるあるなし。是れ其大意なり。近世談兵家是を知らずして異端曲說に陷るの弊は、自序是を詳論す。其の所にて尙も講すべし。又武教の外に更に儒道も經學もあることなし。儒道經術は皆武教中の事也』とある。此等の文句によつて之を察すると先生は如何に兵學を重んじて居られた者であるかゞ知らるゝであらうと思ふ。要するに先生は兵學を以つて經學以上のものと見て居らるゝのである。兵學を解せざる余の如き者にては、兵學について云爲することは出來ないけれども、事實的學究態度といふ点に於て、兵學程眞劍な者はあるまいと思ふ。こは常識的判定を以つてしても分かることである。虛構淺薄の議論では到底敵に勝つことは出來ないのであるから、徹頭徹尾事實を本としての議論であることは、兵學の性質上よりしても然るべきことであらうと思はれる。然るに又綜合的態度求心的態度の上に於ても兵學は最も其特徵を發揮して居る者であるらしい。それは第一に攻むるといひ守るといつても、單に陣を擊ち城を守るの言事でおくて、其心を攻め氣を守ることであつて、殊に勝敗の數を決する者は氣であるといふのらしい。敵の氣が味方の氣より强い時は、策を以つて其氣を挫き、そしてとうとう勝を制するといふのであるから、勝敗を氣と見るは綜合的味方の最も大ある者であり、敵の勢力の如何に關せず必ず勝を制すといふは、求心的見方の最も頂上の者であるのである。要するに李衛公の言つた心を攻め氣を守るといふ術は、兵學の最も呼吸の存する所であつて、獨り軍事上のことのみならず、人事のすべてに於て此呼吸を大に必要とすることであらうと思ふ。若し此の心術にして宜しきを得ば、教育の如きも教師が兒童の心界を意の如くに左右することが出來る譯にあるのであるから、教育は頗る有効の結果を擧けることが出來る譯であらうと思ふ。其處で松陰先生が兵學を以つて經學の比にあらずとして之を尊重せられたことも、稍々了解が出來ることであると同時に兵學其ものは唯軍事上の研究に止まるものではおくて、全く氣の理合を攻究する一種心術の學であるのである。其處で誰しも之を學ふ必要があることは勿論であるが、殊に教育者としては大に其理法を攻究して置く必要があるといふことを深く感じて來たのである。

以上述べ來つた所を更に概括し且又余の意のある所を附け加へて一層其義を明かにすれば、結局かういふことになるのである。教育上からいつても、一般の學習上からいつても、其他人間の處世上からいつて見ても一番肝要な事は先づ吾が心そのものを理解することである。所が西洋の心理學では、其說明が盡きて居らない所がありはしないか。よし盡して居るとしても實際の修養上の工夫を指示して呉れて居らないではないか

と思ふのである。東洋の性理說は假令學理的組織的のものではないとしても、換言すれば眞理を的として發達した者でないとしても、事實實行に切實あることを的として居るものであるから、心そのものゝ性情を頗る事實的具體的に說明して居るものではないかと思ふのである。尤も性理說も學者によつて種々に說明して居らるゝのであるから、一概に之を論斷することは出來ないのであるが、松陰先生は儒學の見地に王陽明の學說を加味し、且又兵學の見地を以つて之を洞察し來つて居らるゝのである。先生の說明に從ふ時は、心の本體が尙に簡易平明にあつて來るのである。若し夫れ心の作用が眞に能く簡易平明に理解せらるゝ事となれば、之が修養方法も、之が敎育方法も、自ら明かになつて來るであらうと思ふのである。元來敎育方法の明かにならないのも、吾人の修養方法が明かにならないのも、尙又吾人の處世法が旨くゆかないのも、其終局の問題は心そのものゝ性情が明かにないことに歸結するのである。其處で心そのものゝ本質を明かにするといふことは、萬事に向つて頗る根本的の問題であるといふことを能く勘考して居らねばならないのである。心の研究といふと斯かる面倒の事はと考ふる者もないではあるまいと思ふが。實は此の研究を離れては、人事の何事も意義をあさないのであるから、實に重要の問題であると思ふ。此の根本問題の解釋如何によつて敎授も訓練も其方法を頗る異にして來るのであるから、決して面倒であるとか八釜敷いとか言うて、輕々に看過すべき者ではないのである。此の事だけは豫め十二分に心得て居らないと、何も研究の端緒が開かれないのであるから、特に一言を附加へて置くのである。然らば更に飜つて松陰先生は吾人の心を如何なる者に解して居られたか、而して又之が敎育方法は如何にして居られたかといふに、夫れを說明するには、先づ先生の學究態度を吟味して來るといふことが一番捷徑である。先生の學究態度は上來章を重ねて述べ盡した如く、事實的學究態度、綜合的學究態度、求心的學究態度といふやうな方面に重きを置いて居らるるのである。此等の學究態度に西洋流の學究態度を加味すれば、一層切實な學究態度であることは既に述べ來つた所であるが此等の學究態度を顧みることによつて、尙も大切なる事實の存在することは、其學究態度に伴ふ結論である。事實的學究態度の結果は、遂に相容相含の理を發見し、綜合的學究態度の結論は氣の論に及び求心的學究態度の結論は反求在身の說に到達するのである。實は此の結論即ち相容相含の說、氣の論、反求在身の說、このものが頗る大切な事實的眞理である。此の三者が篤と理解せられて來ると、心の作用が一層明かになつて來るのであつて、遂には性善擴充の說が理解せられ、延いては茲に敎育の理法も確立して來ることになるのである。かるが故に學究態度の吟味といふことは、一轉しては心の理解といふことになり、更に一轉しては人物の養成といふことになり、敎育の徹底といふことになるのであるから、豫め其覺悟を以つて一讀せらるゝことを希望するのである。尙茲に一言して置くが、從來すべての學說であれ、すべての事實であれ、これが徹底して居らないかつたと言ふ事柄の裏面には、萬法は一に歸する者であるにも拘はらず、之を兎角二見の相に陷つて居るから徹底しなかつたのである。松陰先生の主張に於いて最も著しく感せらるることは此の二見の相に離るゝといふことであるから、此事も豫め承知して置くべき重要の事項で、此の点に關し兵學は最も有効の見地を指示するものである。以下更に例の三個の學究態度を各別に詳論し、各其條下に於て如何なる妙理が發見せらるゝかを一々指摘して見たいと思ふ。

第七章　事實的學究態度の說明

以上數章に涉り事實的學究態度、綜合的學究態度、求心的學究態度の三者を顧慮することが、習學上の最も注意を要する所であることを述べ來つたが、詰り一言にしていふ時は、吾人の學習は實用的の學習でおくてはならないと言ふことに歸結するのである。然らば更に實用的の學習とは如何ある學習であるかといふと簡易にして實用的なる即ち就實攬要の學でなくてはならおいといふのである。就實の工夫としては事實的學究態度を要し、攬要の工夫としては綜合的學究態度と求心的學究態度を要するのである。綜合的學究態度と求心的學究態度をが攬要の工夫であるから、簡易を主とする學習であることは直ちに了解せらるゝことであらうと思ふが、事實的學究態度も、一つには矢張學習を簡易にする方法であることに深く留意せねばならおい事實を離るゝときは或は煩瑣複雜となり、或は虛高空漠となるのである。然るに事實的具體的の討究方によれば、無益の議論と能力とを避け簡易にして着實、且つ徹底的にして實用的となる事が出來るのであるから、事實的學究態度は簡易實用二つながら兼ねたる學習態度で、學究者の最も注意を要する事柄である。然るに吾人の學究おる者か、兎角就實の意に於て甚だしく不徹底を來す傾向を有するは甚だ遺憾な次第である。今松陰先生のいうて居らる語句を引用すれば『嗚呼夫れ學者議論文章の死物を以つて聖賢を窺ふこと蓋し亦久矣哉、今に及んで躬行を勵み實事を著はさずんば此道遂に地に墜ちて復た收むべからず。念を趨して茲に至れば、余が割記の作も破り去らんと欲す』云々と。又いふ、『凡そ空理を玩ひ實事を忽せにするは學者の通病なり。是れ皆空疎迂僻の輩の口に藉く所にして、篤學實行の士の聞くを欲せざる所なり』と、又いふ『今の學者却つて空々寂々に陷入つて孳々汲々の功を欠く』と、又いふ『俗儒書を讀む徒に意を字句に留め身を以つて其他に體せず。故に……虛高無益の論をおすこと多し察せさるべけんや』と。又いふ『初學の弊大要章句に羈り空妙に馳するに過きず、此輩晨夕經を講し少しも心身に益するおし。何そ況んや家國天下をや。是れ道を失ふ者の大おる者也』と。又いふ『今我輩好んで書を讀む。書は聖賢の言行を載する所おれは、好んて書を讀むは亦賢を悅ふと云ふべし。然れども學者の通弊書は書おり我は我おり。我何そ書に預らん書何ぞ我に預らん』と云うて、聖賢の言を我口に言ひ、聖賢の行を我身に行ふこと能はさるは、亦彼の魯の繆公の賢を養ふこと能はず、賢を尊ふこと能はさると同日の談おり』と。學者議論文章の死物を以つて聖賢を窺ふといひ、或は空理を玩ひ實事を忽せにするは學者の通病といひ、俗儒書を讀む徒に意を字句に留め、身を以つて其地に體せずといひ、又初學の弊章句に羈りて空妙に馳すといひ、又いふ學者の通弊書は書おり我は我おりと。是に由つて之を觀るに、從來に於ける吾々の學究態度は、不知不識の間一種の捉はれがあつた。實事實行といふことを主眼に置くのではおくて、單に知識慾を滿足するに止まつた嫌かあるのである。其處で徒に机上の空論を穿鑿するのみで、少くも事實を基礎にして實行上より眺むることを敢へてしおかつたのである。何にも彼も事實實際を本にして、之が仔細の討究を爲す時は、事物の道理は左まで高遠のものではおく、誠に平明の理に自然の原理原則が發見せらるゝのである。然るを平明の原理原則は、却つて眞理ではおい者かの如く考へ、徒らに迂遠なる議論文章の末に於て之を求めんとしたるは、從來の學究態度に於ける大おる缺陷である。宜しく何事も實事實際を本にする學究態度を大に鼓吹せねばならおいのである。今此の事實的學究態度によらんとせば、如何なる注意を要するか次の各節に於て之を詳論することにしよう。

第一節　理論と實際

事實的學究態度の上より考察する時は、先つ第一に理論的研究と實際的研究とは、其立場を異にする爲め學究態度に大なる相異あることを心得て居らねばならない。從來に於ける教育上の議論の如きも、此の區別あることを考へなかつた爲め、無益の研究に多大の能力を費消し、實地の上に於ては何程も効果を得なかつたやうなことが、幾らもあつたことであらうと思ふ。例へば教育學上のことであつても、人格的教育學は、其組織系統の上から見て教育學といふ名を與へるに足るとか足らないとかいふようなことや、訓練と教授との境界がどうであるとかいふやうな種類に屬する議論が實に少なからずある。現に國民道德といふことの定義が定らないので、大別すると三樣の解釋にあつて居るとか言ふことである。成る程教育學者として一箇の學說を完成する上からは、此種の問題も頗る重大な問題ではあらうが、教育實際家の立場から言ふ時は、夫等の問題は、一向に頓着する必要はないのである。然るに今日の教育實際家は、不知不識の間、矢張夫等の學者的態度に惑はされて、却つて實地に必要なる重要事項の研究を疎かにする傾はないであらうか。理論的研究の態度と、實際的研究の態度には、自ら大なる鴻溝のあることを豫め承知して居ることが最も必要なことであると思ふ。孟子告子上篇第六章乃若二其情一則可二以爲一レ善矣。乃所レ謂善也。夫爲二不善一。非二才之罪一也。の劄記に於て松陰先生いふ『孟子の性善を論する此二句あるのみ。然れは善をなすは性なるべけれども、不善をなすは何を以つてなすか、遂に說明せず。且つ情は性の動にして、喜怒哀樂の發して節に中るは中庸の所レ謂中和にして、即ち孟子の所謂善なり。然れとも或は節に中らずんば和に非らず善に非らず然れば情は善をなすべきのみにあらず。又不善をもなすべし。是に於て程子曰。論レ性不レ論レ氣不レ備。張子曰。形而有二氣質之性一と。氣質の說與つてより孟子性善の說初て礙る所なし。備れりと云ふべし。然れども是に於て孟子と程張と學問優劣あるを知るべし。程張は議論上の事にて孟子は事實上の教なり。孟子の人を教ふる、始終人の性善を引起すことを主とす、故に人あり孟子に謁し性惡と云ふ者あれば、孟子教へて云はく汝惻隱の心はなきか、云はくあり、云はく是れ仁なり。汝羞惡の心はなきか、云はくあり、云はく是れ義なり。汝恭敬の心はなきか、云はくあり、云はく是れ禮なり。汝是非の心はなきか、云はくあり、云はく是れ智なり。汝已に仁義禮智を具す。是れ性善にあらずや。其人若し好貨好色好樂と云へば、衆と共にするの良心を引起—大欲ありと云へば、心に快きかと云ふ故に、孟子の前にて性惡を主張する者ありとも、其人々に就きて其本然の良心を引起さるゝ故、絶えて性惡の說を云ふに暇あらず。孟子の人を教ふる斯の如し。程張に至つては孟子を後立にして、荀卿揚雄韓愈の徒と難を構ふるのみ。其說愈備はりて其實愈疎なり。故に孟子の書を讀む者、眞に心を斯に留め、議論に涉らず只事實を學ぶべし、先づ己の性を眞に善と篤信し、良心の發見惻隱羞惡恭敬是非等を擴充し、或は物慾邪念起ることあらば、速に良心を尋ね來り、其自ら安んじ自ら快き所を求め悔吝のなき如くすべし。人を教導するに於て亦然り。然るときは性善の外復た氣質の說を借ることなし』と本文は孟子の性善擴充の教育方法を窺ふ上にも、餘程貴重なるものであるが今は理論的研究と事實的研究とには自ら差異のあるものなることを說明する引例としたいのである。理論上からすれば性善の說だけでは充分でない、氣質の說あつて初めて性說が完全になるのである。併し教育上の實際からいふと、氣質の說を借る必要がないといふのである。兎に角今日の世の中は知識慾が非常に盛になり來つた所は至極よいけれども議論の盛になつた割合に、事實は旨くは往かないのであるから、理論的研究と事實的研究とには斯かる區別あることを篤と承知し、何事も事實實際の上より見地を起すことが、餘程大切な學習方法となるのである

吾人は不知不識の間、一種の捉はれに陷入り、自ら其弊を知らぬやうなことが實に多いから、何事をなすにも形式にからめられては居らぬか、事實に遠ざかつた議論をしては居らぬか、といふことを篤と反省して見ねばならぬ。學理的研究は、事物の道理を細大漏らさず討究し、且つ組織的分類的に系統を附けて來ねばならぬのであるが、實際的研究は先づ主從を擇び、主なる事柄の目的を達して、然る後其枝葉に及ばねばならぬのである。而して又其實現に際しては、大に四圍の狀況を考へ、事機時勢等を考へて、之が先後緩急を定めて來ずばなるまい。其處で理論的研究と實際的研究とによつて、眞理が二つある譯はないのであるが、詰り眞理の適用上には種々の工夫があるのであつて、決して單調なものでないことをよく心得て居らねばならぬのである。要するに事實々々と言うても、矢張相當の理法に基きて事實を考察するにあらざれば、事實そのものゝ眞相も分からぬことであるが、唯何事も机上の議論や思辨的の空想に馳せぬやうにして、必ず事實を對照として理法を研究することが最も大切な注意を要する所である。理法とか眞理とか言つても、其實は必ずしも皆學理的說明が出來得べき者計りでもあるまゐ、兎角事實現象を主とすれば、假令其說明は不充分と雖も却つて事物の眞相を離れないことになる場合もあるかも分らぬから、事實現象に遠ざからぬやうにする事が、實用の學を主とする者の餘程注意を要する所である。然るに吾々の日常行爲の實際は、頗る事實と懸離れ、或は名に拘泥して實を忘れ、或は形に拘泥して實を失ふ等のことが、實に多いのである。程張は議論上の事にて、孟子は事實上の敎へありといふ意を深く味ひ來ることが、最も肝要な事である。本章の第六節に述べんとする相容相含の理第八章の第五節氣の論第九章の第二節反求在身の說の如き、皆理論的研究と實際的研究とは、其立場を異にすることを篤と承知して居らねば、其妙味が解せられぬのである。依つて本節の意ある所を十分に理解して置くことが極々必要である。

第二節　事實尊重の實例

前節に於て事實實際の上より見地を立つることの必要を述べて置いたが、松陰先生が如何に事實そのものを尊重して居られたか、一二の實例を引いて其實際を一層明かにしたいと思ふ。例へば兵道といふと吾々は餘程高遠な定義を要するものかと考へるが、先生は『君臣上下の義を明かにし、賢邪忠奸の分を辨し、士精强にして民富貴、糧儲饒にして器械利、溝塹以つて民を保するに足り、城壘以つて地を守るに足れば、其進むや拒むべからず、其退くや追ふ可らず、然る後中立つて外從ひ、華盛にして夷懾ふ。災除かれて道暢ぶ。是に於て生民の能事盡き、天下の大事畢る。是を兵道といふ』といつて、丸て頗る平明なる事實其儘を見て居らるゝのである。又兵を學ぶ者の經を說いて『兵を學ぶ者經を治めざる可らず。但經亦多端性命の精微鬼神の幽妙、下は訓姑の繁冗、其書は則ち詩書禮易春秋論孟あり、申韓あり、宋明諸家の學あり、本邦伊物の流有り、類を推し部を分つときは、畔岸知るなし。之を如何ぞ其兵を學ぶの餘にして能く偏探して精覆にせんや。然りと雖も人に唯五典五常あり。古今に亘つて變なし。夫れ精微幽妙と繁冗なる者とに至つては、其言人々にして異同なき能はず。然り而して典常其間に行はれ。相乖り相悖らず。典常既に得ば則ち凶逆以つて仁義を濟ふべし。兵を學ぶ者の經を治むる、是に於て足る、何ぞ必ず朱王伊物を云爾せんや』といつて、五典五常を擧げ、典常古今に亘つて變なしといふ。是れ亦眞の事實的ではないか。孟子離婁下第二十六章天下之言レ性也則故而已矣の劄記に於て先生いふ『性は即ち理なり心なり性理心なる者は、形色聲臭の見聞せべきなし。唯其已に然るの跡に就て見れば自ら明なり。是を故と云ふ……故に孟子性善を道ふ必ず堯舜を稱

す。又其牽牛の譬赤子入井の譬等の如き、皆跡の見るべき者を以つて人に示すのみ。一も空理を說かず、是れ學者最も思を致すべき所なり。然らざれは高く性理心を辨論して、忠孝節義に於て一も關繫なき者往々是あり。讀書の術の如き、世或は經を好み史を廢する者あり。是れ大に非なり。吾常に史を讀み古人の行事を看て志を勵ますことを好む。是れ亦故而已矣の意なり。孔子も宣ふことあり、吾之を空言に載せんと欲す。之を行事に載するの親切著明なるに如かずと。蓋し亦皆此の意なり』と。事實尊重の結果は抽象的說明を避け。何も具體的說明を用ひ、尙ほ大に史實を重んして居らるゝのである。以上說く所により先生は徹頭徹尾議論を避けて、事實そのものを尊重して居られたといふことが略ぼ知らるゝであらうと思ふが、尙一二の例を擧ぐれば『古の政を論ずる者、曰く舊章を率由すと曰く政隨時を貴ふと、而して世の守株膠柱なる者、頑然曰く吾れ能く舊に率ふと、而して天下の勢既に已に變ずるを知らず。新を好み奇を艷とする者、公然曰く吾れ能く隨時すと、而して祖宗の法既に已に爛するを知らず。二者相背馳す、而して皆以つて禍敗を致すに足る則ち古の之を論ずる者非か。抑も世の之を爲す者誤るか。徒に其名に徇うて其實を檢せず。誤る所以なり。今謂ふに二者其名に徇へば則ち殊なり。其實に就けば則ち相濟して初めて相背馳せず』と。又いふ『正學を崇んで曲學を排するは固りなり。然れども今茲に一人あり眞に志を立て己を益し人に益せんとの心なれども、偶々正學を知らず曲學を主とする者あらば、豈一概にこれを非とすることを得んや。又其學ふ所正學に似たれども其志却て名の爲にし利の爲にする者ならば。豈亦一概にこれを是とするを得んや。然れは學を言は志を主とす。其曲と正とに至ては第二義に落るなり……志を立つること眞ならされば名は正學なれとも實は曲學にも劣るべし』と。又いふ『凡そ形に古今彼我の異なるあり、而して物形有つて斯に用あり用あれば斯に法あり、法あれば理あり、理は則ち易はらず。故に能く理に通すれば理に由つて法を生ず。法に由つて用を生ず。用に由つて形を生ず。何そ必ず刻舟守株これを爲さんや。眞に能く是を知らば長短齊ふすべく、勢力一にすべし。器械制度異なりと雖も、其理は則ち今猶古の如し。兵を學ぶ者其理如何を求むるのみ』と。右の如く實を離れず一偏の見に捉へられず、能く事物の眞相を認め得れは、茲に始めて融通自在にして、且つ徹底を期することが出來るのである。併し吾々は不知不識の間、或は名に或は形に拘泥して、遂に實に遠ざかり、眞に接することが出來ないのであるから、篤と注意し、一深思ひ切つて事實を尊重して見るといふことが最も肝要であると思ふのである。

第三節　妙處は妙にあることを悟る

己に述べたるが如く事實的學究態度の上より考察すれば、第一に理論的研究と事實的研究とは、其の態度の上に全然の區別あることを發見したのであるが、第二には妙處は寧ろ妙なる所にあることを悟るのである松陰先生いふ『鄒魯の兩軍相愊り未だ兵刃相接するに至らず、鯨波噬と起りたるに、鄒軍一散に潰走し、將吏三十三人潰兵の後に殘りて擊殺さるあり、固より力戰して死するに非ず、若し兵家をして是を議せしめば必ず云はん、操練熟せず節制整はずして是に至ると、是れ本を知らざるの論なり。故に孟子曰君行仁政斯民親其上死其長矣。蓋し民心上を親む故に上の令に從ふこと臂の指を使ふが如し。長に死するが故に水火の中を避けず。果して然らば我兵一塊石の如し。此の一塊石の兵を以つて敵に當る克たざる所なし。所謂操練節制論せずして固より其の中に存す孟子の言豈に虛あらんや』と。一塊石の兵を以つて敵に當る克たざる所なし。所謂操練節制論せずして固より其の中に存すといふ、一見甚た迂遠の說であるやうであ

る。併し孫子には同一意と云ひ、吳子には先一和といひ、兵法の極所は矢張人心の和を得ることを以つて本とするのである。其所で操練節制は抑も末で、一塊石といふことが本である。一塊石になることが出來さへすれば、操練節制はさまで問題となるのではあく、自ら操練節制も整うて來るのである。此理を察して見ると妙處は妙なる所にあることが分かるではあいか。普通操練節制が妙處であると思ふ、が實際の妙處は却つて其處ではなくて、一塊石となること即ち人心の和にあるのである。人心の和と一口に言ふと、夫れまでのことであるが、事實問題としては此の事が實は却々の困難事であるのである。兎に角事實的學究態度により事實を深刻に觀察して來ると、當面の事件よりは寧ろ副次の事實に多大の注意を拂はねばならないことが實に多いのである。理論家と實際家との意見を異にすることのあるは、多く此等の点に於て起つて來るのである。妙處は妙にあることの理が分つて來ると、事實は決して孤立するものでないから、常に其環境に注意すること、或は事機時勢等を顧みることが、頗る大切な事項であること等を了解することが出來るであらうと思ふ。余嘗て或骨相學者より聞いた事があるが、其人が言ふに最初西洋流の骨相學のみを研究して見た所が、どうもそれのみでは不足の所がある。それは人は唯遺傳や血統の勢力のみに支配せらるゝのでなく、必ず亦天地の支配を受けて居るのである、其處生れた年月や居宅の位置等の影響を受くることの大なる者があるのである。依つて東洋流の陰陽學を加味することにした所が、夫から人相を判定することが非常に正確になつて來たといつたが、誠に一理あることであると思ふ。これと同理で例へば一片の書布に一箇の靜物を畫くとしても、其靜物そのものゝ畫法に如何に丹精を凝らすとも其背景の書き方に注意しないと、到底十分の眞を寫すことは出來ないのである。故に吾々が一見不用であると思ふ書布の空間は、矢張繪であると思はねばならない。斯樣な有樣で、事物の環境に意を用ふることは、却つて其當面の事件よりは大切であるやうなことがあるのであるが、多くは此注意を怠ることが多い。教育の如きも兎角教室に於て教師と兒童と相對する場合のみが大切であると思はるゝ傾があるも、實は放課時に遊戯する際、其他往復の途上家庭にある時等のことを大に顧慮せねばならないのである。松陰先生が『地を離れて人無く、人を離れて事なし。故に人事を論せんと欲せば先つ地理を視よ』と言はれたことは、其當時の有名な話とあつて居るのである。又いふ『予が友來原良藏志確として量宏なり。將に往いて俊傑の才を顯はさんとす。而して獨り惜むらくは其學未だ充たず所謂學とは讀書稽古の力に非らざるなり。天下の事體に達し四海の形勢を審かにする是れのみ』云々と。是れによつて見ても環境を察することの如何に大切であるかは、大要が分かるであらうと思ふ。事機時勢といふことも頗る重大なことで、所論書生論が役に立たないといふのも、多くは此の事機時勢を顧みないやうなことが多いので、偶々其論に眞理の存することがあつたとしても、之を實施することが出來ないのである。教科書の教授が迂遠に流るゝと云ふも一は、此の事機時勢といふことを加味して論及して居らないからである。所謂腐儒の學問が世に用を用をなさず、松陰先生の學問があれだけ有効であつたのも、實は常に事業を本にして此の事機時勢を顧みて居らるゝため、先生の研究が期せずして自ら活學となつたことであらうと思はれる、先生いふ『凡そ英雄豪傑の、事を天下に立て謀を萬世に貽さんとするや、必ず先つ其志を大にし其略を雄にし、時勢を察し、事機を審かにし、先後緩急先つ之を内に定め、繰縮張弛徐ろに之を外に應す』と。事機時勢環境之を一言にして言はゝ妙處の妙にあることを篤と考へ來りて、萬事に應用し、且つ兒童にも此邊の妙味を何にかに附けて常に指示することが頗る肝要なことと思ふのである。所謂活學といふも一つは

此等のことに關する所が多いであらうと思ふ。人物を造ると造らないのも、學習の上から言ふと斯かる所を啓發するとしないとに關係することが、餘程大なるものがあるから、能く〳〵注意して此の妙處は妙にあることを實際の上で工夫して見ねばならないのである。

第四節　眞理は平凡事に示顯せらるゝこと

一旦事實的學究態度により、事實を尊重する事に着眼し來ると、理論と實際との區別ある事を知り、尙ほ又妙處は妙にあることを悟るのであるが、更に進んでは眞理は平凡事に示顯せらるることを知ることが出來る孟子盡心篇上第四十一章の劄記にいふ『甚矣哉公孫丑の道を信せさるや、上の第三十九章に於て齊の宣王の爲めに短喪を問ひたるも此の人なり。其の見る所孔門の宰豫と同し。蓋し朽木糞土復た彫抒すへからさる者なり。故に其の道に於ける未た嘗て躬行心得せず。只是れ孟子の議論博大なるを聞て、高矣美矣となす。殊に知らず道は日用常行事物當然人々行ふに任せ一も高遠艱深及ふ可らざる事なし。只行はさるを憂ふるのみ孟子深く丑を怒る故に、其言却つて高美益々及ふべからさるが如し。大匠と羿とを以つて自ら居り直に丑を卸し付けて拙工掘射となす。大匠と羿の譬は告子上篇の末章にもあれとも、其の詞氣の寛猛を視て、孟子の丑を怒る聲色共に厲なるを想像すべし。結末能者從之の一句尤も厲し。蓋し能の字前の兩の拙の字に對して下す。謂らく吾が道は只能者のみ之に從ふ。汝如き拙者の及ふ所に非すとなり。想ふに當日丑此の語を聞き辟易退縮するのみにて、遂に孟子の意を悟らさるべし。或は是より丑復た孟子の門に入らさるが、下篇中孟子の語を引て過二我門一而不レ入二我室一。我不レ憾焉。其惟鄉原乎と云ふは、殆んど此の種の人の爲めに發するが如し。然とも今深く孟子の言を思ふに切實明白と云ふべし。引而レ不發と云ふ引の一字是れ頭腦なり。引とは弓を引滿るなり。弓を引滿る如く孟子平生の動靜云爲、去就辭受、一として萬衆の觀に當らざるはなし。即ち孔子の吾無レ隱二乎爾一。吾無レ行而不レ與二二三子一者との義なり、若し丑是を觀て法則として是を行はゝ豈更に餘蘊あらんや。不レ發とは是を議論文章に發せぬと云ふことなり。是れ亦孔子の天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉の義なり。躍如とは發せすと云ふとも、皆躬行上にて認むべければ、踴躍活潑なること議論文章の死物に非らさるを云ふ。中道而立とは又其躬行の所過不及己甚の行に非らずして、平正允當なるを賛するなり』とあるが、道を以つて高矣美矣となす者は、獨り公孫丑に限らず、吾人の多くは皆是れである。然れとも道は日用常行事物當然人々行ふに任せ、一も高遠艱深及ふべからさる事なし只行はざるを憂ふるのみである。少し仔細に觀察し來ると、古人の動靜云爲皆我が師である。天地自然の現象は皆悉く人生の法則を示して居るのである。其處で是を我が躬行上に認め來らば、踴躍活潑何に苦むことは少しもないのである。只遺憾な事には事實を顧みず實行を空虛にして居つたのが吾々の已往であつたことが分かる。注意しさへすれば、眞理はすべて平凡事の中に示顯せられてあるのである。其處で決して高遠の議論に空しく時日を經過してはならない。メエテルリングはかう言ふて居る『あゝ、實際我々の生活の餘り多くが、待つことに費やされてしまふ。丁度自分等の神の聲を聞かんが爲に遠く旅した傳說中の盲人等のやふに。其等の盲人達階は段に腰を下してゐた。そして彼等は神殿の內庭で何をしてゐるのかと訊かれた時、「私達は待つてゐる」と、頭を搖りながら答へた。「けれど神樣はまだ一言も物を言はれない。」併し彼等は殿堂の黃銅の扉が鎖されて居るのを見なかつた。そして彼等はその堂內は彼等の神の御聲で鳴り渡つてゐることを知らなかつた。神は一瞬間たりとも物言ふことを止められない。けれど何人もその扉を開くことを考へない。併し少し注意し

さへすれば神が我々の有ゆる行爲について必ず話される。言葉を聽くのは困難なことではない。』と又いふ『我々の生活は我々の神を求めることに費されなければならない。何故なれば神は隱れるものであるからである。併し神の計畧にして一旦知れ渡ると、それ等は如何にも單純で、然も微笑してゐるやうに思はれる。この瞬間から如何につまらない物でも神の姿を示顯する。それ故に我々の生命の偉大さは如何なる微細な事にでも依存してゐるのである。斯くして或る詩人の詩が日常生活の微賤な出來事をうたつてゐながら、不意にその中に廣大な或るものを啓示するのである』と、神の話される言葉を聽くのは困難なことではないといひ又神の計畧にして一旦知れ渡ると、それ等は如何にも單純で、然も微笑してゐるやうに思はれるといふ。前例の松陰先生の說明と併せ考へて一層面白いではないか。何處までも事實を本にして、深刻に深刻に觀察して來ると、眞理は頗る平凡事に示顯せられ而も頗る單純であるのである。其處で決して高遠な事柄に眼を付ける必要はない。如何なる微細なことでも唯深刻に注意しさへすれば、非常に深淵な原理原則が認めらるゝのである。メエテルリンクは又かういうて居る『諸君が今日大慘事の中で認める事を、既に一片のキツスの中で觀取してゐなかつたであらうか。我々の心靈の中に眠つてゐる神聖なる回想は、悲哀の槍の刺衝を受けてのみ目醒ましめらるべきものであらうか。賢者は斯の如き烈しい覺醒を要しない。彼は一片の涙を見る、小女の身振を見る。落つる一滴の水を見る。彼は目を開き魂を醒まして過ぎ行く思想に耳を傾け、兄弟の手を握り唇に近づく。彼は諸君が掠めて過ぎる閃めきの他は捉へられないものを視る事をやめない。そして諸君に示顯せられるためには、暴風雨を要し、死の手をさへも要した。總てのものを一片の微笑で彼は容易く知るであらう』と。名和昆蟲翁が薔薇の一株昆蟲世界といふ一冊子を著して居らるゝが、吾々か薔薇を見るのは頗る輕卒であり粗略である。併し翁の如く緻密に詳細に觀察する時は、薔薇の一株を見て有ゆる昆蟲の世界が知らるゝのである。又德孤ならず必ず隣有りといふことの如きも、大舜自ら耕稼陶漁すれば乃ち都君の稱あり。孔子魯衛陳蔡に困めば乃ち三千の徒あり。といふやうな大聖人の事を思ふ時は、容易に近寄るべきことでもないが、松陰先生が富永有隣に有隣、君が今獄に居るからといつても矢張德によつて隣を得て居ることがないとは言はれない。それは今君と余と二人相得て知己となつて居るではないか。德と不德とは知らないが隣がないとは決して言はれないであらう。凡そ天下の孤子離群囚奴より甚しい者はない。然るに隣を得ること猶是の如し。故に君が若し此說を存して以つて世に接し、己を以つて人を責むることなく一を以つて百を廢ることなく長を取つて短を捨て心界の躅を察せば、天下往くとして隣なからんや。と言うて居らるゝが斯の樣にすべて微細の事柄の間に行はるゝ心界の跡を察すれば、世は誠に面白いもので、嚴然たる眞理が著々として一事一物に示顯せられつゝあるのである。教育上の效驗の如きも、決して一時に顯著なる事件の行はるゝ者と思ふことなく、微細なる事柄を一つ一つ注意して實現して見ると、案外に偉大なる効驗は、其の中より產れ出つる者であるから、眞理は平凡事に示顯せらるゝものであるといふことを、忘れないやうにして、一事一物につき其效驗を收むることに注意せねばならないのである。

第五節　脚跟下に注意すること

事實的學究態度による時は、眞理は平凡事に示顯せらるゝ者なることを知り、更に進んでは脚跟下の事物を疎かにせざることを痛切に感ずるに至るのである。兎角人は手近の事を空虛にする嫌があるのである。其處で切問近思、常に脚跟下に注意せねばならない。松陰先生が玉叔父に贈られた書簡にかうある。『論語註會

讀仕候。人數は馬來小五郎、井壯に御座候。是れは、實用に引當切實に論し候積りに御座候。既に今朝父母唯其疾之憂の章に至り、遊學の身は取分け此事に切なる由を論し、熟れも書を廢して三嘆仕候事に御座候、と。又久坂生の文を評して、『事を論する、當さに已が地、己が身より見を起すべし。然らば則ち著實と爲らん。故に身將軍の地に居らは、當さに將軍より起すべし。自ら大名の地に居らば、當さに大名より起すべし百姓は百姓より起し、乞食は乞食より起す。豈に地を離れ身を離れて之を論せんや。今吾兄は醫者なり。當さに醫者より起すべし。寅二は囚徒なり。當さに囚徒より起すべし』と。又家兄に贈る手紙に『奥阿武郡行妙々羨まし羨し。三千里外を知るも何用かあらん。近く二邦の地理人情を精詳にすべし』と。徒弟玉木彦介に與ふ書に『先づ國史を讀むべし。國史は近古より始めよ』と。此等の事を讀下し來らば、先生が切問近思如何に脚跟下の事に注意を拂はれたかゝ分かるであらうと思ふ。教授の際教材を鄕土化することの要も此の邊に存することを併せて了知する事が出來るのである。兎角吾々の着想が迂遠であるとか、教授か徹底しないとか云ふのは、多くは此の切問近思を缺くからである。道理としては左まで六ヶ敷いことではないか、實際の場合に臨みては、つい此の工夫を疎にする傾きがあるからよく〳〵注意せねばならない。先生の回顧錄には『畢竟夷船に乘移る際、少しく狼狽す故に我が舟を失ふ。若し舟を失はす、又要具を携へ、船に登らは、後に心がゝりなく、船中へ強て留まることを得、我文書を夷人に示し、又船中の樣子を見んことを求め、海外の風聞などを尋ぬる間に、夜は明くべし。夜明けは、白晝には歸り難しと云つて、一日留らは、其中には必ず熟談も出來、計自ら遂くへし。假令事遂けずとも、夜に至り陸に返へり、急に去らば、かゝる禍敗には至らぬなり。其事の破れの本を尋ぬれば、櫓くいなき計り、にてかくなりゆけり。因つて思ふ。左傳某の役の敗を記して、曁桂而止とやらあり。大軍の敗もかゝる小事に因ることなり。』といふやうなことを述べて居られ又武教講錄には、『用具を佩び、利器を離さず、夜戒を嚴にし、不虞の戒を忘れず、等の事に至ては覺悟の細目にして、最も心を付すべきことなり。前に云ふ中谷翁の如きは、實に善く此覺悟を守りたる人にて、感するに餘あり。惣べて、古武士は是等の廉を善く磨きたることなり。士風の盛衰美惡も却つて是等の小事に著はるゝ者なれば、人々能く心を付すべきことなり。行住坐臥暫く放心せば、則ち必ず變に臨み常を失す一生の恪勤一事の闕滅に於て、變の至るや知るべからずと云ふは、細行を矜たざれば、遂に大德を累はす、と云ふと同一種の語にて、最も謹嚴なる語なり。余前篇に於て、最も大なる事を論し、此篇にては又小事を論す。合せ考へて各當る所あるを知るへし。抑も敬儆覺悟の事は、徒に一武士の其身を守る、宜しく然るべきのみに非ず。古の明君賢將は、是を以つて其身を守り、又其親臣大臣を戒め、又諸士を戒め、又其庶民を戒む。一人の心は千萬人の心にて、君將の心玆に在る時は、臣民に及ふこと、固より命令告諭を待つことなし。置郵して傳ふるよりも速ならん。是れ武備の最要なり。果して然らば東西南北夷　交々犯すとも、其相援ふや、左右の手の如し。器械軍卒未た備はらずと雖とも、思己に半に過きん。若し然らすんば器械軍卒何程備りても、譬へは阿大夫の、趙に鄲を攻められて救はす、衛に睟陵を取られても、知らぬ如くにて、何そ其國を守ることを得んや。故に身を守るには、人に寢首を搔れさる如く、心懸くへし。國を守るには、敵に寢城を拔かれさる如く、心懸くへし。今天下の苟且宴安に耽り、人の不虞を襲ふに暇あらず。然れとも、變は固より常に非らざることなれば、變の至るや知るべからずの訓、豈苟且にして可ならんや。』と言うて居らるゝのである。切問近思思想を手近かにすることが肝要であると同時に、手近の事實を疎かにしないことが復

亦大切である。手近の小事は左までのことでもないと考ふるが、松陰先生の言はるゝ樗くいの話の如く尙又士風の盛衰美惡も却つて是等の小事に著はるゝといひ一生の恪勤一事の闕滅に於て變の至るや知るべからずと云ふ。思ひ合せて手近の事に油斷のないやうにすることが大切である。用具を佩び利器を離さず夜戒を嚴にして不虞の戒を忘れざることは唯の一小瑣事の如くなれども、却々の大事である。此の事は獨り武敎上の事ではない。吾が敎育上に於ても此の種の工夫は幾らもあるのである。例へば服裝のこと、稽古道具のこと携帶品のこと、下足の始末、敎室及び机内の整頓、戸障子の開閉、換氣採光の注意、校舍内の洒除整頓、便所の取締兒童出入の注意、其他遺失品遺亡品に關すること等、數へ來らば幾らも手近の注意を要する事柄があるのである此等を唯の一小瑣事と考へないやうに工夫することは、敎育効果を擧くる上の一大事であると思はねばなるまい。要するに事實的學究態度の上よりすれば、思想の上に於ても事實の上に於ても脚跟下の注意を疎かにしてならないことに痛く想到するのである。

第六節　相容相含の理（上）

上來事實的學究態度により、事實其のものを深刻に深刻に眺め來つた結果は、第一理論的研究と實際的研究とに區別あること、第二妙處は妙にあること、第三眞理は平凡事に示顯せらるゝこと、第四脚跟下に注意すること等の要件を認めて來たのであるが、此の學究態度により更に最も大切なる一大事實を發見することの出來るのは、相容相含の理である。相容相含の理は、學理的說明に於ては未た到達し得られざる理法であらうと思ふ。併し事實の立場から言ふ、とそうなくてはならないことに歸結するのである。而して又斯く考へることによつて、すべての不徹底が皆徹底して來るのである。相容相含の說は文學博士井上圓了氏の說を借つて來たのであるが、松陰先生が有ゆる相對的事實につき說明して居らるる意味は、皆この相容相含的に解して居らるゝのである。然るに世人は孤立的ならざる事實を兎角孤立的に見て來るから、事實の上に徹底しないことがあるのである。松陰先生の學問研究が頗る徹底して居つたといふのも、其事業か偉大なる効果を奏したといふのも、固より其人格の然らしめたことが多かつたのであらうが、一には此等の見地より眞理の洞察が他と非常に異なるものがあつたといふことを考察して來ねばならない。先つ井上博士の相容相含の說を紹介して、然る後松陰先生の事實的說明を對照することにしようと思ふ。井上博士の奮闘哲學にいふ『此世界には物心二者の對立することが分る。而して其物を窮盡すれば心に歸し、心を窮盡すれば物に歸し、物の極は心となり、心の極は物となる。即ち兩極の合して一となることが、古來の唯物論唯心論によりて明かに證明せられて居る。或は唯物論が眞理であるなどゝいふのは、いづれも偏見にして、局外より觀察すれば此二者全く一物の兩端一體の兩面に過ぎぬことが分る。更に其理を相對絶對の上に當嵌むるに、相對を究むれば絶對となり、絶對を究むれば相對となる。依つて相對絶對も一體兩面なることが分る。是に於て余は相容相含說を唱ふるに至つた。古今の哲學者中に、一躰兩面說を唱ふるものは尠くないか、其說明は死物的の考案にして、融通自在なる理を示すことが出來ぬ。隨づて表面中に裏面を見、裏面中に表面を現する理を說くことが出來ぬ。然るに物心の關係の如きは、心中に物を見物中に心を現はし、一念中に世界を納め、一分子中に精神を含むものにして、つまり二者相含と見なければならぬ。故に余は一躰兩面にして而も二者相含せりと立つるのである。此相含の理によりて古來の學說の矛盾相反する點も會通することか出來る。抑も哲學の問題は何れにあるかといふに、矛盾を會通せすとするにありて、多くの學者か苦心焦慮當ならざる有樣であ

るが、若し相含の理を當篏め來らば、千古の疑團も一時に氷釋することが出來る。依つて余は矛盾即ち眞理なりと斷言したいと思ふ。むかし大地は平坦なりと信ぜし時代には、天地を說明するに非常の困難を感じたるも、今大地は球圓と知りて以來種々の疑問が忽ち解決を見るに至りし如く、今日は宇宙の問題を平面的直線的に解釋せんとする爲に、種々の矛盾を起すのである。即ち直線的とは物はどこまでも物、心は飽くまで心として進行する立論の意味である。然るときは必ず矛盾を起すを免れぬ。若し大の極は小となり、小の極は大となり、一の極は多となり、多の極は一となり、同の極は異となり、異の極は同となり、自の極は他となり、他の極は自となり、有の極は無となり、無の極は有となるを知り、たとひ人之を矛盾といふも、其實大小一多同異自他有無皆相含するを宇宙の眞相なりと體達し來らば、矛盾が矛盾にあらずして眞理なることを悟了することゞ出來る。依つて一般の哲學眼より觀て矛盾すと思ふ所が、眞理の存する所である。故に余は矛盾即ち眞理なりといふを憚らぬ次第である。此相含の理は何によりて證し得るかといふに數千年間の哲學が反復丁寧に證明して餘りありと思ふ。唯物論が唯心となり、唯心論が唯物となり、一元論が二元となり、二元論が一元となり、相對論が絕對となり、絕對論が相對となり、日月の昇沈し、寒暑の來往して、反復窮りなきが如くなるは、全く相反する學說が、其內部に互に相含する所あるのである。要するに東西古今の哲學史は此相含の理を證明せる歷史と申して宜しい。故に一財一物萬象萬化悉く圓轉自在、融通無礙なる性質を有する次第である。若し强て之に名を與ふれば、宇宙の眞相は圓了二字に納まると申して差支ない、是れ即ち圓了哲學の執る所である。然るに之を直線的論理、平面的推理を以つて解決せんとする爲に、種々の矛盾衝突を見るに至り、疑團百結、五里霧中に彷徨するやうになる。誠に憫笑すべきことである。大地は平面なる中に球面を含め、球面なる中に平面を含むことは、何人も考察すれば容易く知了するであらう。又世界に東西南北の方位なきも、其中に方位歷然として存し、又方位ある中に方位なきを知了することも出來る。是れ亦平面中に球面を帶び、球面中に平面を包み、無方位中に方位を現じ、方位中に無方位を見るものにして、二者相含なるを知るべきが如く、哲學上の宇宙問題は、皆此相含の理を以つて解決を下さば、千古の疑團一時に雲消霧散して、哲學界中に靑天白日を仰ぐに至るべき道理である。……已に此相含の理を知らば、我が一身中に國家を含み、我國家中に世界を含むことを知るへく、隨て世界の完全を期せんが爲に國家の發展に盡くし、國家の發展を期せんが爲に我一身の修養に心を用ひざるを得ざることも了解するを得る筈である。故に我一身中に國家あるを忘れず、我一國中に世界あるを忘れずして、奮進努力すべし。といふのが余が執る所の活哲學の主義である』と。要するに一躰兩面說尙ほ迂遠にして相容相含こそ事實の眞想である。隨つて矛盾すと思ふ所が眞理の存する所であると體達し來るのであるが。其說明は博士の述べられた所で了解が出來るであらうと思ふが、尙ほ論より證據事實を深刻に深刻に眺め來ると、遂に愛に想到するのである實は此の眞理が見破られて來なくては、眞の學問研究が徹底したのではあるまいと思はれる。此の眞理を見破つて來るには、分解的見方や學理的見方では出來ない。是非綜合的事實的の學究態度からでなくてはなるまいと思ふ。兎に角此の相容相含の理法は、事實的學究態度の結果による頗る緊切な結論であることを十二分に了知して居らねばならない。此の理法にして悟了することが出來さへすれば、博士のいはゝ如く圓轉自在、融通無礙であるであらうと思ふ。然るを兎角直線的論理平面的推理を以つて事理を解決せんとするから、種々の矛盾衝突が起つて來て解決が附かないのである。宜しく篤と熟考して此の理を悟ることが頗る大

切のことであると思ふのである。

第七節　相容相含の理（下）

己に相容相含の理が體認せらるゝと、苦樂の見解が明瞭になつて來るのである。元來苦と樂とは相對的の者ではなくて相含的の者であるのである。然るを相對的に見遂には孤立的に見て來るから、種々の薄弱なる問題が起つて來るのである。左れども苦の中に樂は含まれて居り、樂の中に苦が含まれて居るものであることが、分つて來たならば、苦とて餘り厭ふべきものでなく、樂とて餘り喜ぶべきものではあるまいと思ふ。寧ろ大なる苦を重ねて往く中に大なる樂はわたかまりつゝあるのであるから、決して現在の苦痛を意に介してはならないのである。相容相含の理が分からない爲めに、苦樂の見解について、從來吾々は餘程不徹底のものがあつたのであると思ふ。孟子告子下第十五章に、孟子曰く舜は畎畝の中より發（オコ）り、傅說（フエツ）は版築の間より舉げられ、膠鬲（カフカク）は魚鹽の中より舉げられ、管夷吾は士より舉げられ、孫叔敖は海より舉られ、百里奚は市より舉げらる。故に天の將さに大任を是の人に降さんとするや、必ず先つ其心志を苦しめ、其筋骨を勞し、其體膚を餓やしめ、其身を空乏にし、行ひ爲す所を拂亂し、心を動かし性を忍びて其能くせざる所を曾益せしむ。人恒に過ちて、然る後ち能く改む。其心を困しめ、慮に衡（ヨコタ）はりて、後ちに作（オコ）る。色に徵（アラ）はれ、聲に發（アラ）はれて後ちに喻る。入つては則ち法家拂士なく、出てゝは則ち敵國外患なき者は、國恒に亡ぶ。然る後ち知る。憂患に生れて安樂に死するを。の劄記に於て松陰先生いふ、『余が罪ありて江戸獄に繫るゝや、吾師平象山も亦連逮せらる。時に余と一版牆を隔てゝ居る。獄中四書一本あり、象山日夜孟子を誦讀す。獨り此章を取り一日必ず誦す。又其後に題せることあり。其意

璞玉の連城となり、鋼鉄の干將となる。其琢磨淬勵を受る、亦甚だ苦しきを引き、自ら十年來海防の事に苦勞し、遂に獄にも降ることを叙述し、畢竟是れ天の大任を降さんと欲するの意なれば、愈益琢磨淬勵して、天意に報せずんばあるべからずとなり。其文甚だ美なり。余亦寫錄して、自ら勵ます』云々。又いふ、『余野山獄に在る時、友人土谷松如、居易堂集を貸し示す。其中に與三藩生次耕一書あり。才を生し、才を成すと云ふことを論す。大意謂らく、天の才を生する多けれども、才を成すこと難し。譬へは春夏の草木花葉鬱蒼たるが如き、是れ才を生するなり。然とも桃季の如きは、秋冬の霜雪に逢うて、皆零落凋傷す、獨り松柏は然らず、雪中松柏愈青々たり。是れ才を成すなり。人才も亦然り、少年輕鋭鬱蒼喜ふへき者甚衆し。然れとも艱難困苦を經るに從ひ、英氣頽敗して、一俗物となる者少からす。唯眞の志士は、此處に於て愈々激昂して遂に才を成すなり。故に霜雪は桃李の凋む所以、即ち松柏の實する所以なり。艱苦は輕鋭の頽るゝ所以、即ち志士の激する所以なりとあり。是亦全文を諳せす、大意斯の如し。今吾不才と云ふとも、象山の徒にして又徐氏の文を讀む。豈桃李に伍して松柏に咲はれんや。當に琢磨淬勵して、連城干將となるへきのみ』云々と。孟子の本文大に動心忍性の要を說く。松陰先生又象山の實例及び徐氏の文を引いて、艱苦の大切なることを述べられたり。謂ふに、吾人の志業をして頓挫せしむると、成效せしむるとの界は、要するに苦樂に關する安心の如何による。先生又いふ、『山の險且つ峻にして、人の越ゆる能はさる者、吾は則ち從容として之を越ゆ。而して體勞せず、水の深且つ險にして、人の涉る能はざる者、吾は則ち從容として之を涉る。而して足濡れず。凡そ天下の至難至險にして、人の爲す能はさる者、吾は皆從容として之を爲す。其れ唯夢が。甲寅の歲、吾れ事に坐して獄に下る。獄中己に紙筆文史の娛むべきものなし。法又同囚と相語るを許さ

す。唯夢を以つて樂と爲す。或は海外異域の遠に遊び、或は千古草昧の前に生れ、其樂言ふべからず。退いて默し、默して倦み、倦んで睡る。睡つて夢む。樂を以つて吾の能事畢る』と。又いふ、『庚戌の歳、吾れ始めて笈を負うて西遊す。其後四方を跋渉し、艱苦備さに嘗む。足跡天下に遍く、今に至つて五年。今則一室に幽囚し、復た寸歩を移さず。乃ち往事を追思し、欣然獨り笑ふ。蓋し其身之を履むに方つてや、處々皆苦、之を追思するに及んでや、處々皆樂み、苦の甚しき者は、樂亦甚たし苦、の小なる者は、樂亦少なし。飢て食を得さるは、甚た苦し。渴して飲を得さるは、甚た苦し。勞して休を得さるは、甚た苦し。其食を得、飲を得、休を得、之を追思せば、則ち一咲のみ。是に於てか知る。苦時暫くにして、樂時の久しきを。坡翁謂ふ天地曾て一瞬を以つてする能はさる者、是れ苦の時なり。物と我と皆盡くる無きは、是れ樂時なりと。佛氏又三世を說く、而して一瞬前は過去なり。一瞬後は未來なり。二者を去つて、則ち現在なる者、幾はくかある。嗚呼是を知らば、則ち與に道を適くべきなり。而して世の人は、其の暫苦に堪へずして、其の久樂を失ふは何ぞや』と。何事を成すにも、相當の苦心と困難とのあることは今更言ふまでもない事實であつて、矛盾即ち眞理の存する所といふが如く、何事も豫定通り事の運はないのが、寧ろ世相の本體であるかのやうである。併し先生のいへる如く、苦の甚しき者は樂亦甚しく、苦の小なる者は樂も亦少なく、苦樂は全く相含的の者であることに氣が附きさへすれば、苦必しも厭ふべき者ではなく、樂必しも喜ぶべき者でもない。寧ろ困苦缺亡に際しても樂を以つて吾が能事畢るの覺悟がなくてはならない。然るを幸に苦時暫くにして樂事は久しといふに於ては尙更のことである。矛盾即ち眞理豫定の通りにならないことも、其變に處し確然意を決し、種々考慮を廻らす時は、必ず融通無礙の光明を體認することが出來るのである。要するに何事も我が方寸の中に存することである。決して皮●想の思慮一偏の見地に迷はないことが極々肝要である。松陰先生が、馬子才の浩々の歌を批評して居らるる中に、『我有れば則ち天地萬物有り、我無ければ則ち天地萬物無し天地萬物我に待つ有り。我天地萬物に待つ無し。我喜べば則ち天下治まり、我怒れば則ち天下亂る。自ら樂めば人を弔(弔は人の不幸を弔することならん)する所以、人を弔するは自ら樂む所以、大丈夫の抱負斯くの如くなれば、犖々乎として天地萬物能く羈する所にあらざるなり』と。熟々と味い來つて見れは、物心の關係も苦樂の見解も、唯吾が心の決定一つである。其處で先生は心定といふことを頗る重んじて居らるゝが、如何にも其通りである。心定といふことは如何樣にも心定せらるのであるが、唯肝心の條件は事實を本とした心定でなくてはならないことゝ、尙又後章に述ふるところの事物の大局より眺め主從を考慮し統一を期して偏狹に失しない心定でなくてはならないのである。要するに穩健とか着實とか實用とかいふやうなことを加味して、事理の當然なる所に向つて心定を行はねばならないと思ふのである。相容相含の理苦樂の關係等は、以上述べ來つた如く心定することが事實實際の上に於て少しも扞格して居らない道理であらうと思ふのである。若し此の理にして承認することが出來るならば、佛者のいふ沙婆即ち淨土と言ふことも、眞に斯かる所をいふたものではないかと思ひ、尙又この理が判れば松陰先生の言はれた、『凡そ慈父仁君に事へて、孝子となり忠臣となる者、古今少からず。誠に吉祥善事と云ふべし。暴君頑父に事へて、忠孝なる者に至ては、不幸の至り、誠に哀むべし。然れども、是に非されば、眞の忠孝の誠意を觀るに足らず』及び『人は晩節を全うするに非らされば、何程才智學藝ありと雖とも、亦何そ尊ふに足らんや。明主に忠なるは珍らしからず、暗主に忠なるこそ眞忠なれ。慈父に孝なるは珍らしからず、頑父に孝なるこそ眞孝なれ。賞譽せられ

て、忠孝なることを珍らしからず、賞罰せられて、忠孝なるこそ眞の忠孝なれ。士大夫たる者、嗜むべきこと實に爰にあり』と又『眞學者眞明主出るに非らざれば、僅に順境を語るへくして、未た逆境を語るべからず。吾輩逆境の人、乃ち善く逆境を說くことを得るのみ』などの語の眞意が直に了解せらるゝことであらうと思ふ。敎育の上より言うても、現在敎育は餘り軟弱にして剛健の氣象を養成することが足らないのである。大に困苦と戰ひ筋骨を勞することに馴れしむる必要があるであらうと思ふ。そして又餘り順境のみを說いて變に處し逆に對する心懸を養ふことが足らないと思ふ。宜しく堅忍不拔の精神を扶植することに力を用ひねばならない。松陰先生いふ、『余嘗て深く疑ふ。今の世臣子思の如き者なきか、君繆公の如き者なきか、又君臣共になきか。又君臣共に有りて、未た相遇はざるか。臣君を絕つか、君臣を絕つか。是れ遂に知るべからず』と。又いふ、『若し君々たらずと云ふとも、臣々たらば、天下尙平なり。臣々たらずと云ふとも、君々たらば天下尙平なり、此處工夫の入る所なり。君は君の道を盡して、臣を感格すべし。臣は臣の道を盡して君を感格すべし。父子兄弟夫婦も一理なり。此義中々小さかしき者の知る所に非らず』と。又いふ、『俗學者、記誦詞章を以つて一大事とす。是を以つて人の入たる所とす。其極是を以つて自ら誇り世に衒ひ、孝弟仁義何物たるを知らざるに至る。迂儒者其の是の如きを憂ひ、遂に記誦詞章を惡み、人心を害すと云うて、異端邪說に比し、靜坐默識、枯禪とならざれば、學問と思はざるに至る。二つの者皆一偏にして、聖學に非ず唯夫れ人の人たる所を知つて、主本とし、旁ら記誦詞章を玩ひ、技藝とするは、眞の君子なるべし』云々と此等皆二つの者を一偏に見、相含の理を知らざるより起る缺陷である。實に物事は不即不離の間に眞の妙味があるのである。夫れを兎角單一に速了し去るのが一般の通弊である。相含の理、大に味ひ來り、萬事につて其妙味を悟らねばならない。武敎全書の戰法心得の中に、入レ格離レ格、離レ格合レ格事とあるが、學問の研究理法の討究も、遂に此妙域に達しなくては、唯一偏の見に陷るので、決して徹底した者とは言はれない。此妙味が解せられてこそ、眞に融通自在の所が得らるゝのである。松陰先生の高弟高杉晋作が、禪談を試みた日記に、入レ愚歸レ不レ愚。一段の所見所聞所取所言、一々草芥の如くになり、然る後人間當り前の事業に用ひ出すなりとある。誠に味のある言ではあるまいか。格に入つて格に離れ、格に離れて格に合ふと云ひ、或は愚に入つて愚ならざるに歸すといふ。此邊の味は、とても直線的論理平面的推理を以つてしては、到底悟ることの出來ない所である。學究の經路は、或は最初より此妙境を悟ることは出來ないのであるかも知れない。先つ直線的論理平面的推理を以つて進み往き、其間常に着實穩健を本とし、深刻に深刻に事功を觀察することを怠らずは、遂に相容相含の理の妙味あることを體達し、眞理は不即不離の間に存することが分かり入レ格離レ格離レ格合レ格事とか、入レ愚歸レ不レ愚とか云ふことの妙論が得て來らるゝことであらうと思ふ。併し恐るべく憐むべきは、何處までも直線的論理平面的推理を以つて眞理を解せんとし、兀々孜々皓首に至ると雖も、其非を悟ることの出來ない者である。假令直線的論理平面的推理を信ずる者と雖も、一日早く不即不離の妙境あることに氣が附けば、それ丈早く融通無礙の境に進むことが出來るのである。反復玩味して其の理を悟ること、吳々も望ましい所である。相容相含の理に對する松陰先生の見解は、未たその引用を盡したのではない。元來相容相含の理は、第八章の第三節統一のこと、第五節の氣の論、第九章の第二節反求在身の說等とも、相應呼して頗る大切なる理法を示すものあれば、其條下に引用する先生の諸說と對照して、其意益々明かなることを豫め承知して居らねばない。玆に第七章事實的學究態度の說明を終るに當り、第一節より

第七節に至る各事項を心竊に沈思熟考して、從來に於ける吾々の學究は空疎迂僻、或は議論文章の死物を以つて聖賢を窺ひ、或は字句に意を留めて、虛高無益の論に馳する等のことはなかりしかを、能く回顧して見ねばならぬと思ふ。何處までも事實を本にして空妙の議論に馳せず、一偏の見解に陷らずして、事物の眞相を把捉せんとするのが、事實的學究態度の主眼とする所である。

第八章　綜合的學究態度の說明

已に第三章に於て之を述べたる如く、現今の學究態度は、總して事實的綜合的求心的の三方面に大なる缺陷があるのである。西洋流の學究態度は、動もすれば抽象的理論的に流れて事實的に具體的にならない傾向がある。而して尙又推理的分拆的に流れて、遠心的煩瑣的になる傾向がある。學究態度の此等の缺陷を補ふには、簡易と實用とを主とする學習態度即ち事實的綜合的求心的の三學究態度を加味する必要があるのである然る所前章の始めに於て已に之を述べたる如く簡易と實用とを主とする學習態度は要するに就實攬要の工夫を得るにあつて、事實的學究態度は就實の工夫となり、綜合的學究態度と求心的學究態度とは攬要の工夫となるのである。然るに就定に關する事實的學究態度のことは、最早之を詳說し終つたのであるから、是よりして、攬要に關する學習態度の說明に移らんとするのである。そこで先づ綜合的求心的の兩學究態度によれば、それが何故に攬要の工夫となるかを、豫め說明して置かうと思ふ。詰り攬要の工夫は、事物の本末終始先後緩急大小輕重を考へ、常に其の根本となり、念頭となる事柄に主力を注げばよいのである。さすれば力を用ふること約にして、効を收むること博く、玆に始めて簡易實用の目的が達せらるゝのである。然らは更らに一歩を進め綜合的學究態度と、　求心的學究態度とには如何なる區別があるかと言ふに、　綜合的學究態度は、事物を上下的即ち縱に見て、本末を定め、主從を明かにし、念頭を提へんとするのであつて、求心的學求態度は、事物を平面的即ち橫に見て、本末を定め、主客を明かにして、念頭を見んとするのである。求心的學究態度のことは、更に章を改めて之を說くことにし、今は綜合的學究態度について、是よりその大要を說明せんとするのである。上來屢々述べ來つた如く、西洋流の學究態度が、動もすれば分拆的に流れんとする傾向あるが爲め、學習態度に於ける一般の弊風は事物の全局を大眼一視する事を大に閑却する嫌があるのである。丁度前章の事實的學究態度でも夫れである。事實は事實その儘を眺めて立論すると、頗る著實妥當な議論にあるのであるが、それを不知不識の間、事實を離れ机上で之を論せんとするから、折角の議論も兎角虛空にあつて仕方がないのである。事物の觀察も其通りで、事物の全局を大眼一視することによつて始めて肯綮を失はず、全部の統一が見えて來るのであるが、之を兎角局部的に觀察するから、局部局部の立論としては至極尤であつても、全體系から見ると、偏狹に失したり、不統一を來したりするやうなことになつて來るのである。其處で、局部局部を精密に觀察し、討究するといふことも固より必要な事ではあるが、常に何事と雖も、之を大眼一視して、全局より立論して、其歸一点を定めて置くといふことが、頗る大切な學究態度であるのである。綜合的學究態度の要点は、全く玆にあるのである。事物を全局より見渡し、先つ之が主要事項を定め、更に其主要事項について、其大本を見拔き以て其の綱目を明かにするのである。然る

所、吾々の學究態度は、從來斯かる意味に於て注意して居らぬかつた爲め、頗る不整頓のものであつて、思想の主從もなければ統一もない。唯雜然たる考を以つて散漫な事項を取り扱つて居るのに過ぎない。松陰先生は余のいふ綜合的學究態度に於て、餘程注意せられた者のやうであつて、何事に臨みても、必ず主從を區別し、更に全局を大眼一視して歸一点を見て居らるゝのである。之を一言にして盡さは、思想の統一といふことに於て、吾々とは頗る異なるものがあるのである。先生の行爲先生の事業が、あれ程よく成効したのは全くこの思想の統一といふことが與つて力あることであらうと思ふ。思想が統一して居れば、必ず徹底といふことが之に伴ふ者である。吾々は到底全思想の統一を圖るといふやうなことは出來ないとしても、責めて常に全局を大眼一視することにありとも注意して居らば、幾分か偏狹の見地に陷ることを避けることの出來はすまいかと思ふ。人物の養成といふことも、實は是等の學習態度に關係することが多いので、大局の見えない人物を幾ら養成した所が、それは餘程効果の少ないことであらうと思ふのである。尙詳しきことは次の各節に於て之を述ぶることとするが、綜合的學究態度の大要は、事物の網目を明かにして、其大本を失はないことに注意する學習態度であることを、豫め了知して居ればよいのである。

第一節　徹底といふことについて

綜合的學究態度及び求心的學究態度のことを述ぶる前に、豫め徹底といふことにつきて研究して置く必要があると思ふ。それは抑も綜合的の學究態度や求心的の學究態度を必要とするのは、前に述べた如く要を攬ぶるにあつて、要を攬ふることは實用的徹底的の學習をなさんとする主旨に外ないのであるから、終局の目的は徹底といふことにあるのである。其處で徹底といふことについて、豫め研究して置くことの必要が起つて來るのである。徹底といふことは、讀んで字の如く別に研究を要しないことのやうであるが、實際は却々さうではないのである。若し徹底といふ事の意義が、眞箇に領解せられてゐないとすると、爾餘一切の研究が皆漠然として來るのであつて、折角の綜合的學究態度のことも、求心的學究態度のことも、左まで其效能を感じないことにあつて來るのである。其處でどうしても徹底といふ事の見解を豫め十二分に研究して置くといふことが頗る必要にあつて來るのである。然らば徹底といふことには如何なる意義の詮索を要するかといふに、そは次の如き注意條件があるのである。

(イ)　第一に心得べきことは、徹底といふことは、徹底しないものからは、豫め眞箇に其境地を察することの出來ないものであるといふ事である。余は今回松陰先生の思想を多少研究して見て、殊に著しく感じた事の一つは、此の事柄である。從來吾々が考へて居つた事柄の如き者は、先生の其等に比較して見ると頗る不徹底のものであつたのである。それで、とても徹底しないものから徹底したもの丶境地は容易に分かる者ではないといふことを、頗る痛切に感じた次第である。從つて吾々は決して事物の斷定を輕卒に下してはならないと言ふ事と、今一つは物の上には上かあるから、どうしても偉大な人の見抜いて置いたことを深刻に味つて見ねばならないものであるといふことゝが、心骨に徹するやうになつたと思ふのである。一旦斯かる見地に立つて見れば、種々の書籍にもちやんと其事が明かにあらはれてゐるのである。或禪談に『悟つた當體はどんなものか言つて見よと云つた處で、それは悟つた同士なら云へるかも知れないが、悟らぬものには說明の限りではない。如何に說明し得ても悟らぬ方では解らぬ。御飯の味を知らぬものに御飯の味はこんなものであると云つた處で、どんな味だか更にかみしめたことのないものにはわからぬ。然るに御飯の味を知つ

てゐる同士であると直くわかる。知つた者同志であるならば、何も六ヶ敷い說明はいらぬ。直にそれが解かるやうなものである。八角の磨盤空裏に走ると云つても、青山常運步と云つても、何と云つても悟つた同士あらわかるが悟らぬものにはそれがわからぬ。所謂醉ひ醒の水は下戸知らずである』とあるが、悟つた當體といふも畢竟は心身の徹底したものゝことであらうが、其の境地は到底語り傳へることが出來ないのである松陰先生も、說明し盡されない所に往くと、或は『切問近思の人、斯境に身を體し、胸に手を措て工夫すべし。甚だ處し難き所あり。然れども、疎心浮氣にては、其の眞に處し難きを知ること能はず』とか、或は、『粗淺薄俗の儒者は、決して此妙境を知ること能はず。只身に驗して其實否を知るへし』とか、或は『此義中々小さかしき者の知る所に非らず』とか、言ふやうな事を言うて、反省を促かされて居らるゝのである。又ある所には『凡そ敎訓の言人を待つに尋常を以つてするあり、人に望むに絕異を以てする者あり、篇々語々、心を付けて見るべし。余が講ずる所と云ふとも、自ら二つの者の別なきを得ず、讀者自ら待つに尋常を以つてせんか、絕異を以つてせんか、是れ其擇ぶこと如何にあるのみ』といつて居らるゝ事もある。元來は絕異といふだけの絕異でもあるまいが、徹底しない者から見れば、絕異の如くに思はるのである。其處で矛盾即ち眞理といふ如く、此の絕異の如く思はる所に實は妙味のあることを篤と了知して居らないと、すべて向上發展の道は開けて來ないのである。敎育の改良効果の徹底といふことの如きも、尋常一樣の月並の理法に從つて、凡俗の事を繰返へして居つては、到底局面の回轉は得て望まれないことであらうと思ふ。左ればとて丸で珍無類の奇術を弄するといふ譯では決してないが、結局徹底した理法によつて徹底した事業を行うて往くことが、一番大切であらうと思ふ。併し茲に工夫のいるのは徹底したと思ふことが矢張徹底しないのであるから、眞の徹底したといふ徹底はどんなものかといふことを、よく味ふことが第一の着眼点であると思ふのである。

（ロ）自已の思慮分別は、眞に淺薄狹量な者であるといふことを自覺すること。前にいふが如く眞に徹底しない者が直ちに徹底した境地を知ることは出來ない者であるといふことが分つて來ると、其次には自已思慮分別は眞に淺薄狹量なものであるといふことを自覺して來るであらうと思ふ。併し實は此の我見に離るゝことが餘程出來難いのである。それはどうかといふと、すべての思慮分別は自己の心を離れて行ふことは出來ないのであるから、自己の心で思量するはどうしても自己の己往及び現在の思慮分別、即ち自我を基礎にして之を思慮分別するのである。自己の思慮分別を基礎にしては自已の量見以外を思慮分別することが出來難くなるのである。自己の思慮分別以外の境地を思慮分別しようと思ふには、どうしても先づ自己の現在の思慮分別は、眞に淺薄狹量の者であることを自覺して、成るべく自我に捉へられないやうにして、自我に離るゝことの工夫を凝らして來ないと、眞の徹底した境地を察することは出來ないのである。松陰先生は最初頗る嚴正なる意味に於て寡欲說を唱へ、詩文書畫凡百の玩好を廢することに努められた者であるが、後には寡欲論を薄欲論に轉し、興に乘しては此等の者を弄ぶけれども、心を奪れないやうにして往くと言うて居らるゝのである。人の思想は固より年輩と境遇とによつて各の相異はあるが、要するに思慮の定まらない時の思想には、餘程淺薄な者があるから、聖賢の敎訓若くは先達の人によつて、自己の不徹底な所を常に修養して往くことに工夫せねばならない。先生いふ『凡そ人、少年英氣の時は、文章議論赫々浩々、必ず善く人を動し、分外の譽を得るあり。然ども、四十五十、學熟し識定り、老成沈着にして、愈嚙んで愈味あるに至らさ

れは、眞の品目は定らざる者なり』と。兎に角自己の思慮分別は、淺薄狹量のものであるから、我見に離れないと徹底した境地を窺ふことが出來ない者であることを了悟することが、徹底に近寄る最近の工夫であらうと思ふ。

（八）深刻に觀察し、深刻に思慮し、深刻に行動すること。（イ）に於ては徹底の境地は言語を以つて傳へることが出來ないものであることを述べ（ロ）に於ては徹底の境を窺ふ準備としては先つ我見を離るゝことが必要であるといふことを說いたが、其次は深刻といふことに注意せねばならない。すべての觀察を深刻にし、すべての思慮を深刻にし、すべての行動を深刻にして來ると、結局本質と偶發とを區別することが出來る。すべての形骨に眩惑せられなくて、其本質を悟ることが出來るようになれば、聽て徹底した境地を見ることになるのである。其處で徹底の境に近寄る第二の手段としては、深刻といふことの注意が何よりも必要といふことになる所が吾々の多くは、何事に對しても此の深刻といふことをすべて缺いで居るのである。隨つて本質と偶發とを區別することが出來ないのである。松陰先生が、『今の學ぶ所の四書五經は、皆聖人の學なり、然るに善の善に至らざるは、熟の一字を闕ゝ故なり。熟とは、口にて讀み、讀みて熟せざれば、心に思ひ、思うて熟せざれば、行ふ。行うて又思ひ、思うて又讀む。誠に然らば、善の善たること疑なし』と。言うて居らるゝが、要するに、深刻といふことを敎へられた者に外ならないと思ふ。徹底の境地に進む懸橋は何處までも深刻といふことである。深刻に深刻これこそは吾々の發展を啓示する唯一の方途である。參禪道學に王三昧といつて一心不亂の境を要求するのも、彼のメエテルリンクが神秘を說くに沈默を以つてしたのも、或は皆この深刻を意味するのであらうと思ふ。吾々は言語によりて、何事でも說明し得らるゝものと早

合點してゐるが、決してさうではない。メエテルリンクはかういうて居る、『言語は、二人の間に有する眞の特殊な關係を決して表はすことは出來ないものであるといふ事を認めるのである。私がいま總ての物の中で、最も嚴肅なものについて——愛について、死について、或は運命について——諸君に語るとしても、私の觸れるのは、愛でもなければ、死でもなく、また運命でもない。そして私が如何に努力しても我々の間には、言葉に出されなかつた、また言葉に出さうとも考へなかつた一つの眞理が、常に殘るであらう。然かもこの眞理こそは、假令聲無きものにもせよ、瞬間でも我々と共に住み、それが爲めに我々が全く吸入せられてしまつたものである。この眞理こそは、死や、運命や、愛やに關する我々の眞理であつて、我々がそれを知覺し能ふのは、沈默の中に於てのみであつた。そして沈默以外には、何物も如何なる意義も持たぬであらう』と。兵法の語を以つて傳ふべからず意を以つてすべしといふやうなことゝ、略同し道理で、どうしても以心傳心的でなくては物の眞理は傳はらないのである。其處で深刻に觀、深刻に考へ、深刻に働くことによつて、或る徹底した眞理を體達して來ねばならない。メエテルリンクいふ、『愛する事を知るには、まづ第一に見る事を知らなければならない。「私は二十年間、私の妹の側で暮した」と、或日一人の友人が私に言つた、「然も私は私達の母親の死の瞬間に初めて彼女を見た」と、いつた』とあるが、愛のことは暫く置き、見ることすらも深刻の觀察をしなかつた二十年間は、妹の側で暮しながら眞の妹を見ることが出來なかつたのである。メエテルリンクは又いふ、『理會しないのは我々である。蓋し我々は、我々の智力の水平以上に決して出ないからである。我々をして、單に山上の第一の雪線へまで登らしめよ。然らば、總ての不同は、我々の前へ展開せられる。地平線の純化する手によつて、平かにせられてしまふであらう。然らば、マ

アカスオーリイアスの宣言と、寒さを喞つ小兒の言葉との間に、如何なる相違があるであらう。我々をして心貧しき者であらしめよ。そして偶發と本質とを區別せることを學ばしめよ。我々は、「浮んでゐる木條」のために、深淵の種々な不思議を忘れてはならぬ。最も華かな思想でも、また最も下賤な考へでも、我々の心靈の永久の表面に皺を刻むことは出來ない。それは丁度地球を天上の諸星の間に於て見れば、ヒマラヤの高峰も、また如何ゐる斷崖も、その地球の表面に何の變化をも起し得ないと同じ事である。一回の眺め、一度のキッス、そして或る大きな目に見えぬものゝ確かゐる現存、それで總てが盡きてゐる』と。思慮するこども、深刻に思慮して來ると、神と言はんか、造物者と言はんか、宇宙の眞理と言はんか、兎に角或る大きな目に見えぬものゝ、一回の眺め、一度のキッスに接することを得ば、夫れで十分であるのである。然るを兎角理性を超越して、情緒の眞理を認むることが出來ず、且又兎角偶發と本質とを區別することが出來ないからして、種々の不徹底ゐる思慮をして居るのである。松陰先生は、『幕府一日感悟せば、則ち朝を終へずして天下平なり、諸將一日感悟せば、朝を終へずして一國治まる、下一介の士一塵の民に至りても、一感一悟家齊ひ、國治まる、疑ふべきなきなり』と。いうて居らるゝが、眞に唯一感一悟で足るのである。決して多くを望む必要はない。併し唯此の一感一悟を得るといふことが實は凡人には甚だ望み難いことで、如何にも殘念なことである。メエテルリンクは又いふ、『總べて我々に起ることは、神聖で偉大である。そして、我々はいつも大きな世界の中心に居るのである。併し我々は、常に今生れたばかりの天使の如く、戀する女の如く、まさに死なんとしてゐる男の如く、生きて行く習慣を身につけなければならない。若しも諸君が今夜死なゝければならないと知つた場合に、また單に出掛けて行つて二度と歸つて來ないと知つた場合に、諸君は最後に人々や諸々の事物を眺めやつて、それで猶これまで諸君が彼等を見たと同じ光で、それ等の物を見るであらうか 諸君はこれまで愛したとは、全く異ふやうに愛さないであらうか』と。動作することも。今生れたばかりの天使の如く、戀する女の如く、まさに死んとしてゐる男の如く、深刻なることによつて始めて徹底するのであらう。松陰先生が實心を以つて實事を行ふには、『常に身を戰場に置く思を以つてせよ』と皷吹せられたのも、これと同じ事であらうと思ふ。要するにすべての点に於て、殊に教育の点に於ても、徹底した一新生面を開かんとせば、少しく深刻に觀察し、深刻に思慮し、深刻に動作するといふことが、最も緊切な要求となつて來るであらうと思ふ。

(三) 幾微の顯現に注意すること。己に述べたる如く、徹底の境地は、之を人に傳ふることが出來ないものである。其處で徹底して居らない者は常に我見を離るゝことに注意し、且すべて深刻といふことに工夫を凝らさねばならないのであるが、其上は更に幾微の顯現に注意することが必要である。幾微の顯現のことは、第七章第四節に、眞理は平凡事に示顯せらるゝ者であることを述べ、略ほこれと同樣のことを說明して置いたのであるが、眞理の啓發といふことも、徹底の曙光を認むるといふことも、皆この幾微の顯現に注意することから、端緒を得るのである。すべて大なる事柄が始めから望まるゝ者ではないから、先づ頗る些細に事柄なりとも、これを眞に眞に徹底的に實行して見るがよい。左すれば其間に言ふに言はれない微妙の靈感に接することが幾らでもあるであらう。一度此の微妙の靈感に接することが出來ると、何をしても乎をしても同じ經驗によつて他の一層徹底した事柄が實現せらるゝやうになるのである。兎に角如何なる一小瑣事と雖も、曾て之を徹底的に實現した經驗を有せない者程、憐れな者はないのである。松陰先生が大和の國の谷三

山翁を訪はれた所が、三山翁が言はるゝには、吾充耳を以つて、默畝に講學す。喜ぶ所の者は、諸生相親愛することゝ、兄弟骨肉の如しとて、二三の例を擧げ、其事實を示されたのである。時に先生は、餘程此の事を韻淡せられ、實に有德の言であるとして、此事を屢々松下村塾の者にも咄して、是非自分の門下もさうあくてはならないと心配せられた。然るところ、其結果がよくて、新塾の初めて設けらるゝ時は、疾病艱難相扶持し、力役事故相勞し、手足の如く骨肉の如くにやつたが、又增塾の役にも其の通りで、多く工匠を煩はさずしてやることが出來、平生弟子同士が言ひ傳へ聞き傳へて互に先生の意志を實現することは、彼の廣川(薫仲舒)の門と雖とも及ふことが出來ないやうになつたといふことである。此等のことも實は却々困難な事で、松陰先生にして初めてこれが出來たことのやうにも思はれるが、矢張一般兒童に行はるゝ微妙の事柄につきても、一歩一歩其の心界の跡を察して往けが、必ずしも行はれないことでもあるまいと思ふ。唯一度や二度の訓戒で容易に行はるゝ者でもないが、兒童の微細の言動に現はるゝ眞情流露の所を、一々奬勵して之を擴大して往く時は、決して何事でも實効を擧くることの出來ぬ者はないのである。然るを從來はこの幾微の顯現に注意することを知らなかつた爲め、訓練の如きも容易に其の効果の擧げられないものと速斷し、或は兒童を無理に叱責し或は教育者自らも短氣を起して、遂には捨てゝ顧みなかつたといふやうなことも幾らもあつたことであらうと思ふ。併し根氣よく注意すれば、幾微の間に其効驗は必ず現はるゝのである。要する所は教育者夫れ自身の心定といふことが第一で、先つ自己の心を定め。然る後ち兒童の心界に顯はるゝ幾微の言動を緻密に觀察して見よ。何事も行はんとして行はれざる者は決してないのである。尤も單に理性一方に馳せて、情緒の妙味を解しないと役に立たないが、何處までも情緒の曖昧を感じつゝも幾微の顯現に注意して見ば、實に思半はに過ぐる者が發見せらるゝであらう。人情は決して冷酷の者ではない。殘忍な者でもない。唯冷酷に見えるのは、未た其の幾微を察しないからである。隨つて靈と靈との疏通が取れて居らないからである。幾微の間に於て靈と靈との親和を圖つて見ば、決して融和の出來ないものはないのである心定を第一とし、情を本とし、幾微の顯現に注意せば、如何なる徹底も味はれないことはないのである。訓練の効果を擧くる方法延いては教育の効果を擧ぐる最後の要訣は、全く此に存すると思ふ。吳々もよく吟味して、其眞意を察して見ねばならない。幾微の顯現に注意するといふことは、亦兒童の個性を觀察する上からも、最も必要の事柄である。松陰先生いふ、『王安石の新政も、其執拗の念は、釣魚の宴に餌を食ふより前にあることなり。其念常に胸中に蟠り、小事に遇へば小發し、大事に遇へば大發す。……涓々を塞がされば、遂に江海となる。兩葉を斷されば、斧柯を用んとすはかゝることをぞ云ふなるべし』と。又いふ『余頃ろ、漢書趙充國傳を讀みて、感ずることあり。傳中數萬言、力を極めて名將の畧。老臣の心を模寫す。而して其載する所、大氏神爵元年充國七十六歳以上の事にして、充國の薨は、甘露二年八十六歳の時なり。然れば充國をして、五六十歳にして死せしめば、开罕を釋るして、先零を誅するの策も、留屯田便宜十二事も、施行することなくして終らんのみ。史官尙何の處より筆を下さんや。且徒に壯士百餘人と圍を潰ふし、陳を陷れ、身二十餘の創を被るのみを書せば、一健將の事に過ぎず。然れども、此畧も此心も、其基は少うして、將帥の節を好みて兵法を學び、四夷の事を通知するの時、己に備はれり。然れば充國の能七八十にして始めて得るに非ず。特に衆人是に至つて、始めて覩るを得るのみ。云々』と。王安石の新政も、其執拗の念は釣魚の宴以前にあり。充國の充國たるは少小の時にあり。教育者の眼光は、決して平々凡々を許さないので

ある。よく兒童幾微の言動を察して、之を未發に制することを得ば、教育の効果も頗る偉大の者となるのであらう。然れども輕率粗笨善心昏つて賞せず、非心昏つて咎めずといふやうなことであつたならば、教育の効果も甚だ乏しいものである。要するに眞理は如何なる小事小節にも顯現するものであるから、注意して之を見逃さないやうにせねばならないのである。

（ホ）有無の觀念に注意すること。武教全書に、よろづのものかならずとする事なかれ。かなちずとする時は、意ありおごりありとあつて、水を見れば、則ち流れざることを思ふべし。火を見れば、則ち燒けざることを思ふ可し。國を取れば、則ち國の亡ふことを思ふ可しと。兵を用ふれば、則ち敗れさることを思ふ可しとあり。又天賴むべからず。地賴むべからず。人賴むべからず。衆賴むべからず。安きを賴むべからず。官位を賴むべからず。理を賴むべからず。兵法賴むべからず。とある。こはこれ兵學上の事にて、一見吾人に用なき事の如くなれども、此等の注意は、要するに有無の二觀念に着眼することにて、有に無を思ひ無に有を思うて、堅實と徹底とを期する心術なり。教授に於ても訓練に於ても、常に此注意あつて然る後其効果を完うすることを得るのである。然るに兎角此の心術を疎かにし、只一度や二度の訓誡で徹底したと思うたり、形を見て本質を見なかつたりするため、教授も訓練も徹底を缺ぐのである。よろづのもの必ずとする事なく細心の注意を拂つて檢討することが肝要である。孫子に、『智者の慮は、必ず利害を雜ふ。利を雜へて、務信すべく、害を雜へて患解く可し』とある。松陰先生之に注していふ、『見て事利有らざるなし。又害有らざるなし。故に事を擧るに、人皆以つて萬擧萬害、必ず爲すべからずと爲すとも、吾は乃ち講に利を雜へ、爲す所の務乃ち信ずべし。人皆以つて萬擧萬利必ず爲す可しと爲すとも、吾は乃ち講に害を雜へ、不測の患乃ち解くべきなり。是を之れ智者と謂ふ』とある。是又有無の觀念に外ならず。併せて考へねばならない。今試に萬事を兵學的見地によるとよらないとによつて、徹底上の差ある一例を擧くれば、先生いふ、『人に恒言あり、國治まれば天下平かりと、兵道を以つて之を論ずれば、未だ盡くると爲さず。漢の文景は、明主なり。其政を爲す三代以下多く見さる所にして、家給し、人足る。治平に非らずと爲さず。然れども、其匈奴を待つは、則ち敵國の禮を執り、尙ほ惴々焉として權心を失ふを是れ懼る。治平を以つて期を爲す者、決して外をして中に從ひ、夷をして華を儺れしむるに足らず。而して善く兵道を盡さば、則ち治平言ふに足らざる者有るなり』と。國治まれば、天下平なりといふは、現在の形の上たけのことであるが、未た精神の實不實は言はないのである。其處で現在は有であるけれども、將來は無であるかは分からないのである。兵道は形を論せないで、其精神を主とするのである。偶發を論じないで本質を尊ふのである。假令現在は振はないとしても將來の望が確でなくてはならないのである。兵學的の見地を以つて事物を觀察するとしないとには自ら大なる相違のある事が分かるであらうと思ふ。殊に教育の事業は、將來を豫想して掛からねばならない仕事であるから、何に乎につけて、此の兵學的の見地を以つてする事は頗る大切な注意であると思ふ。先生が

『杉は隨分多福の家なれば、拙者の身上よりは、却つて杉が氣遣なものじやないか。拙者身上は前に申す通り、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福はずいぶんあるが、杉は今では御父子御役にて何も不足のない中なれば、子供等がいつも此樣なものと思つて、昔山宅にて、父樣母樣の晝夜の御苦勞被成た事を話して聞せても、眞とは思はぬ程なれば、此先き五十年、七十年の事を篤と手を組みて案じて見やれ。氣遣なものではないか。去年の端午の客の多いのに、人は目出度〳〵と嬉貌すれど、拙者はどうも先きの先

きが氣遣ひでたまらんから、始終稽古場にかゞんで、人の知らぬ所で、獨り落涙した程の事であつた。萬一小太郎でも、父祖に似ぬやうな事が有つたら、杉の家も危い〳〵』と言うて居らるゝが、此等も先生が兵學家であつて、有無の二觀念に餘程注意して居らるゝものであると言ふ事を承知して居れば、もとより當然の事で、斯く考へなくてはならないのである。此の事を承知せずして、單に一偏の俗情を以つて之を解すると先生は如何にも神經過敏な者である。かういふことを言うては、人生は何も乎も樂はないものであるなどゝ考へらるゝのである。併し苟も堅實と言はんか徹底と言はんか、少し〻俗流に超越した見地を有し、十分効果ある事業を企てんと欲せば、どうしても斯かる見地の下に立たねばならないことであらうと思ふのである

（へ） 結語。 上來徹底に關し、（イ）徹底の境地は語ることが出來ないこと（ロ）自我を離るゝこと（ハ）深刻（ニ）幾微の顯現に注意すること（ホ）有無の觀念に注意することを述べたのであるが、實は是れたけのことを心得て居らないと、折角の綜合的學究態度のことも、求心的學究態度のことも、其味妙が分つて來ないのである。兎に角、從來教育の事も彼是と論じ盡されて居るやうではあるが、どうも議論の多い割合に實効が伴はないから、今少し徹底した理法によつて今少し徹底した教育効果を奏して見たいと言ふのが、本篇の第一眼目であつて、決して徒らに議論を好むのではない。所か松陰先生の主唱に從へば、如何にも其理法が徹底して居るやうに思はるゝのである。少々理解の出來難いやうなことがあるかも知れないが、十二分に咀嚼して、先づ其意のある所を眞に味うて見ることが肝要であると思ふのである。

第二節　主從を擇ふことの工夫について

本章の始めに於て既に之を述べた如く、學究はどうしても就實攬要でなくては、實用的にならず且つ又徹底的でないのである。其處で攬要の工夫はどうすればよいかといふに、夫れには綜合的學究態度と、求心的學究態度との二つの方法によるがよいと云ふのである。綜合的學究態度といふのは、事物を上下的に見て、其本末終始輕重大小先後緩急等を考へ、之が本となり始めとなり且つ重にして大なる者先にして急なる者のみに着眼し、其他の枝葉は所謂虛であり冗であるから、暫く之を措いて顧みないやうにする學習方法である。斯かる學究態度に於て第一に心得ねばならぬことは、主從を擇ふことの工夫で、如何なる者が主であつて如何なるものが從であるかといふに、比較的の本、始、重、大、先、急、は即ち主であつて、末、終、輕、小、後、緩、なる者は即ち從である。すべて思想の上に於ても、行動の上に於ても、事物の上に於ても、考ふる時でも、行ふ時でも、觀る時でも、聽く時でも、萬事萬端必ず此の主從を權するやうにするのが、主從を擇ふことの工夫である。斯く言ふと夫れ位な學究態度は誰でも遣つて居るではないかと思はるゝが、其實際は却々さうなつて居ないのである。其處で前節に述べた徹底といふことが起つて來るが、同じ主從を擇ふと言うても、皮想的淺薄的の事は役に立たず、眞に徹底的深刻的に其主從を擇ぶのでなくてはならない。太宰純の產語に、『（百足）（一足）に謂て曰く、子亦た行く能く乎。 曰く子自ら其百足を多とする 。子百足を以つて行く、吾一足を以つて （ 行の ）して行く。子吾より速かならず、吾れ子より遲からず。予れ子と偕に行く。子の至る所は、吾亦た至り、未た曾て後れざるなり、子何そ而（汝也）の多足を以つて、吾寡足を笑ふを得んや。以吾觀子、子の九十九、是豈に長物にあらざる 、子盡く之を用ゐて、以つて行く、亦た煩しからずやと、蛇側に在り曰く、 爾亦た其一足を足れりとして、夫の多足を煩しとする乎、予は無足を以つて委蛇して行く、予れ子と偕に行く、子徐なれば予亦た徐、子疾なれば予亦た疾、子の至る所に吾亦た

至り、未た曾て後れさるなり、水を渉れは、則ち渉り、木を緣れば、則ち緣り、足らさる所なく、能はすして止むることなし。由吾觀之、子の一足亦た長物たるのみ』云々の例が、引用してあつたが、もとよりこは一つの譬喩に過ぎないが、矢張道理は此の通りで、隨分と深刻に考へて來ると、主と思つて居つた者が主でなくて眞の主は他にあるやうなことが幾らもあるから、實際の上にては此の主從を擇ぶといふことは、却々工夫を要することで、大事小事徹底すると徹底しないのとは、全く此の主從の見方に精疎があるからである近時教育上の考案も施設も、此の主從を見分くることに注意せずして『矢鱈に多種多樣のことを計劃し是を以て誇りとなし、世人も夫れを見て稱讃して居るのは甚だ謬つたことでは、あるまいか。固より或る範圍或る種の事は欲ぐに欲がれないことであらうが、一面には能力の經濟を考へ、主目的に向つて主力を注ぐ底の工夫がどうしてもなくてはならないこと丶思ふのである。所謂多角形主義といふことも、一面には考へて居らねばならないことであるが、一面には尖塔的主義も大に必要のことである。明治時代の教育は、一面多角形主義であつた。大正の教育は尖塔的主義によつて實際の効果を占むることの工夫がより多く必要ではないかと思ふ。併し尖塔式は間口が賑やかにないから、俗向がしかいことや、時に或は誤解を招く位のことは少々あるかも知れない。併し其等のことはどちらでもよいとして、兎に角學究の徹底教育の徹底と言ふまとから言うと、結論はどうしても主從を擇び、虚を去り、冗を略し、實に就き、要を攬ふることにならなくてはあるまいと思ふ。尤も茲に一言辯して置くが、余が言ふ教育の徹底とは、所謂普及の意味を主とするばかりではない。人物の養成といふことを主として言ふのである。換言すれば教育の幅のみを言ふのでなく、深さを言ふのである明治の教育は幅即ち普及の意味に於ては頗る成効したものであらうが、深さ即ち心を錬つて人物を造くる意味に於ては、幅のそれに及はないものがありはしかいかと思ふのである。余が動もすれば知識の教授を輕んずるが如く見え、或は情育意育の訓育を高調するのも、實は其の根抵に於て右等の意味の存するによることを豫め承知して貰いたいと思ふのである。眞に人物を養成するといふこと換言すれば眞に人格のある人を造ることが、從來どうもよく分らかかつたのである。要するに本編に於て使用する教育教育といふ語の意味には、皆この人物養成といふことを深く加味して居るから其含みですべてを批判して貰いたいのである。通常教育といふ語に於ても無論此等の意味を含まかいことはなからうが、其實は知識の傳授乃至は多少の禮儀作法を養ふことゞ主てあつて、眞に兒童の心界が陶冶せらるゝ深さは甚た少くなからうかと思はるゝのである。固より此事は餘程六ヶ敷いことではあるが、余が力說せんとする所は此の点にあるのである。些か說明か岐路に入つたが序であるから此事を一言辯して置いた次第てある。さて本題に立飯つて、主從を擇ふには如何なる工夫を要するかといふに、第一には其選擇の標準を定めねばあるまいと思ふ。選擇の標準は事々物々によつて異なることかれば、豫め概言せられかいけれども、倫理的、國家的、生活的、實用的といふことは、何事にも免れない標準の要素であらうと思ふ。尙ほ夫れに加味すべきは四圍の事情並に事機時勢等をも考慮することである。而して更に考へ置くべきことは、第七章第一節に述べたる如く、理論的研究、學術的研究と、事實實際を主とする場合とは、其適用上に大ある相違があるから、其等のことをすべて考慮したる上之が選擇、即ち本末終始輕重大小先後緩急を見て來ねばならないといふことである。今之を實例に就いて言ふ時は、二宮尊德翁が、如何なる道德說の唱へらるゝにも拘はらず、唯至誠勤勉分度推讓の四綱領を選擇せられたるが如き、尙ほ又松陰先生の士規七則及ひ松下村塾の教育目的の如き、何れもよく

主從を區別し、其主目的を選擇したる者と言はねはならない。松下村塾の教育目的は、僅か三個の綱目である。其一は孝悌忠信先つ里閭の風俗を一洗すること其二は君臣の分を正して大義名分を明かにすること其三は華夷の辨を明かにすることである。尊德翁の四綱領といひ、松下村塾の三目的といひ、一見甚だ粗大のやうであるが、孰も其時勢に適應し、其影響の大なることは今更多くを語る必要がないであらうと思ふ。士規七則が亦如何に切要の德目を見拔いた者であるかは、今以つて說明を要しないことゝ思ふ。右の如く苟も實用的にして徹底的ならしむるには、是非大事小事皆主從を擇び、比較的主なる者に向つて力を集注することが事功を奏する上に於て最も切要の工夫であると言ふことは、十分に了解の出來ることであらうと思ふ。然るに翻つて吾々の實際を見れば、兎角網羅的列擧的に事物の大小悉く數へ來らなければ、どうも氣が濟まないやうな傾向にあつて居るのである。夫れには西洋の分析的學智態度の餘弊を不知不識に蒙つた結果であらうと思ふ。學術的の學究態度としては、網羅的列擧的のこともとより惡しきにはあらざれども、實用的實際的の上からは、思ひ切つて其枝葉を芟除してしまふにあらざれば、どうしても徹底が期せられないのである苟も事効を重んずるものは、この主從を擇ふことの工夫に最も深刻の注意を拂はねばならない。主從を擇ぶといふことは、教授及び訓練の徹底上に於ても頗る考慮を要することである。訓練の徹底しない原因の一つは、教材に對する教授要項の主從が明かにあつて居らないからである。訓練の効果の擧らないのは、訓練項目の主從が明かにあつて居らないからであらうと思ふ。其の外一場の談話に於ても、一篇の文章を作る上に於ても、常に思想の主從を判明にすることは、徹底を期する秘術の一つではないかと思ふ。兎に角人としても色彩の判明しないのは、其思想の主從が定つて居らないからである。色彩の判明しない者は、教育者としては適當ではあるまいと思ふ。斯くの如く主從を擇ふといふことは、萬事萬端に影響を持つのであつて、綜合的學究態度の一大要件である。篤と熟考して見るがよい。

第三節　統一といふことについて

綜合的學究態度の一工夫としては、主從を擇ふことが必要であることは、前節に於て既に之を述べた所であるが、既に主從が擇ばれたとすると、更に之が統一を圖り、必ず之を一本に歸着せしめて置かねばならないのである。松陰先生はすべての事を一本に歸着せしむることに、餘程苦心せられたものと見受るのである。二個乃至數箇の思想を並立して置くと、實は其の徹底が歸せられないから、必ず之を一本に歸着せしむるといふことは、事物の徹底を歸する上頗る大切の注意である。孟子滕文公上第五章、天之生レ物也、使二之一レ本而夷子二レ本故也。の割記に於て先生いふ『一本二本と云ふことは、誠に切要の事なり。一本は天地の常理、皇國の大法にして、漢土聖人の至教なり。事々物々に就て熟考すべし』と。又告子下首章に於ては『禮中にも輕重あり、食色各輕重あり、物皆然り。是を以つて一本の義を喩るべし。(滕文公上末章、天之生レ物也、使二之一レ本、而夷子二レ本故也)君子父子の五倫も、遇ふ所、隨ふ所によつて輕重あり。此の輕き者を以つて、彼の重きに比せば、彼固より重し。彼の輕き者を以つて、此の重き者に比せば、此れ固より重し、故に輕き者常に輕あることなし。時有つて重し。重き者常重あることなし、時有つて輕し。是亦權の義、時中の義なり。合せ考ふべし』と。又盡心上第二十六章の割記には、『權の一字是れ中を執る法にして、全章の歸宿なり。聖人の道は人倫を明にするにあり。明の工夫是れ權の功あり。君臣父子夫婦長幼朋友の五つの物親義別序信の五つの事、是れ人倫なり。然れども後漢の趙苞の如く、三國の徐庶の如く、不幸にして人倫の

變に遇ひたる時は、輕重を衡り、或は仕を辭して親に隨ひ、或は國に殉して家を顧みざる、皆時と勢とに因つて、義を生ずる是れ權なり、故に忠孝の道を學ひて、權の字に心付かざれば、不忠不孝に陷ること多し。余常に是を憂ふ』と。以上の如く一本は天地の常理皇國の大法にして、漢土聖人の至教なりといひ、尙又禮中にも輕重あり、食色各輕重あり、物皆然り。是を以つて一本の義を喩るべしといふ。而して又權の一字是れ中を執る法にして明の工夫是れ權の功なりといふ。是を以つて先生が如何に一本といふことを重せられ且つ又權の工夫を大切なものとして居られたかといふことが分かる。然るに更に又次に引く所を見ば、先生が實際上に於て此の應用を如何に工夫して居られたかといふことも分かるであらう。盡心下第廿四章の注に、『余常に五倫五常を以つて合せ云はんと欲して、其據を得ず。此章に於て始めて得たり』と。又士居幾之助に與へられた書簡には、『僕吳起が書を讀み、儒服兵機を以つて魏侯に見ゆるに至つて、未た嘗て其識を墮とせずんばあらざるなり。起や特に儒兵の分二たるを見て、其原の一たるを察せず、徒に其機を知つて其道を曉らず。吾是を以つて其陋たるを知る』と。武教講錄には、『先師(山鹿素行)人を教ふるに忠孝武の三道鼎立以つてせり。然れども忠孝は即ち武なり。武は即ち忠孝なり。忠孝の心を體とし、武を以つて行に發して用とす、と云うて可なり。武は所謂戈止の武にして、文武の統名あり、彼の偏武の謂に非ず、又腐儒の知る所にあらず』と。以上の引例により、先生が五倫五常を並稱せずして合せ言はんとせられたこと、尙又文武兩道と並稱せずして武を以つて文武の統名として居らるゝことが分るであらうと思ふ。尙ほ公孫丑下第十三章、彼一時此一時なりの所で、先生は次のやうに言うて居らる。『君子の心兩般あり、一般は己を處するなり。其己を處するは、貧賤の極り、艱難の甚しきと云ふとも、雍々是に處り、一も天を怨み人を尤むる所なし、一般は世を憂ふるなり。其世を憂るは、天下を視ること吾家の如く、萬民を視ること吾子の如く、世亂れ民苦むを視ては、食うて味を甘しとせず、寢て席を安んせざるに至る、彼一時此一時なりと云ふは、此兩般なり。然れども兩般實は一般なり。故に天下萬民を視ること、吾家吾子の如きに至る。天下萬民を視ること、吾家吾子の如し、故に貧賤艱難心に關することなきに至る。若し夫れ、情を好み爵に牽され、涎を美利に流すの徒、安そ天下萬民を顧るものあらんや。故に云く兩般實は一般なり』と。又盡心上第九章の劄記に『窮不レ失レ義に至つては、切に吾が身上の事なり。勵まざるべけんや、吾甲寅以來、身を關するに木を以つてし、體を縛するに索を以つてす。檻輿三百里を走り、　六百日を涉る。今日禁錮稍　ふと云ふとも、足門徑を出てず、親近の外、敢て他人に接せず、亦窮と云ふべし。然とも其志に至ては、松本一邑に一二の奇傑を生じ、以つて忠孝の首天下の唱とならんことを欲す、果して義を失はざるか。亦失ふこと多きか、自ら信すること能はず。故に孟子を把つて、玩索して其當否を質さんと欲す、獨善の義、滕文公下篇第四章に、入則孝。出則悌。守=先王之道=。以待=後之學者=。と云ひ、本篇下章に、其子弟從レ之。則孝悌忠信。と云ふ、合せ考ふべし。蓋し獨善と云ふは、頑然獨處世に接せざるの謂に非らず、特に兼善=天下=に對して其及ふ所の小なるを云ふのみ。然らずんば、子弟從レ之。待=後之學者=。皆獨善の事に非らざるか、何そ其然らん、余野山獄に於て同囚富永德宇有隣が爲めに名字說を作る。云へることあり、有=獨善之志=。而後有=兼善之業=。又云ふ、大舜自爲=耕稼陶漁=。乃有=都君之稱=。孔子困=於魚衛陳蔡=。乃有=三千之徒=。と有隣は倔强の士、議論相下らず、然れとも、深く此說を以つて至言とす』云々と、前例に於ては、兩般實は一般なりといひ、本例に於ては、獨善の志有つて後に兼善の業ありといふ。要するに萬法は一に歸す。然るを兎角

二見の相に離るゝことの出來ないのが、吾人の徹底を缺く主なる原因である。上來述べたる如く先生は一本の論に基き、すべての思想に於て二見の相に離るゝことに注意して居らるゝといふことの大要が推測せらるゝであらうと思ふ。これを今吾が教育上について考えて見るに、教育の思潮も却々複雜なものである。假りにて乙竹岩造氏の著現代教育教授の思潮より其題目だけを撰び來つて見ても、(一)勤勞作業教育の思潮(二)藝術教育問題(三)技能教授研究の進歩(四)美的教育思潮(五)社會的教育學說(六)個人的教育學說(七)兒童本位主義(八)道德的教育學說(九)復活せる品性陶治論(一〇)人格的教育學(一一)教師人格重要說(一二)公民教育問題(一三)モンテソリー法(一四)教授段階研究の進歩(一五)鄉土主義の論爭(一六)自治訓育問題(一七)事實的研究の進歩發達と陶治的精神の發揮徹底といふやうに、實に種々雜多の問題があるのであるが、問題は之に限る譯ではない今後たりとも、種々の問題が起つて來て、紛糾錯綜した思想界になるのであらうと思ふが、要する所、此等の問題をよく解決して思想の統一を圖るといふことが、何より肝要なことであらうと思ふ。若も然らずして唯斷片的部分的の教育說に惑ふ時は。頗る偏重偏輕の教育を來して、不徹底の教育となることであらうと思ふのである。現時の思想界が動もすれば並行主義に傾いて、松陰先生の考へられた如く一本論にならないことが多くはないかと思ふ。第一に心身の關係論であつても、心身の並行的發達を主張するものが多くて、更に身の本は心であるとまで考へないやうに思はれる。固より身體の發達を希望することは言ふまでもなきことであるが、更に身の本は心であるとまで考へて來ると、更に其上の教育を要求して來ることになるのである。其上の教育といふは何かといふに、そは氣育である。松陰先生は此の氣育を頗る重んじて居らるゝのである。第二は形式的陶治が重いか實質的陶治が重いかといふ問題であつても、矢張並行的に見て居るものが多くはないかと思ふが、先生は形式的陶治を頗る重く見て居らるゝのである。詰り教育は心の教育であるといふのである。先生いふ、『古の教ふる所以を考ふるに、精微高遠の論は、從つて之を仰裁して、實行に本つけ、文字訓詁の學は、從つて之を挫折して精義を喩し、志の善なる、行の美なるは、從つて之を誘掖激勵して、凡そ教を施す、一に躬行心得に皈せしむ。故に彼四等の人皆學んで中に至ることを得ん。今の教ふるものは然らず、之が爲に句讀を授くるのみ、之が爲に講解を資くるのみ。學者の心如何と問はず、書を讀むこと精に、書を講ずること明かなる者は、目して才とし、能とす。然ること能はざるものは、心淳良忠實なりと云ふとも、亦目して魯鈍爲すことなしとせず。其非心未た嘗て格さず、其善心未た嘗て勸めず、大に古の人を教ふる法に異なり、而して安して以つて常とす。學ふものも亦此を以つて師を見て異とせず。是に於て實學の傳地に墜つるに殆し』と。教育が文字句讀の教育でないことは勿論であるが、事實は或は之に遠からざる者が多いではなからうかと思ふ。先生の此文を見て吾人は訓育の一層大なることを今更ながらに感じたやうな次第である。第三は教育は主として心を教育せねばならないものであると氣が附いたとして、知情意の三育を如何に見るかであるが、此等の場合に於ても、知情意の三者を並行的に見て居る者が多くはないかと思ふ。先生は意育即ち氣育を最も重く見て居られ、其次は情の重んずべきことを述べられ、結局意志感情知識といふやうな順序に見てよからうかと思ふのである。更に知育に於て重んずべきことは、學習態度に注意せられたやうである。此外教育上から見ても、先生の意見の紹介すべき者が多くあるが、今は先生の一本論即ち統一論は、教育上の問題に及んでも終始一貫して居ることの一二を述べたに外ならないのである。以上は單に思想の統一だけを述べた、併し統一といふことは思想のみに限らず何物に對しても頗る大切なことであ

るが、動もすれば一般の餘程閑却して居る所であるから、能く〳〵注意して其妙味を會得せねばならぬいこと〻思ふのである。

第四節　反說的の學習方法について

綜合的學究態度の工夫として、第一に徹底を說き第二に主從を擇ふこと、第三に統一を說いたのであるが更に全局を大眼一視して、事物の大本若くは念頭を見て來るには、如何なる學習法を要するかといふに、そは反說的の學習を要するのであるから、この學習方法について少しく之が說明を試みんとするのである。松陰先生いふ。『井を掘るは水を得るが爲なり。學を講するは道を得るが爲なり。水を得ざれば掘ること深しと云ふとも井とするに足らず。道を得ざれば講すること勤むと云ふとも學とするに足らず。因つて知る井は水の多少に在つて掘るの淺深に在らず。學は道の得否に在つて勤むるの厚薄に在らざることを』と。又某父執に復する書に、『矩方茲に來つて業を修む、聖經賢傳講せざるに非らず、載籍戰策閱せざるに非らず、而して名儒巨師の門に躋り、其緒論を聽かざるにあらざるあり、然れども、未だ斷然斯業の規模範傾、果して安に在つて、著實なる下手果して安に在るかを知る能はず。矩方愚劣の極と雖も、未た嘗て少しく期待する所無きにあらざるなり』と。學を講する道を得るにありといひ、斯業の規模範傾果して安くに在つて、著實なる下手果して安くに在るかといふ。蓋し學究者の理想は、全く斯にあるのではあるまいか。余は第一章に之を述べた如く、二十有餘年間この教育に從事し。寸暇を以つて絕えず教育の學說を研究して見たが、どうしても著實なる下手の安くに在るかゞ分からなかつたのである、併しそれには學習の方法上にも工夫があるのであつた。然らば學如何にせば果して其源に逢ひて下手の所を知ることが出來るかといふに。先生は武教全書を讀むといふ、文に『源に泝る者は必ず其流に由る。堂に升る者は、必ず其階に由る。其道に由れば則ち遠しと雖も至るべし。其統に由れば、則ち繁と雖とも理むべし。故に學者の務め、流階道統果して何れに在るかを知り、而して焉に由る所以を知るより急なるはなし。吾嘗て竊に先師（山鹿素行）の旨。學者の弊を通考し、而して講習之れ自ら次序あることを知る』といひ武教講錄には『先師の學は、博より約に入る者にして、其學則に至つては約より博に達する如くしたる者あり、學者博約の際に於て、得ることあれば、左右原に逢ふ。何の疑かあらん。先つ先師の博を知らんとならば、一部の語類を讀みても知るべし。而して其約は乃ち聖教要錄にあり。是れ經術の博約を云ふ。其兵法に於けるを見んとならば、末書結要本、雌鑑雄鑑用法より、漢土諸家の說を約し、雄備集とおし、武教要錄となし、更に約して武教全書となす。然れども學者尙其約を知らさらんことを恐れて、門下の諸子乃ち總目錄を編するなり。若し夫れ、全書中編々自ら博あり、約あり。而し其最も約なち、全部の歸宿は、序段（全書の序文）の謀略智略計策戰法の三戰にある。是なり是を以つて、先師の學則を知るべし。學者苟も全部を精究し、然る後孫吳尉李の書に及ひ、又和漢古今の典籍を博覽し、本末を尋ね、源流を窮る時は、經史子集幾萬卷の書、皆全書八卷の註脚にして、即ち謀知計三戰の註脚となり。更に約して、吾方寸の外に出ることなきを知らん。是を學の極功とす。全案より此見を持す。嘉永戊申、明倫館再興の時、諸學藝皆等級の次第を定め、試業に便すへき旨あり。就中兵學は、一騎將略等を以つて是を分つへしとのことなり。余乃ち四等を定む、初等は幼童句讀の科なり。中等は先師の書を講究する科なり、此等更に二科を分ち、畧長沼氏傳授の意に倣ひ、小學及び侍用。武功、撰功、法令、斥候を以つて一騎前の學とし、全部（武教全書）一部を通して、研究するを主道將畧の學とす、初中二等は乃ち

所謂約學なり。上等は諸家渉獵の科にして、乃ち所謂博なり。最上等は諸家の博を窮め、全書の約に反る科にして、所謂左右原に逢ふの地位に至り、兵學の大成する所なり。博約の說は、孔孟以來己に揭て學則とす、孔子曰、君子博學二於文一約レ之以弗レ畔矣、夫。顏淵曰、夫子循々然、善誘レ人、博レ我以レ文、約レ我以レ禮、孟子曰、博學詳說レ之、將二以反說一レ約也。孔孟の說斯の如くにして、孟子反說の意、尤も味ふべし。是れ余が先師の學則を窺ふ所あり』といふ。或は語類といひ、或は聖教要錄といふ。其他兵書に關する實物を見さる者には、本文の意十分に分かり難き嫌あるべしと雖も、要する所、素行の學則は、約博反約。の階段を踏むものにして、武敎全書の序にある謀畧智畧計策の三事は、全部の歸宿する所にして、兵學の極功即ち反約の極所ありといふのである。吾人は是を以つて知る。學習の方法は必ず約、博、反約、の階段によるべきものであつて、殊に孟子のいふ反說の所が最も味ふべきことである。己に博己に詳ありと雖も、其約に反つて源に逢ふことを知らない時は、遂に渉獵と拘泥との弊を免れることが出來ないのである。故に約に反へること、即ち孟子反說の意は學者の最も工夫を要する所、學の源に逢ふ所である。すべての學問研究が此極所に到達しない場合は、掘ること深かしと雖も井とするに足らないのである。松陰先生は此意味に於て、學は肯綮を得るにあり』とも云うて居らるゝが、獨り學のみならず、都べて何事でも要領を得て源に達することに注意せねばならない。前にも述べたことのある如く、茲でも本質と偶發を區別することが必要である。兎角吾々は形骸に捉はれて、本質を見出すことが出來ないのは、この反說的の學究態度に注意しないからである。本章の第一節(八)に述べ如く、少し深刻といふことを顧みて、常に事物の本質、更に換言すれば念頭を見出すことに工夫して來ないと、實は人生の眞意を解すること能はずして、一生を畢らねばならないやうな憐れ果かかきことにおるであらうと思ふのである。

第五節　氣の一字を顧みよ

山鹿素行の武敎全書の序に、『夫れ士の法品多し、然れども其本三に出でず。謀略、知略、計策是あり。謀畧と云ふは、心をたゞし、氣を養ひ、城取陣取備立共に理にあたれる是なり。孫子曰、經レ之以二五事一云々。知略といふは、外を知つてはかるなり。人に善惡あり、格に眞草輕重あり、是を知つて其處にしたがひ、用ふるなり。孫子曰、校レ之以二七計一云々。計策といふは、手たてをなして全く勝をいふなり。或は味方を入れ、或はかへり忠の者を作り、格によつて虛實をかんがへ、やすきに勝つ是なり。孫子曰、兵者詭道也云々。兵法の用處千變萬化なりといへども、此三本をいでず。此三つを知つて、常に工夫愛用する人は、兵法の大理にかなふべし。しからずんば、たゞ武功をたのしみて、士の大道を知らざるなり』とあるを松陰先生はいたく稱讃して、次きのやうに言つて居らるゝのである。『序段は、謀畧、智畧、計策の三つにて、全部(武敎全書全篇をいふ)の歸宿する所を約說して、篇首に置く者なり。孫子始計篇と全く相表裏し、古今數ある大文字なり、余を以つて是を窺へば、一篇の大學に比するに、更に著實の該備を覺ゆ』と。或は古今數ある大文字といひ、或は又一篇の大學に比するに更に著實該備を覺ゆといふ。是を以つて謀畧智畧計策といふことを、先生が如何に大切に考へて居らるゝかといふことが推して知らるゝであらうと思ふ。然るに又『學者苟も武敎全書の全部を精究し、然る後、孫吳尉李の書に及び、又和漢古今の典籍を博覽し、本末を尋ね、源流を窮る時は、經史子集幾萬卷の書皆全書八卷の註脚にして、即ち謀智計三戰の註脚となり、更に約して吾方寸の外に出ることなきを知らん』と。言うて居らるゝので、謀智計三戰の大切な理由も分るであらうと

思ふ。抑も謀畧とは己を知ることにして、知畧とは彼を知ることなり、計策とは應變である。天下古今の事觀し來り觀し去れば、要するに己を知り彼を知り應變の三者の外に出つる者はないのであるから、若しも此三者にして宜しきを得ば、天下如何なる事と雖も思うて成ならないことはなく、企たてゝ調はざることはないといふのである。而して己を知り彼を知り應變を計ることは、誰かするかといふに、そは吾我が一つの心にあることなれば、更に約して吾が方寸の外に出ることなきを知らんというて居らるゝ。如何に修身齊家治國平天下を口にするも、終局の所が己を知り彼を知り應變の三事に在つて、更にまた此の三事は吾が方寸の中にあることを體達しない時は、之を事實に演することが出來ないのである。其處で先生は此の三事を以て一篇の大學に比して、更に著實該備を覺ゆと言はれた者であらうと思ふ。右により謀畧智畧計策、換言すれば知己知彼應變の三事が、如何に大切な事柄であるかは其大要が承知せらるゝことゝ思ふが、更に轉して己を知り彼を知り應變といふことは、如何なる工夫を要するかといふに、そは太宗問對下に、『太宗曰く、司馬法に云ふ、國大なりと雖とも、戰を好む時は必ず亡ぶ。天下安しと雖も、戰を忘るゝ時は必ず危しと。此も亦攻守一道なる。か靖曰く、國を有つ者、家を有つ者、曷んぞ嘗つて攻守を講せずんばあるべからず。夫れ攻むるとは、其城を攻め、其陣を擊つのみに止まらず、必ず其心を攻むるの術あり。守る者は、其壁を完ふし、其陣を堅ふするのみに止まらざるなり。必ず我が氣を守つて待つ有るあり。大にして之を言ふ時は、君たるの道なり。小にして言ふ時は、將たるの法なり。夫れ其心を攻むる者は、所謂彼を知る者にして、吾が氣を守る者は、所謂己を知る者なり。太宗曰く誠なるかな。朕常に陣に臨んで、先づ敵の心と己が心と孰か審かなるかと云ふことを料つて、然る後に彼れ得て焉を知るべし。是を以つて、彼を知り、己を知るは、兵家の大要あり。今の將臣未た彼を知らずと雖とも、己を知る時は、則ち安そ利を失ふ者あらんやと。靖曰く、孫武の所謂、先つ勝べからざるを爲す者は、己を知る者あり、以つて敵に勝つべきを爲す者は、彼を知る者なりと。又曰ふ、勝つべからざるは、己に在り。勝つべきは敵にあり。臣斯須も敢て此誡を失はずと、太宗曰く、孫子三軍氣を奪ふべきの法をいふ。朝氣は鋭とし、晝氣は惰たる。暮氣は歸る。善く兵を用ふる者は、其鋭氣を避けて、其惰歸を擊つと云ふは如何。靖曰く、夫れ生を含み、血を禀る者、皷して鬪爭を作し、死すと雖とも省みざる者は、氣然らしむるなり。故に兵を用ふる法、必ず先つ吾が士衆を察し、吾ごの勝氣を激すれば、乃ち以つて敵を擊つべし。吳起が、四機も氣機を以つて上となす。他道なし、能く人々をして自ら鬪はしむれば、其鋭當ること莫し。所謂朝氣の鋭きは、時刻を限つて言ふに非ず。一日の始末を擧げて喩と爲すなり。凡そ三皷して敵衰へず、竭くさゞる時は、則ち安んぞ能く必ず之を惰歸せしめんや。蓋し學者徒に空文を誦して、敵の爲に誘はるゝ所となる。苟も之を奪ふの理を悟る時は、則ち兵任すべし』とあつて、其心を攻むる者は、所謂彼を知る者にして、吾が氣を守る者は、所謂己を知る者なりといふ。要するに己を知り、彼を知るといふことは、彼我の心理狀態を窮むることである。之を攻守について言ふ時は、攻むるといふことも、其城を攻め其陣を擊つのみに止まらず、必ず其心を攻むるの術あり。守るといふことも、其壁を完ふし其陣を堅ふするのみに止まらず。必ず吾が氣を守つて待つあるの術ありといふ。其處で攻守のことも詮し詰めると、彼我心術上の問題に關することが多いのである。攻守のことを彼我心術上の理合であると觀し來る時は、結局攻むるといひ守るといふ兩道があるのではなく、只一道である。そして其歸着する所は氣の論になるのである。敵であれ味方であれ、要するに氣の充實して居るものが

勝を制し、氣の充實してゐない者が敗を取ることゝなるのである。若しも敵の氣が強くて味方の氣が弱い時は、其氣を挫いて勝を制するのであるから、其心術宜しきを得ば、戰は勝たないことはないといふのが、兵術の根本原則であるかのやうである。以上要するに己を知り彼を知るといふことも、攻むるといひ守るといふことも、皆彼我の心理作用を窮め、氣の理合を論するのであるから、是に於て吾人は二つの結論に到達することが出來ると思ふ。其一つは兵學といふものは一種の心術を論ずるもので靖の曰へる如く『國を有つ者家を有つ者曷んぞ嘗て攻守を講せずんばあるべからずや』であることゝ、今一つは氣の一字が如何に人事のすべてに向つて大切な事柄であるかといふことである。或は謀知計の三戰といひ或は知己、知彼、應變といふ。而も其終局は氣の一字に歸結して來るのである。先に引用した太宗問對中に、朝氣暮氣の論があるのも、畢竟は氣機の大切なることを述べたものに外ならぬ。綜合的學究態度の結論として、吾人は此の氣の論を以つて終局の到達点であると信ずるのである。氣の論たるや、夫れ斯くの如く重大な問題であるにも拘はらず、之を我が教育上に於て、頗る等閑に附して居る嫌のあるのは實に殘念なことである。松陰先生は、流石兵學的見地に立つて居られたからでもあらうが、この氣を養ふといふことを頗る重要視せられた。以下更に養氣の大切なることについて、聊か先生の說を引用して見やうと思ふ。先生いふ、『凡そ人は浩然の氣なければ、才も智も用に立つ者に非らず。此氣は血氣客氣に非らず、人の本心より靄然と湧出し、如何なる大敵猛勢にも惧れず、小敵弱勢をも侮らず、如何なる至艱大難をも恐怖せず、宴安逸樂にも解體せず、確乎として守る所あり、奮然として勵む所あるの氣是也』と。又孟子の公孫丑上第二章、至大至剛。以レ直養而無レ害。則塞二乎天地之間一の割記にいふ、『此一節最詳に讀むべし。至大とは浩然の氣の形狀なり。推レ恩之足二以保一四海一と云ふも、即ち此氣なり。此氣の蓋ふ所、四海の廣き、萬民の衆きと云ふとも、及はざる所なし、豈大ならずや。然れとも、此氣を養はざる時は、一人に對しても忸怩として容さる如し。況や十數人に對するをや。況や千万人をや。蓋し此氣養うて是を大にすれば、其大極りなし。餒して是を小にすれば、其小亦極りなし、浩然は大の至れるなり。至剛とは浩然の氣の模樣なり。富貴不レ能レ淫。貧賤不レ能レ移。威武不レ能レ屈。と云ふ。即ち此氣なり。此氣の凝る所、火にも燒けず水にも流れず、忠臣義士の節操を立る、頭は刎られても、腰は斬られても、操は遂に變せず。高官厚祿を與へても、美女淫聲を陳ねても、節は遂に換へず。亦剛ならずや。凡金鐵剛と雖も、烈火以つて鎔すべし。玉石堅と雖も、鐵鑿以つて碎くへし。唯此氣獨り然らず。天地に通し、古今を貫き、形骸の外に於て獨り存する者、剛の至に非すや。至大至剛は、氣の形狀模樣にして、以レ直養而無レ害は、即ち持二其志一無レ暴二其氣一の義にして、浩然の氣を養ふの道なり。其志を持つと云ふは、吾が聖賢を學はんとするの志を持詰て、片時も緩かせなくすることなり。學問の大禁忌は、作輟なり。或は作し、或は輟ることありては、遂に成就することなし。故に片時も、此志を緩かせなくするを、持二其志一と云ふ。（余辛亥の歲、初て象山翁を見る、翁漢學蘭學、各日の半を以つて修學すべきことを敎へ、因て作輟することは是其大禁忌なりと云へり。是常言と雖も、余深く耳底に存して、今に至るまて象山を憶ふ毎に、必す此言を思ふを以て、偶然此ところに發せしなり。）以レ直養と云ふも、同し工夫にて、平日する所、悉く直道に外るゝことなくして、是を以つて此氣を養育することなり、無レ暴二其氣一と云ふは、即ち無レ害と云ふと同し、害すると云ひ、暴ふと云ふ、二樣あり、一は私欲を肆にし、直道を以つて志を持することを忘るゝ時は、自ら省みて愧る所あり、大に氣を暴ひ害するなり。是れ即ち下節の所謂不レ

耘苗者也、二は浩然の氣の至剛は、爲す所道義に合ふよりして、自ら生ずる者なり、然るに、道義に合ふと合はぬとをも考へず、向見ずに大に剛となさんとする時は、一時は我慢に任狂暴粗豪を以つて、剛も大もなすべけれども、遂に愈自ら省みて愧る所あり。武田信玄の、終身論語を讀むこと能はざる如き、是れ最も氣を暴ひ害するの大なる者あり。是れ下節の所謂揠苗者あり。塞二乎天地之間一と云ふは、其效驗を云ふあり。浩然の氣は、本是れ天地間に充塞する所にして、人の得て氣とする所なり。故に人能く私心を除く時は、至大にして天地と同一體になるなり、今吾れ一言一行の細よりして、本二諸身一。徵二諸庶民一。考二諸三王一而不レ謬。建二諸天地一而不レ悖。質二諸鬼神一而無レ疑。百世以俟二聖人一而不レ惑。動而世爲二天下道一。行而世爲二天下法一言而世爲二天下則一。と云ふ如くあれば、天地古今に充塞すと云ふべし。浩然の氣は、古來聖賢相傳て孟子に至り發明する處、學者に於て最も切實あること故に、特に是を詳にす』と、前例に於ては、浩氣の氣なければ才も智も用に立つ者に非らずと云ひ、後の引例には、此氣を養はざる時は、一人に對しても忸怩として容さる如しと云ひ、更に又人能く私心を除く時は、至大にして天地と同一體になり、遂には天地古今に充塞すと云ふ、氣の顯現たるは實に靈妙ではあいか。此の靈妙ある氣を養うて、大にすれば其大極りなく、餒して是を小にすれば、其小亦極りなしと言ふ。教育上最も注意ずべきは、此の氣を養ふといふことではあるまいか。吾人は既に戰術の上に於ても、心術の上に於ても、氣の一字の頗る大切なることを知り、併せて其異常ある靈妙を悟る。故に益々以て養氣の大切あることを痛切に感ずるのである。養氣の方法に關する詳細の注意は、別冊『予が信する教育方針』の第七に說述し置きたるを以つて、今は之を省き、更に山鹿素行の士道より養氣存心の說を抄出し、養氣の大切なることを尙一層明かにして置がうと思ふ。士道にいふ、『人は生れ付て、其宜しき所あるものなり。然れども養ひ存する處あらざるの輩は、一方は明月白日の如くなれども、又一方黑闇無差別の處出來るものあり、故に人々我得たる所を置きて、其くらき所を養うて、氣禀を今日に變化せしめずしては、人の人たらざるなり。孟子我善養二浩然之氣一と論せり。浩然の氣と云ふものは、孟子も難レ言と述べられたるが故に、今以つて此の如しと云ふに處なし。唯心は氣に因つて、或は動機し、或は困苦するものなれば、此處を能く心得て、常に道義を以つて、是を養うて饑えざる如くならしむるにありと知るべし。此氣を養ひ得る時は、至大至剛にして、能く萬事の上に伸ひて、物に屈する處あるべからざるなり。心は氣に因るがゆえに、氣能く靜なる時は、心則ち靜なり。氣動するときは、心こゝに動す。是れ心氣兩樣にならざるを以つて、更にへだゝる所なし。心は內にして、氣は外ゝ動するものなれば、先つ氣を養ひ得るを、修身存心の本とすべきなり。養と云ふは、我天資の氣の過不及を考へはかつて、其過きたるを損し、其不及をそだて、事物の間にをいて、動靜宜きに相かゝふ如く仕るべきなり。是れ日用の工夫あり。……人の氣必ずあかりやすく、輕く動きやすし、此處を了簡して、氣を養うて、其めくる處を順和せしめ、其動く所を安りからしめざれは、動靜處を得て、氣に虛妄なきを以つて、心これがために、妄動放心する事有るべからざるなり』と。養氣の大切なる所は、心は氣に因つて或は動機し、或は困苦するものであるから、氣を養うて動靜宜しきを得、氣に虛妄なからしめは、心の動靜亦宜しきを得るのである。所が兎角氣はあかりやすく輕く動きやすいのであるから、よく〳〵注意せねばならないのである。心が氣によつて動機し或は困苦するのであるから、結局修養の上から言ふと、心定といふことが頗る必要となつて來るのである。第七章第六節及び第七節の相容相含の理の如きも、假令學理的に說明することは出來ぬく

ても、事實的には事々物々皆相容相含の意になつて居るから、之を體達して心定するのである。苦樂の感の如きも、現に苦の極は樂となり、樂の極は苦となるのであるから、苦樂相含のものと心定し、苦中に樂を味ひつゝ之を强行するのである。氣を大にするも小にするも、靜にするも動にするも、皆心定に基くのである。松陰先生いふ。『志定まれば、則ち氣壯なり、匹夫も志を奪ふべからず。一士氣に奮へば、萬夫も辟易す』といひ又『斯心己に定まれば、萬世と雖も何そ定まらざるものこれ有らんや。上心己に定まらば、下心亦定まる。父心己に定まらば、子心亦定まる。一竪一横達せざる所なし』といふ。又古語にも、『吾志先つ定りて、詢謀するに皆同し。鬼神其れ倚る。龜筮協ひ祐く』といふ。是を以つて心定の必要なることが推察せらるゝであらう。心定は覺悟である。萬事の解決は唯覺悟の附方即ち氣一つによるのである。以上養氣と心定との關係を說き、結局覺悟を定めることの要を述べたのである。此の次は氣己に心定の如何によるものとすれば、氣と立志とに鮮からざる關係のあるものであるといふことを述べて、本節を終らんとするのである。出鹿素行の士道にいふ。『志氣と云ふは、大丈夫の志す所の氣節を云へり、大丈夫たらんもの、少しき處に志を置くときは、其爲す所、其學ぶ所、皆至つて微にして、大なる器にあらざるなり。道に志すときは、管中晏子が輩の功烈、猶爲すに足らずと思ふは、曾子孟子の志氣あり。若し小成に定んじて、氣節の全き處を得さるときは、器常に瑣細にして、器識の大用を知らざるなり。……古の臣たる人は、君を堯舜に致さんことをあらはし、一夫も其所を得さるを以つて己れが恥とし、父に事へては曾子の如くして可ありと、未たあきたらざるの志を置く。是れ皆志氣の高尙にして、小成小利を事とせざるがゆえなり。……但聖人の道より至らずして、一向其氣節の高尙を貴ふときは、異端の虛無空寂を貴び、世間を以つて塵芥とし　天下を以つて糠粃と思うて、唯自適するを可なりとす。故に格致せることを詳かからしむへきあり』と。志と氣とには元々離るべからざる關係あるを以つて、氣を養はんとすれば努めてその志を遠大ならしむること、即ち氣節といふことに着眼せねばならぬのである。然るに現時の教育は、氣の養成といふことを閑却してゐるから、隨つて立志の要を說くことが足らない。尙は進んでは氣節の養成が足りない。志と氣即ち志氣、尙換言すれば氣節の養成といふことは、人物養成に志あるものゝ大に注目すべき事柄ではあるまいか。松陰先生いふ、『士氣己に振作し、君意己に宣布すれば、能事畢るか。曰く未しなり。人才育せさるべからず才とは何ぞ。凡そ英雄豪傑俊偉卓絕の才なり、育とは何そ。奬誘激勵任するに重を以てし、期するに遠を以つてし、夫をして常に心力を窮竭し、奔走事に從ふの及はざらしむ、是れ之を育する所以なり。夫れ氣を振ひ、意を宣ふる、一も才を育する所以に非らざるはなきときは、必しも更に之を言はさる可きに似たり。然れども此に注目せすんば、氣振ひ、意宣ふるも、終に何の用をかなさん。蓋人各能あり、不能あり、物の齊しからざるは、物の情なり、坐臥眼を書籍に曝すとも、佐藤捨藏 安積祐助人々造るへきに非す。早收身を刀槍に委すとも、志賀小太郎 大石進士人々能ふへきに非す。乃ち捨藏 祐助をして志賀大石と相代らしむとも、且つ能せす。況んや其他をや。人を敎へ政をなすもの、能く是を知り、且つ千羊の皮實に一狐の腋に如かさるを審にし、齊しからさるの人を一齊おらしめんとせす、所謂才ある者を育することを務むへし。才既に育せは、國必ず從つて興起するもの多し。故に經術文章刀槍銃砲の類、其才ある者を選ひ、之を育して大成せしむるより急なるはなし。矩方嘗て一の材武の士と交はる。其人年齒僅に弱冠に過く。而して藩人多く其右に出るものなし。因て其志す所を叩くに、一藩の秀たること易からすと云ふ。特に天下の人と衡

を爭の志なし。是れ自から其人の資品と雖とも、亦育する所以盡さゞればなり。嘆すべきの甚しきなり』と。又家兄に贈られたる書簡に、『明事に逢ひ候事故、文武の藝の錬磨は、努々此までに減し申間しく候得共、是れ何そ恃むに足らんや。尤も恃むべきは大丈夫の志氣なり。近ころ試に、杜李陸の長古を取つて之を讀むに、其志す所皆稷契皐陶等を以つて、期待致候樣相見え申候。諸兄の志す所何如。杜李陸は後人特に詩人を以つて之を視る。況んや堂々たる大國の武士、毛唐人に愧候樣にては、國家の體を如何すべきや』とあり。先生は尊王攘夷、國體を重んじ、臣節を勵まし人材を育することに最も重きを置かれたものである。殊に先生の人材養育論の如きは、最も注意して熟讀せねばならぬことゝ思ふ。以上述ふる所により、氣は萬事の根源であることゝ、氣の養成は教育上最も注意を要する事柄であるといふことゝ、尙又志氣の養成が大切であるといふことが分つたであらうと思ふ。茲に飜つて本章の第一節徹底、第二節統一、第三節主從の觀念、第四節反約、第五節氣を通覽して一考せば、綜合的學究態度の價値果して孰れにあるかを察することが出來るであらう。氣の論は第九章第二節反求在身の說とも餘程關係する所があるから、豫めこの事を承知して居つて貰いたいのである。

第九章　求心的學究態度の說明

前章の初に於て已に之を述べたる如く、簡易實用の學習態度は、就實撮要の學習でなくてはならない。就實といふ所よりして、事實的學究態度を說き、撮要の學習法として、縱に本末終始を究むるため綜合的學究の必要を述べ、橫に事物の本末終始を眺むるため、求心的學究態度を主張するのである。求心的學究態度は、第五章朱子學と王陽明學との條下に於ても、大要之を述べ置きしが如く、王學の心外無理心外無事の學究的見地によれば、益々其の必要を感するのである。彼の大學の致知格物の四字を、朱子は致は推し極むるなり。知は知識なり。格は至るなり、物は事なりと解し、吾人の知識を推し極めんと欲せば、天下個々の事に即きて其理を究すべしと主張して居る。然るに、王子は致は至るなりいたすなり、知は良知なりと解し良知を致すとも、良知に至るとも訓む。格は正すなり、物は事なり又た念頭なりと解す。故に格物とは、一念發動の初を正すといふ意味に解して居る。そこで此の個々の事に即きて其理を推し究むるといふのと、一念發動の初を正すといふのとは、學習態度の上に非常なる相違が起つて來るのである。前者は遠心的にして、後者は求心的である。是を眞の學究態度よりいふ時は、兩者孰を是とし孰を非とすることも出來ないのであつて、兩者併せ用ひて其効果を全うするのであらうと思ふ。併し事實實用の學より之を見る時は、後者の學究態度が簡約にして徹底的であつて、實効を奏し易いのである。然るに今日の學究態度は、朱子の學究態度に類似する推理分析を主とする西洋流の學究態度が、我學界を風靡した結果、此の求心的學究態度に頗る注意を缺く嫌を生して居るのである。苟も事實事功を主とする教育の如きは、此の學習態度により、大に時弊を矯正して來ねばならないと思ふのである。現に此の見地に基く時は、沈滯して振はさる教育界が、頗る活潑地の顯現を示すであらうと思ふ。以下節を分ちて。更に求心的學究態度の何物たるかを細說することにしよう

第一節　在來の心理學を疑ふ

メエテルリンクは、貧者の寶の中に、『我々は普通の教科的心理學を考察してゐるのではない。といふことをも心にとめて置かなくてはならない。……斯樣な心理學は、單に物質と最も密接な交渉をしてゐる精神現象にのみ關與するのであつて、然も人間の靈魂なる美名を簒奪してゐる。……私の言ふ心理學は超

越的のものである。そしてそれは心靈と心靈との間に存立する直接の關係の上に及ひ、心靈の感覺性や、その異常の顯現やの上に光を投げるものてある。これはまだ未成期の狀態にある科學である。併しこれによつてこそ人々は一層高き十分なる歩みが出來るであらう。そしてそれは間もなく今日まで優勢であつた初歩的心理學を永久に驅除してしまふであらう』。というて居る。吾人は今心理學の學說を彼是論爭せんとするのではないが、唯敎育上の立場から見て、在來の心理學說では、實際の敎育に之を應用して頗る物足らないと感じて居るのである。そは如何なる部面かといふに、敎育上最も力ある說明を心理學に仰かねばならぬいことは、メエテルリンクの所謂心靈と心靈との間に存立する直接の關係、及び心靈の感覺性並にその異常なる顯現等のことである。從來の心理學は一つの心につき其個々の心理作用が如何に發達する者なるか、又はその個々の心理作用相互の關係が如何がであるかといふやうなことに重きを置いて、研究せられて居つたのであるかのやうに思ふが、心そのものを全體と見て甲の心靈と乙の心靈との間には、如何なる作用か行はれ如何なる感應が行はるゝ者であるか、結局吾人の心を徹底的に發揮する時は、如何ある顯現の行はれ得る者なるかといふやうなことが、今少し明かに分つて來たならば、敎育の施し方が大に改良せられて來て、敎師の感化といふ者が頗る强い者になり、敎育を受けたといふ兒童の心力は、頗る偉大なる顯現を示すことにあるであらうと思ふ。然るに在來の心理學は、遺憾なから其等の研究說明をして居らないのである。其處で斯樣な心理學を基礎にし居る敎育說が徹底した敎育說でないといふことも、大體に於て推測が附くことであらうと思ふのである。余は古來の性理說を徹底的に洞察し、之に加ふるに兵學の見地を以つて定めたる松陰先生の心術に關する意見は、假令科學的のものではないとしても、事實的には頗る眞理を含んだものであつて、實際的には頗る有力ある心理說であると深く信するのである要するに、敎育方法の徹底しないのは、心そのものゝ妙用が十分に分らないからである。心そのものゝ妙靈が十分明かにあつて來れば、敎育は比較的容易の者とあつて來るであらう。兎に角普通の敎科的心理學のみを基礎に置いては、到底眞の敎育は施されない者ではあるまいかといふことゝ、今一つは敎育の徹底といふことの前提は、心の妙靈を體達することが先決問題であるといふことゝを、能く了悟して居らねばならないのである。心の妙靈が感して來らるゝと、第七章第三節に於て之を述へた如く、妙處は妙にあること杯の味がよく知られて來て、案外無意味のことのやうて事柄に頗る有意味の價値を認むるやうになつて、從來の研究や論爭が燒点を離れて、無益な騷擾を極めて居つたといふことが追々分つて來るやうになるであらうと思ふ。

第二節　反求在身の說

求心的學究態度による到達点として、最も價値ある結論は、反求在身の說である。求心的學究態度が、王子の心外無理心外無事の見地よりして、一層切實に考へらるゝことは、本章の初めに於て已に之を述べた所であるが、第七章第六節及び第七節相容相含の理の悠下に於て述べた如く、凡そ世の中の事物は、大小一多同異自他有無皆相容相含するのであつて、決して孤立的單獨的の者はないのである。其處で我が一身中に國家を含み、我が國家中に世界を含むのである。隨て世界の完全を期せんが爲に、國家の發展に盡くし、國家の發展を期せんが爲に、我一身の修養に心を用ひねばならぬいのである。而して又第八章第五節氣の說明に際して述べたが如く、知己、知彼、應變といふあとは、誠に切要のことではあるが、今の將臣未だ彼を知らずと雖とも、己を知る時は、則ち安そ利を失ふ者あらんや。とある通りで、己を知つて氣を守ることが出來れば

先つ結構といふべきである。斯くの如く、事實的學究態度の結論よりしても、綜合的學究態度の結論よりしても、自己そのものを解することが、聽て他に大なる影響を持つものであるといふことがよく分かるであらうと思ふ。求心的學究態度の結論も、要は反求在身にあるのである。反求在身といふは、孟子にいふ反求二諸己一。といふことゝ、家之本在レ身。といふ兩語であつて、反求在身の工夫が如何に大切であるかは、松陰先生が、『反求の二字、聖經賢傳百千萬言の歸着する所あり。在身の二字も亦同じ工夫なり。天下の事大事小事此道を離れて成ることなし。大四海を包み剛金石を貫く、豈復た他道あらんや』。というて居らるゝので、其眞味のある所が分るであらうと思ふ。先生が反求在身の効を如何に信して居られたかといふことは、横山健堂氏が『防長の精華』に松下村塾の精神を說いて、他國、他鄉、他人の如何に干せず、一村一人を以つて、邦家の砥柱たらん事を期せり。是、則ち村塾の精神なり』。といへるが如きは、よく個中の消息を窺ふに足るものがあらう。先生いふ、『今日禁錮稍紓ふと云ふとも、足門徑を出でず。親近の外敢て他人に接せず、亦窮すと云ふべし。然ども、其志に至ては、松本一邑に一二の奇傑を生し、以つて忠孝の首、天下の唱とあらんと欲す』と。又野山獄中に在る吉村善作。河野數馬に與へられた書簡には、『三君子方は、松本人に致し、松本一村より長門、長門より山陽道、山陽道より日本國中へ押出、忠孝節義の風俗を引起し、萬國の犬羊共を平げ度存念は、命限り忘れは不レ仕云々』とある。其他將さに獄に赴かんとす、題して村塾の壁に留むといふ詩の一句には、『松下雖二陋村一。誓爲二神國幹一。』とある。右等の文句によつて、先生の意中は略ほ推察することが出來やうと思ふ。尙ほ念の爲め孟子告子上第十八章の割記を引用すれば、余囚徒となりて、神州を以つて自ら任し、四夷を撻伐せんと欲す。人に向つて是を語れば、駭愕せさるばなし。然れども此章を以つて益々自ら信して、斷して疑はず。今神州を興隆し、四夷を撻伐するは仁道なり。之を礙る者は不仁なり。仁豈不仁に勝たさらんや。若し勝たされば仁に非す。故に先つ一身一家より手を下し、一村一鄉より同志同志と語り傳へて、此志を同ふする者日々盛にあらば、一人より十人、十人より百人、百人より千人、千人より萬人、萬人より三軍と順々進み進みて、仁に志す者豈寥々あらんや。此志一身より子々孫々に傳はらば、其遺澤十年百年千年萬年と、愈益繁昌すべし。』とあつて、先生は何處までも、他國、他鄉、他人の如何に干せず、一村一人を以つて立つと云ふ信念を有して居られた者である。一村一人を以つて立つといふことは、即ち反求在身に外ならあい。反求在身の說は、聖經賢傳百千萬言の歸着する所で、先生の見地は余の所謂事實的學究態度であつて、事實の眞相を深刻に深刻に洞察して居らるる結果、遂には相容相含的の事實を夙に看破し且つ或は仁といひ或は德といひ或は誠といふ此等の德性によつて、反求在身の到り屆いた結果は、恐るべき感應を顯現するものであることを、深く々々信して居られたものらしい。反求在身の到り屆いた結果は、大舜自ら耕稼陶漁すれば、乃ち都君の稱あり。孔子魯衛陳蔡に困しめば乃ち三千の徒ありといふ有樣になるものである。然るに先生の此の見地を更に一層强烈にした者は、第八章第五節氣の論である。更に換言すれば兵學の見地であらうと思ふ。兵學は道法將天地の五事を以つて經し、之を校するに七計を以つてするといふやうあことで、結局兵法の運用宜しきを得ば必ず勝を制するといふのであるから、一村一人を以つて立つと云ふ考も、兵學的の見地と相應呼して考ふれば、一層の自信を强くする次第である。野山獄中に於ける敎育の狀況は、先生の淸狂に與へられた書面に『平生の志確然不拔、愈益々同囚と切磋す。近日獄中駸々として風に從ふ、其未た就學せさる者、十に僅か二三のみ。乃ち司獄に至つても、亦來

つて業を請ふ。皆言ふ、四十年前浮屠大痴獄に在り、亦善く書を以つて人に誨ふ。事傳へて今に至る。而來未た曾て今日の盛あらざるかり。假に僕をして天年を此に終るを得せしむれば、即ち數十年の後、安すぞ知らん、獄中乃ち一二の傑物を產することかきを。云々』とある。この事に由て見ても、先生が全く反求在身の力によつて、常人の企て能はないことを容易く開拓して往かるゝ事が分かるではないか。先生の事業は、先生の非凡なる人格に俟つと言はゝ夫れまでのことであるが、先生の心術を察して一面自己を修養し、一面之が應用を試むることは、假令事業の夫れが千が一萬が一に及ばかいとしても、一種の興味あることではかいかと思ふのである。余は前節に於て、在來の心理學を疑ふと言ひ、在來の心理學は、甲の心靈と乙の心靈との間に、如何かる感應作用が行はるゝものであるか、尙又吾人の心靈が、如何に異常なる顯現を示し得る者であるかといふことに向つて、十分の說明を與へて居らかいことを述へて置いたが、第八章第五節の氣の論などを味ひ來つて見ば、心靈の顯現に於て、如何にも異常なるものがあることが分かるであらうと思ふ。此の異常かる顯現の敎育に深く注意することを敢てしなかつたのは、心の眞の作用がよく分らかかつた結果で、實に殘念なことであつたと思ふのである。而して又上來述べたるが如く、反求在身の結果に伴ひ、心靈と心靈との感應の如きも、單に一片の學理に馳する者の、到底窺ひ知ることの出來ない靈妙が存在するのである。例の彼を知り己を知るは兵家の大要なりとある如く、彼我の關係を知悉するの要は勿論であるが、今の將臣未た彼を知らずと雖も、己を知る時は安んそ利を失ふ者あらんやといふ筆法で、單に反求在身自己を完成することたけに於ても、多大の効果を齎らすものである。茲に於ても、第七章の第二節理論と實際との條下に述べた注意を回想せねばならない。理論的にいふ時は、彼の心を攻め我が氣を守る兩事が旨く行はれて完全になるのであるが、實際的にいふ時は彼を論ずることは暫く置くも、自己を完成することだけによつても、より大かる感應がある。こは恰も性善性惡の說と同しく、性善性惡の兩者を論ずることが、議論上に於ては當然のことであるけれども、實際の敎育上に於ては、性善のみを見て之を擴充せしむることによつて、其目的が達せらるゝといふ見地と、全く同步調である。斯かる見方が、事實的求心的學究態度の最も超越した所で、就實攬要の學の眞味の存する所である。尤も反求在身の說の眞の妙味は、次節に述べんとする情の妙味至誠の感應等のことゝ合せ考ふることによつて、一層其眞味を解することが出來るであらうと思ふ。而して又次節にいふ性善擴充の說によつて、自己の本來を解することなどによつて、益々此の反求在身の說が尤もであることが分かるであらうと思ふ。余嘗て藩政時代に於ける防長敎育は、如何なる手段方法によつて赫々たる効果を奏したかと思ひ、聊か其原因を調査して見たことがあるが、結局其手段方法は抑も末であつて、要する所最も力となつて居つた者は、歷代藩侯の意圖そのものであることを痛切に感したのである。横山健堂氏が矢張防長の精華に、『防長興起の原因を論して(一)毛利氏の朝廷に對する關係(二)毛利氏歷世の抱負(三)毛利氏の德川氏に對する感情を以つて、其の三要因なりと爲せる者あり。防長興起の原因固より此に盡きず。然れとも又た有理の觀察たるを失はず。』といへるが如く歷代藩侯の意圖が終始一貫して少しも狂ひなく、何にかの点に向つて發揮し、敎育のことの如きも之が爲め期せずして偉大の効果を奏した者であらうと思ふ。假に歷代藩侯の敎育に關する御沙汰書を一讀して見れば、直ちに分ることであるが、歷代孰れの藩侯を問はず、其治績の良否を論せず、皆敎育に對しては、一層の力を用ひて鼓舞奬勵して居らるゝのである。凡そ事の成否は全く人に在るので、反求在身の四字味い來れば無量の意義かある。此の根本義を踈か

にしては、爾餘一切の何事を論議しても、畢竟無益のことたるを免れない。村田清風翁の古風詩に、『山河千里國、憂恤在安民、文武百機事、隆汚唯在人』とあるは、實に千古の名言である。孫子に、『用兵之法。無恃其不來。恃吾有所不可攻。恃吾有所不可攻也』といひ、又いふ、『善戰者。致人。而不致於人。』と。松陰先生の久坂義助に與へられた書簡に、『士を得る良策、併し士をして吾に得られしむるの愈されるに如かず。己を成して人自ら降參する樣にせねば行ぬなり。此節愚議右の如く一變候。松洞は書をつとめ、且讀書を勉め、玄瑞は讀書作文をつとむべし。人を結ふも、吾より意ありては遂に長久せず。只來る者は拒まず去る者は追はずにあり。僕一病漸く快く候へ共、學業兎角荒癈、殘念々々、兎角菲力故、榮太すら既に輕視して去る。況んや其他をや。只自力を強くして、人自から來る如くすべし。傳之助も時々來り候へ共、心服と否とは知れず、偶余に心服するもの兩三輩あれと、皆々力あきものに御座候。力あるものゝ余に服したるためしなし』。とある。孰も併せ考へて、反求在身の說の眞味を悟るべきである。

第三節　情を顧よみ

求心的學究態度の極所は、反求在身の說を信するにあることは、前節既に之を述べたる所あるが、反求在身の說の妙用は、今少し述べなくては眞箇の價値が認められないであらうと思ふ。反求在身の妙味を解するには、先つ心靈と心靈との應呼には、如何ある靈現のある者なるかを知ることが必要である。心靈と心靈との應呼を眞に感得するには、情の妙味を悟らねばならぬ。情の妙味は到底智識の想像の及ぶ所ではあるまいと思ふ。メエテルリンクはかう言うて居る、『我々は誕生の日から死ぬ時に到るまで、この明かに限定せられたる領域を脫け出すことは出來ないで、憐れある夢中遊行者の如く、或は事實はその中に身を置いてゐながら、めちくちやにその神殿を搜がし廻はつてゐる盲者の如く、神の內をさまよひ廻つてゐるといふことは確かなことである。我々は人生に於て、相爭ふ人であり、相鬪き合ふ心靈である。そして日夜武裝して暮らすのである。我々は互に見もせず、互に接觸もしない。我々はたゞ楯や、甲冑やを見、たゞ鐵や黃銅やに觸れるばかりである。併し大空の單純なる中よりして、一小事態を來らしめよ。假し瞬時たりとも武器をして棄てしめよ。その場合、鐵甲の下にも常に涙はないであらうか。楯の脊後にも小兒のやうな微笑があいであらうか。そして他の眞理で示顯せられないであらうか』と。又孟子の仁人心也、義人路也の劄記に於て、松陰先生いふ、『是等の語能々味ふべし。仁は即ち人の心、人の心は即ち仁なり。程子の所謂滿腔子惻隱の心と云ふ是なり。人の心を一々省察せば、仁の外に出ることなし。忠孝友悌衆善行の如きは言を待たず。乃ち不善不仁に至ても、其由つて起る所は仁に非らざるなし。但其過不及ありて義に合はざるや、遂に不仁にも至るなり。故に人心の根本を尋ね出せば仁の一字盡せり。義は即ち人の行く所、人の行く所即ち義なり。君子小人ともに日々行く所義に出てさるなし。若し義に非らざれば必ず今日が通用せざる者あり。或は疑ふ。暴客人を殺すも亦心に出でさるはなし、是れ仁なりや。盜賊物を盜むも行に非らざるはなし。是れ義なりや。云はく人を殺すは不仁なり。殺すの心は必ず仁なり。仁は愛を主とす。人を愛すると、己を愛すると同しく仁なり。大抵人を殺すは身を愛するより起る。辱を受けて怒れば即ち人を殺す。惡をあして顯れんことを畏れは即ち人を殺す。或は吾が愛する人の爲に人を殺すもあり。之を要するに、愛の一字より出でさるはなし。若し愛する所なくんば惡む所なく、殺す所なし。盜は不義なり。盜を行ふは義を以つてす、盜と雖とも

金帛を盗んで自ら利するのみに非す。或は其同類に分ち、或は其妻子を養ひ、或は債責を塞き、或は食貨を賑る。皆義に非らざるはなし。若し義なくんは盗むことを要せず。彼を取る所あれば此に與ふる所あり。一取一與義より出さるはなし。然とも、仁の人を殺すに至り、義の物を盗むに至るは、是れ亦弗レ由不レ求の極と云ふべし。此極に於て、人心人路を求めは、仁義擧けて用ふべからず。朱註に、中庸の道不レ可二須臾離一の意を取つて是を解す。尤も親切なり味ふべし』と。メエテルリンクは、瞬時たりとも武器をして棄てしめよ。その場合鐵甲の下にも常に涙はないであらうか。楯の脊後にも小兒のやうな微笑がないであらうか。といふ。松陰先生は人を殺すは不仁なり。殺すの心は必ず仁なり。盗は不義なり、盗を行ふは義を以つてす。といふ。兎角人生は相爭ふ人であり、相鬩き合ふ心靈であるけれとも、少しく心氣を一轉して情海の妙味に心を寄せ、第八章第一節徹底といふことの(二)に述べたる如く、幾微の顯現に注意して、よく心界の跡を察せば、心靈と心靈とは決して相反發すべき者ではない。寧ろ理性で想像することの出來ない妙味が解せらるゝものである。要するに情の力は知の力以上により大なる者があつて、結局人生の幸福も妙味も此の情あるが爲に生氣を添へて居るのである。假令境遇の如何を論せず、人生の慰安は此の情によつてのみ生命を繫いで居るのである。然るに兎角情海の妙靈を餘所に見て、萬事を論せんとする傾向のあるは、非常に大なる謬ではあるまいか。大に情を顧み人情美を味ひ見よ。反求在身己の念頭を正しくすることは、間違なく他人の情緒に何等かの感應を與へ、他人の是非は擧けて言ふに足らないことになつて來るであらう。人を愛する者は人恒に之を愛し、人を敬する者は人恒に之を敬す。吾れ人を罵れば人亦吾れを罵る。吾れ人を辱かしむれば人も亦吾れを辱かしむ。恰も影の形に應するが如く、其反響頗る嚴なる者がある。されば何事につけても徒に他人を咎むべき者ではなくして、先づ夫子自らの念頭を正すことが、何よりの肝要事であることが知らるゝであらう。教育改良の如きも、幾ら机上の議論を闘はしても、此の人情美を解しなくては、皆空論になつて仕舞であらうと思ふ。松陰先生が智の人であり意の人であると同時に、亦頗る情の人であつたといふことは、誰しもよく知つて居る所であるが今吾人をして先生だけの智と意とはなくとも情だけ、先生のそれと同しからしめたとしてみたら如何であらうか。吾人の感應は今より遙かに々々大なる者があらうと思ふ。先生が朋友に關して述べて居らるゝものに、『舜は大聖人なり。其賤しくして農夫陶工漁夫と混ずるに當つてや、必ず人に取つて、善を爲すもの、天下の至大至健、誠に一人智力の能く及ぶ所に非ざるを知ればなり。人と善を爲すに至つては仁の至れる者なり。吾儕小人、聖人の大德に及ぶべきに非ずと雖も、既に志を立て聖人を學ぶ。何ぞ大舜を畏れんや。故に己の小智小能を挾まず、溷然として人の智能を採用し、且つ人の善心を勸め助け、共に道に適くべし。是れ大舜の道なり。今世智能の士乏しきに非す。唯恨る所の者は、己が智能を恃み人の智能を採用せず。且つ人を誘いて道に進むる者極々少し。甚しき者は良智良能互に相軋るに至る。哀れむべきの甚しき者なり。吾儕宜しく深く心を茲に用ふべし』。とあるが、余想ふに、今日の一般社會殊に教育社會に於て、否一小學校の内部に於ても、此の良智良能互に相軋るといふことが、不知不識の間に行はれ、言ふに言れない事業の進捗を沮害して居る者がありはしないかと考ふるのである。所謂未た千里を以つて人を畏るゝ者を聞かざるなりといふが如く、相當の團體的組織をなす一機關でありながら、其治績の看るべきものゝあいと言ふが如きことは、あり得べからざることである。然るに事實この歎きを免るゝことの少くないのは、この良智良能相軋り勢力の殺傷が行はるゝからであらうと思ふ。若しもこの殺傷を防

ぎ、衆智を絞つて眞に同心協力の實が行はるゝ者とせば、蓋し其勢力たるや實に旭日昇天の如きものがあらうと思ふ。然り而してその良智良能相軋るに至るは、畢竟何に起因するかと言ふに、そはメエテルリンクが、『理會しないのは我々である。蓋し我々は我々の智力の水平以上に決して出ないからである』。といつたやうに、人間情緒の深淵を解せないからである。吾々は理性の重んずべく貴ぶべきことを信ずると同時に、情緒の絶大なる妙味を十二分に了得することを何處までも忘れてはならないのである。今尙ほ情の妙用に關し、松陰先生の述べて居らるゝ二三の語句を引用して參考に供しやうと思ふ。先生いふ、『人情は愚を貴ぶ。益々愚にして益々至れるあり。若し智を貴び理を以つて言ふ時は、死人の骸骨は魂魄已に去る。原野に投するも可なり。狐狸に飽かしむるも可なりと云ふに至る』。と。又いふ、『吾徒事に臨む毎に、且は職分を思ひ、且は人情を思ふ時は、過擧なきに庶幾からんか』。と。又いふ、『抑も知を好む者は、多くは人を疑ふに失す。仁を好む者は、多くは人を信するに失す。兩あから皆偏なり。然れども、人を信する者は其功を成すこと、往々人を疑ふ者に勝ることあり。是れ察せさるべけんや。……故に余寧ろ人を信せるに失するも、誓つて人を疑ふに失することあからんことを欲す。況んや骨肉至親に於てをや』と。又いふ、『人の惡を察すること能はず、唯人の善のみを見る』と。又いふ、『情の至極は理も亦至極せるものなり。余常に謂らく、凡百の事皆情の至極を行へば、仁用ふるに勝ゆべからず。特に葬祭祈禳等の事、皆至情に出づるなり。……父の植置たる桐梓を見てさへ、恭敬の念起り、父の手澤の存する書冊口澤の存する栢榛を見てさへ、讀むに忍びず、飲むに忍ひさるは、皆人情なり』と。又いふ、『天下の事才力議論皆是末あり。一人の手三寸の舌を以つて天下の目を掩ひ、億兆の心を服することは斷して成らぬことにて、只德を積まば、其流行置郵して命を傳ふるよりも速なり。粗淺薄俗の儒者は、決して此妙境を知ること能はず。只身に驗して其實否を知るべし』と。又いふ、『號令篠の如く下れども、悉く皆張釋之所謂具文となり、毫も其効なきものなり。人心上の令に從はず、上の好みに從ふものなるを以つてなり』と。此等の語句によつて考へ來らば、情育の重大なることが一層切實に感せらるゝであらうと思ふ。要するに、從來に於ても情の重んずべきことを知らないといふ譯ではないが、眞に痛切に的確に徹底的に考へるか考へないかといふ差があらうと思ふが故に茲に特に情のことを力說高調する所以である。思ふに反求在身の効、殊に靈と靈との感應は、全く情を深く顧みることによつて、眞の妙味が解し得らるゝのである。

第四節　至誠の二字

第二節に述べた反求在身の說は、第三節の情を顧みることによつて、効驗が大にあるのであるが、更に其効驗を大ならしむるには、至誠の二字に想到せねばならない。單に情の妙用を考ふるのみにて、更に至誠の二字に想到せざるときは、未た其効驗を全うすることが出來ないのである。至誠といふことは何事を成すにも其根抵をなすことは、今更言ふまでもないことで至誠を離れて遣つたことは、決して永遠に人を動かすに足る者ではない。一時の毀譽褒貶は顧みず、至誠を以つて遣つたことは、何時か人を動かす者であるといふことを徹底的に感ずることが最も大切である。吾人が松陰先生の行事を觀察することにより、著しく感せらるゝことは、先生の至誠である。先生は徹底徹尾誠であり、眞である。吾々の一擧一動は、多くは虛僞である。假裝である。利害の念に敵はれ、名聞に迷はされて居るのである。其處で何處までも誠といふことの修養を積むことに工夫を凝らさねばならない。至誠の溢るゝ所は、如何なる事と雖も貫徹しないことはないの

である。教育効果の徹底も、教授の効驗も、訓練の貫徹も、皆此の至誠を外にしては期せらるゝ者でないから、教育研究に於ても、徒に教授法の末を論するよりは、斯かる念頭の問題を研究することが、根本的の問題である。教育者が眞によく兒童を自分の子の如く思うて、親切叮嚀を盡さば、其中に教授法も訓練法も生れて來るのであつて、眞實眞劍といふことが、何より先に立つ問題であらうと思ふ。抑も誠とは讀んで字の如しではあるが、尙ほ多少の説明を試みて見ば、程子は眞實无妄之を誠と謂ふといひ、山鹿素行は不得已之を誠と謂ふといふ。松陰先生は知行の自ら誠なるありといひ、又誠の一字中庸尤も明に之を洗潑す。謹で其説を考ふるに三大義あり、一曰實也。二曰一也。三曰久也。と、又いふ、四書六經歷代史乘浩瀚なりと云ふとも、其日用の要歸は一の誠の字に止る。而して君としては仁、臣としては忠、父としては慈、子としては孝是のみと。要するに誠とは眞であり、直であり、實である。何事を爲すにも此の眞といふことがありたい者であるが、互に駈引といふことが行はるゝから、遂に眞といふことが行はれないやうになつて、情ないことには、夫婦骨肉の間でも、同僚の間でも、何にが眞やらかゝ眞やら、一向分らない有樣になつて居るのである。どうも互に妙な秘密が存するものである。其處で松陰先生は、『人唯眞々愛すべし、敬すべし。佐世の之を言に洩すは眞あり。其過を悔ゆる最も眞あり。和作の逋に就く眞あり。其悔ひ難き亦眞なり。吾故に曰く、唯眞愛すべし、唯眞敬す可し。總べて滿世人の僞に似さるあり』と、言うて居らるゝが、責めて一學校の教員同志の間になりとも、眞々愛すべしの有樣が行はれたならば餘程愉快あるものであらうと思ふ。松陰門下の書生の間には此の事がよく行はれた者で實に羨ましいことゝ思ふのである。直といふあとは、縮字守約の説に於て、先生はかう言うて居らるゝ、『夫れ縮は直なり。堯舜之を中と謂ひ、孔子之を仁と謂ひ、子思之を誠と謂ひ、而して孟子之を浩然の氣と謂ふ。皆是の物のみ』と。直といふことが有ゆる諸德の根源をなす者であることは、これでも分かる。或は眞といひ、或は直といひ、或は實といふも唯た現はるゝ方面を異にするのみで、要する所此等を總括して誠といふのである。此の外松陰先生の誠に關する説述は、餘程數多いことであるが、其の中一二を取つて參考に供しやう。四庫全書簡明目錄を讀むといふ文に、『天下の事舌辨辭巧の能く克つの所に非らず。正道を衛るの功誠に若く莫し、諸を心に誠にして後邪説思に萌さず。諸を身に誠にして後邪説行に雜らず。諸を口に誠にして後邪説辭に發せずば、先正を祖述して可あり。後進を訓誨して可なり。此を外にし、勝を好み名を求むる、誠にあらざるなり。吾れ斯の書を讀んで斯の説を得』と又いふ、『人唯一心、心唯一誠、是を以つて君に事ふれは則ち忠、是を以つて父に事ふれば則ち孝、是を以つて官長に奉せば則ち敬、是を以つて子弟を誨ふれは則ち友』とある。若し夫れ誠を以つてして、尙ほ人を感動さすことの出來ないのは、未た以て積誠の足らないのであるから、徒に他を怨らみ人を咎むることなく、自己を反省して益々積誠に努むることを要するのである。離婁下第二十八章孟子曰君子所以異於人者。以其存心也。君子以仁存心。以禮存心。仁者愛人。有禮者敬人。愛人者人恒愛之。敬人者人恒敬之。有人於此。其待我以横逆。則君子必自反也。我必不仁也。必無禮也。此物奚宜至哉。其自反而仁矣。自反而有禮矣。其横逆由是也。君子曰。此亦妄人也已矣。如此。則與禽獸奚擇哉。於禽獸又何難焉。是故君子有終身之憂。無一朝之患也。乃若所憂則有之。舜人也。我亦人也。舜爲法於天下。可傳於後世。我由未免爲鄉人也。是則可憂也。憂之如何。如舜而已矣。若夫君子所患則亡矣。非仁無爲也非禮無行也。如有

一朝之患」。則君子不ゝ患矣とあるは、吾人の修養上頗る大切な文章であるが、松陰先生の解説を見れば尙ほ一層其意が明かにあるのである。先生いふ、『此章切實痛快、宜しく一通を錄し、座右に貼して朝夕觀省すべし。其義明白辨を待たず。存心の二字は章の骨子、仁禮は其目なり。人恒愛ニ敬之一は是れ常を云ふ。二の自反は是れ變を云ふ。愈反して愈切なり。忠矣と云ふに至りては、自ら居る甚た高し。常人或は前二反を能くすと云ふとも、忠矣に至つて多くは忿恨に堪ること能はず。是れ其自ら居る妄人と均しきのみ。說て終身の憂一朝の患に至りて、字々直に肺腸を刺すを覺ゆ。遂に如ゝ舜而已矣に落着す。其工夫は則亦仁禮の二字のみ。是れ一章首尾照應の所なり。是等の章孟子中に在つても亦多く得べからず、況んや他書に於てをや。豈容易に看過すべけんや』と。人と接觸するに此の心懸あらば、何事をなしても怨み咎むることがないであらう。誠を說いて此の工夫を心得ないと、誠を盡すの意に於て、或は徹底を缺くことがあらうと思ふ。併しうつかり考へると、此處等の眞味が或は十分解せられないかも知れないが、今假りに一事に就いて之を徹底的に遂行して見ようと思ひ定めたとした場合、何事も決して一朝憤激の能くする所でないことが、想ひ浮ぶであらう。　松陰先生が、僧の清狂に幕府を輕卒に討伐してはならないことを誡めて居らるゝ手紙の中に、『古より眞主の起る一朝憤激の能く致す所に非らず。成湯の葛に於ける、之に牛羊酒食を饋るに至る。文王の紂に於ける、羑里の囚と爲るに至る。古の人々の罪惡を視、猶ほ其身に在る如くにし、諫むべければ則ち諫め規すべければ之を規す。其深切此の如し』とあるが、誠の意義も斯く徹底的に考ふることによつて、始めて其眞意義を發揮して來るのである。然るに吾人の從來に於ける考は、尙に輕躁浮薄であつたとしか思はれない。そこで斯く深刻に考へて來ると、至誠にして動かざる者は未た之れ非らずといふ境地も、追々體讀味到することが出來ると思ふのである。　松陰先生が、敎養己に備り壽富安逸已に至る時は、心を得、民を得、天下を得る、自ら成る所の効驗なり。但し心を得、民を得、天下を得の得の字の意味を善く味ふべし。と言ふて、得の字の意味を次の如く說明し居らるゝ。『得とは吾ぞの物とし吾自由になる心なり。天下を得れば天下は吾物にて吾が自由になるなり。民を得れば民は吾が物にて吾ぞの自由になるなり、心を得れば心は吾物にて吾が自由になるなり、故に民を得心を得るは、孫子所謂令ニ民與ゝ上同一ゝ意の義なり。民心が上の思ふ如くなることなり。上方は夷狄を惡んで是を征伐せんと思へば、民心も亦斯の如し、上方に城郭を築き、艦砲を造り、冠賊に備へんとすれは、民心も亦斯の如し。若し上の思ふ所に少しにても民心の違戻することあるべば、得と云ふへからず。得の字の意味かくの如し。書を讀むは意味を知ることを要す』。とあるが、得るの意も、徹底的に考へ來ると甚た難哉である。併し右の例は上の者が下の者の意を得ることを述べられた者であるが、然らば更に下の者が上の者の意を得るには如何なる注意を要するかといふに、そは離婁上篇十二章の劄記に、『獲於上の獲は、上第九章得民得心の得の如し。但し彼我の差別あるのみ。獲於上は我心を上に獲られ上の物となるなり。我れ誠敬を盡し我れ忠良を致すと云ふとも、上の信孚を得ること能はざるは、是れ我が心を上に獲られざるなり。我が誠敬を盡せば、上其誠敬を信し我忠貞を信し、凡そ吾心を竭す所、上皆是を信すれは、吾心皆上の心と流通して、吾心は上の物となり、上の心は又吾物となる、上下相得るなり。孫子所謂與衆相得の意なり。是を上に獲らるると云ふなり』と。或は上といひ或は下といふ、必しも上下を以つて見るには及ばないが、兎に角衆と相得る所がなくては、畢竟世に處し何事をも行ふことが出來ないのであるから、甲の心靈と乙の心靈とには、結局如何なる感應があるかといふことを、豫め承知して置

いて、其次には其感應を得るには、如何にするかといふことを考へて見ねばならない。所が上下相得乘と相得るのも、要する所は、反求在身吾が心を攻め吾が氣を守ることが第一で、之に續いては、情を考へ、更に誠を盡すことが、最も切要なることと思ふのである。教授の徹底も、訓練の徹底も、結局此邊の意を篤と考へ、先つ教師と兒童との氣合の統合を圖り、互に相得る所があつて、徐に萬事に向つて下手するならば、蓋し教育の効果期して待つべきものがあらうと考ふるのである。右等のことは、固より一朝一夕の修養によりて爲すことは出來ないことであるが、先つ教育者の覺悟乃至態度を此の点に置き、一歩一歩其の實現を期するやうに努力せば、多小從前よりは異つた教育的効果が見られるであらうといふのが、余の管見である。尙ほ次節に言ふ性善擴充の說によつて、吾人本來の面目は抑も如何なる者であるか。且つ又之が教育上には如何なる注意を要する者であるか、といふやうなことを、熟々と併せ考へ見れば、從來の教育は如何にも不徹底の者である。今少しく意義ある教育が施して見たいと言ふやうな感想が起つて來るだらうと思ふのである。以上何事を爲すにも、誠がなくては役に立たないから、事實的徹底的に誠といふことを考へて見ねばならないといふことを述べ、更に誠の字の說明を試み、結局誠は眞であり直であり實であるが其中にも眞といふことの行ひ難いことを述べ、次には誠が諸德を一貫するものであることの例言を引き、更に從來吾々が誠を盡したと思うて居ることはまだ其方途に於て徹底しないのであるから、孟子の存心の章及ひ淸狂への訓言等を引照し、更に得獲の字の說明を引用し、斯かる見地に立つて始めて誠の感格を期せられる者であると言ふ意を明かにしたのである。

第五節　性善擴充の說

求心的學究態度の到達点は、反求在身の說にあり、尙ほ反求在身の効驗は、情を顧み至誠を盡すことによつて、益々効驗を見ることを述べたが、如何に我を回顧し、我を苛責するも到底我の及ぶ所にあらずと考へらるゝことがないとも限られない。寧ろ或場合斯かる感想を抱くことが多くはあからうかと思ふ。併しこゝが餘程熟考を要する所で、吾々の本來はどこまでも性善である。然るに或る何にかの物慾に掩はるゝ爲其の本來を發揮することが出來ないのである。故に其の物慾を離れて性善の本地に歸り、飽までも之を擴充することに努むれば、決して我を疑ふ必要はないことになる。固より能不能は免れないのであるが、一通りの修養は誰しも出來るのであるから、少しも顧慮する必要はないのである。唯一言にしていふ時は、これ丈のことであるが、この境地を信ずることの出來ないのが、如何にも人間の淺間しさと言はねばならぬ。松陰先生いふ、『余謂らく、性善の義を知るは精思と切思とを要す。今一義を行はんと欲す。此初念即ち性善あり。己にして名利便安の念是に繼て紛生す。是皆形氣の欲なり。形氣の欲を破し去りて、性善の本根を涵養せば、何の義か行ふべからさらん。是を精切の思と云ふ。今如何なる田夫野老と雖とも、夷狄の輕侮を見て憤懣切齒せさるはなし。是れ性善なり。然とも堂々たる征夷大將軍より、列國の諸大名より、幕府の老中諸奉行より、諸家の家老用人より、皆身を以つて國に殉し、夷狄を掃蕩するの處置なきは何そや。其智田夫野老に及はさるに非す、唯田夫野老は傍觀の者にて性善の儘なり。將軍大名老中奉行杯は形氣の欲にて性善を蔽はるゝなり。初念素より憂國疾夷の心あきに非す、但戰爭に及はゝ姫妾數百千人何の地に置かんか。珍玩奇器何の地に藏せんか。甲冑の窮屈は絹蒲團の安穩に如かす。兵糧の粗末は膏粱の滋美に如かす。儲又今十年せは吾も亦秩祿幾許を進むへし、今五年せば吾も亦金帛幾許を蓄ふへし。家宅を改造せん。園池を修築せんと云

ふ類、一々其意匠を筆記せば、醜怪言ふに堪へす。而して皆形氣の欲なり。唯形氣の欲あり。故に堂々たる高貴にして田夫野老に及ふこと能はず。國を憂へ夷を疾むこと能はず。是を以つて性善の味を知るべし』と。又孟子にいふ人皆可二以爲一堯舜一の劄記に於て、先生いふ、『王陽明の説に、聖とは私欲消盡して天理純全なるの名なり。量目の輕重に非す。故に聖は純金の如し。其輕重に至ては聖たる所以に非るなり。故に聖人中に在つて自ら輕重あり。堯舜孔子の如きは百兩金あるべし。文王周公は七八十兩、湯武は五六十兩あるべゝ、各輕重の差はあれとも、純金たることは同し。今吾輩と云ふとも、私欲を消盡し天理純金あらば、亦自ら一兩や二兩やの純金はあるべし。然れとも後世の學者力を此處に用ひす、徒に才力智勇を尙ふは、銅鐵を混して全く量目を重せんとするが如し。故に愈學んで愈聖を去ること遠しと云へり。（此説傳習錄に見ゆ今記憶する所に因つて大意を記するのみ。）此説明白と云ふへし。然れとも學者多く銅鐵を混し、量目を重くするの念己み難し。浩嘆に餘あり、余因つて自ら期する所あり。凡そ人の人たる所私心を除去するにあり。是れ聖學の工夫なり』と。又いふ、『試に耳目口鼻手足を除て自ら省みは、性善自ら顯はるゝなり。己に性善を知らは、是を施す者は又耳目口鼻手足に依らさるはなし。故に性は純善にして、形氣に至つては善惡混す。然れとも形氣を去つては性善の功用をなすこと能はす。猶天は純善にして地に至つては善惡混とも地を去つては天の功用をなすこと能はざるが如し。嗚呼世人形氣を離れて性善を認むることをせす。故に忠孝も仁義も皆駁雜にして純粹ならず。一度忠心起れとも忽ち利慾の念に奪れ、一度義心起れとも忽ち毀譽の間に蔽る何そ深く性善の地に思を致さゝるや』。と。形氣の欲あり。故に堂々たる高貴にして田夫野老に及ふこと能はすといひ、又凡そ人の人たる所以私心を除去するにあり。是れ聖學の工夫なりといひ、又耳目口鼻手足を除いて自ら省みば、性善自ら顯はるゝなりといふ。此等の所より沈思熟考せば吾人の行爲は能はざるにあらずして爲さゞることが多いのである。先生いふ『勤むるも報ゆるも左迄六ヶ敷事にあらず。唯道を知ると知らぬとあり』と。よく〳〵味うて見ねばならぬ。孟子盡二其心一者知二其性一也。知二其性一。則知レ天矣。の劄記に於て、『其心を盡くすとは心一杯の事を行ひ盡くすことあり。力を盡すと云へは十五貫目持つ力ある者は十五貫目を持ち、二十貫目持つ力ある者は二十貫目を持つことなり。是を以つて考ふへし。今人未た嘗て心を盡さす、故に其一杯の所を知ること能はす。若し是を盡す時は、堯の民を治め、舜の父に事へ、孔子の道を明にする、皆心の外に非す。唯心の一杯を盡すのみ。若し少しく行を修め、少しく事を勤め。少しく忠し、少しく孝して、自ら我善く吾心を盡くすと云はゝ、大に吾心に負くと云ふへし。一事より二事、三事より百事千事と、事々類を推して是を行ひ、一日より二日、三日より百日、千日と日々功を加へて是を積まは、豈遂に心を盡すに至らさらんや。宜しく先つ一事より一日より始むへし。然とも心の一杯を盡すと云うても、其一杯の所何程と云ふことを知らさればならさること故、知二其性一と云ふ。性とは人の生れ付持出なり。所謂仁義禮智の性なり。此性善にして惡なき者にて、聖人も我と同しき者なり。人此樣の性を具ると云ふことを眞に落着する時は、（知の字深く見るべし。）性中天下の善皆備ることを知る。故に心の一杯を盡すこと出來るなり。又此性を知る時は、知レ天。天とは蒼々の天を云ふに非す、天は即ち理なり。眞に性を知り眞に心を盡す時は、天下の理復た此外にあることなし。故に天下の理悉く吾物となるなり。王陽明云ふ、知は知府知縣の知の如し。知府となれは一府の事大小となく皆吾が分内の事、知縣となれは一縣の事大小とゝなく皆吾が分内の事なり、と。此説絶妙。天を知れは天下の理皆吾が物とあり、性を知れは自己の性

分皆吾が物となるなり。（性を知らざれば自己善性ありといへども吾物とならず）』と。又惟聖人然後可二以踐一レ形の割記に於ては、『踐形とは此篇首章盡心の義と相似たり。心を盡すは心の一杯を盡すなり。形を踐むは形の持前を使ふことなり。形は耳目口鼻四體皆形なり。耳は善惡を聞分くるが持前なり。目は善惡を視分くるが持前なり。口鼻四體皆各持前あり。此持前を使はざるは凡夫の常あり。若し皆是を使はゝ即ち聖人なり。而して踐形は盡心と其實は兩般の事に非す。抑造化の妙、是等の所に於て是を觀れば、實に驚くに餘あり。萬物皆備二於我一矣の義も、良知良能も、性善も、皆是にて知るへし。人々其持前を使へば即ち聖人にて、別に口傳も秘訣もおきとは妙なるかな。妙なるかな。余又常に謂ふ、神州の形は如何なる持前そや。當今の如く外夷の凌辱となる、是其持前か。又神功秀吉の時の如く海外を懾服せしむるが持前か。今八尺の力士ありて、一人の力能く數十人を制するに足る。其倦臥の際病困の日、一屠夫と云ふとも是を苦めて餘りあり。力士の持前、前にあらんか、後にあらんか。』と。心を盡くし形を踐みさへすれば、何等別に憂ふへきことはないのである。本來の我は聖人も同しことで、別に口傳も秘訣もあるのではない。唯性善擴充を圖るか、圖らないか、といふまとが問題とおるのである。其處で先生は、『若し能く此惡を惡とし善を善とするの心を持し、以つて其の極に至らば、即ち聖賢のみ。但僞學を學び、僞師を師とし、僞言を言ふ、是に於て善の善たる、惡の惡たる箇々眞ならず、一日眞あらざれば其人救ひ難し、』といひ、又孟子離婁上第八章自取之也の割記に、『此章主意此一句にあり、自侮、自毀、自伐、自作レ孽、皆是れ自取の謂あり。下第十章の自暴自棄も亦此類なり、自侮とは自身に吾身を輕侮するなり。凡そ人の一身性を天に受け德を心に具す。天地の待つ所鬼神の依る所、それ亦尊重と云ふへし。而して自ら其尊重たるを知らす、傲僻邪侈至らざることなき者は、豈自ら輕侮するに非すや。自毀とは自身に吾家を破毀するなり。凡人の家父子あり兄弟あり夫婦あり、然る後其家完全あり。父の子を慈せさる、子の父に孝せさる、兄の弟に友あらさる、弟の兄に悌ならさる、夫の婦に敎へさる、婦の夫に順はさるより、父子相夷り、兄弟墻に鬩き、夫妻目を側して、終に骨肉相食み、家從つて破毀するに至る。是れ自ら破毀するに非すや。自伐とは自身に吾國を擊伐するあり。凡そ國の國たる所以は宗族あり、群臣あり、万民あり、米粟あり、貨財あり、甲兵あり、城郭あるを以つてなり。而して善く國を持せさる者は、宗族を親むことを知らずして宗族背き離る。群臣を體することを知らずして群臣怒り。怨む。萬民を愛することを知らずして萬民叛き散る。米粟の凶年飢歲に備へ、窮餓流亡を救ふなし。城郭の暴寇を拒き甲兵の叛逆を平くるあし。事皆如是なれは、國何を以つて滅亡せざらんや。是れ自ら擊伐するに非すや。是を察せすして、人の輕侮を怒り人の破毀を惡み人の擊伐を恐るゝ亦末ならずや。此章の起手所謂不仁者の爲す所往々然らさることなし。嗚呼不仁の者、其危を安とし、其錙を利とし、亡る所以を樂みとし、自ら侮の侮たるを知らす、自ら毀の毀たるを知らず、自ら伐の伐たるを知らす。昏迷惑溺死亡に至つて遂に自ら悟らさるは實に哀むへきのみ』と。惡を惡とし善を善とするの心を持して其の極に至らは、則ち聖賢のみといふ。讀者更に自ら取るの一章を熟讀せば、實に思半に過きるものあらんと思ふ。以上述べ來つた如く、私心を去つて性善の本地に着眼し、更に之を撒充して心を盡し形を踐むことを修養し、自ら取るの愚を敢てしないやうに警戒せは、到底爲し難いと思つたことも爲すことが出來、愚かものであつたと思ふ我も本來は決して愚でないことが分かるであらう。其處で性善を認めて其の擴充に勤むることは、實に自我を實現し自己を完成する唯一の方法にして、亦人を敎育する唯一の關鍵である。結局敎育と

いふことは、教師が兒童に何物をも附與するのではない。唯々兒童本具の性能を完全に發達せしむるに外ないといふことが知らるゝのである。予は多年教育に從事しながらも眞個愈教育の依つて立つべき所を知らなかつたのである。西洋流の教育學にも教育の可能性あることを論して居らぬいのではない、自己活動の重んずべきことを言ふて居らないのではない。併し性善擴充といふが如く直截簡明には高調して居らないから、吾々に其の可能性を信することが薄弱であり、從つて如何にして自己活動を促せばよいが、其方法も能く分らなかつたと思ふ。尤も如何に教育の可能性を信するからと言つても、教育の效果が常に一樣にせらるものであると言ふのではない。固より人には能不能があり、且つ病的の者もあつて或限定のあることは勿論であるが、單に其限定のあることを楯にとつて其方法を盡さゞることがあつてはならないのである。性善擴充の說に從へば、斯かる臆斷に基く方法上の粗漏を免かるゝことが出來るであらうと思ふ。夫れは何故かといふに、被教育者の性惡は暫く置き、何處までも其本具の性能を尋ね出し、それを實際上の體驗により一歩一歩擴充せしむるのであるから、彼の徒に教訓說教を加へ、被教育者を教育者の意志に服從むしむるのとは、全然區別があるからである。前者は何處までも性善の出發点を被教育者自身の心中に認め、之が擴大を圖らしむるのである。然るに後者は他動的に善を强ふるのであるから、其の立脚点に大なる相違があるのである。從來の教育法によれば、知らず識らずの間に自己を餘程小さい者と考へしむる弊があつたが、性善擴充の教育法によれば、自然自己の本來に尊き者なることを意識し、之を擴充するとしないとは、自己を完成するとしないとの相違であることに想到せしむるを以つて、被教育者夫れ自身の努力活動の上に於ても大なる差違が生じて來るのみならず、教育者が教育を行ふ方法上に於て己に大なる差違があるのである。教育方法上の差違としては、先つ教育は寬大を主とし、教師と兒童との意氣投合を以つて第一の階梯とし、更に兒童の自得によつて性善の擴充に努むること、而して實地の體驗を重んじ、體驗しつゝ擴充を圖ること、隨つて又教師の理想をより高くして擴大し得らるゝ限り之を擴大せしめて往くのである。此の外數へ來れば教育の方法上種々異なつた扱ひ方があるのであるが、要するに、性善擴充の教育法其手段頗る寬大溫和なれども、結局の事實頗る硬教育となるのである。隨つて第八章の第五節に述べた氣の論とも餘程關係する所があり、本章の第三節に述べて情育とも密接の關係があり、延いては克己制欲を以つて教育の重要事とするのである。性善擴充の教育の實際は、第七章の第一節に引用した告子上第六章の割記を參酌すれば、一層明瞭になるのであるが、一見惡意の如く思はるゝ行事も、更に其志念の本幹を調べて見ると、矢張性善であつて、其方途を異にするのみの相違であるから、其性善を見出して方途を變し、性の善なる所を益々擴大せしむるのである。尙ほ性善說を主張すれば、性惡は認めないかと云ふに、決してさうではない。唯實際教育の立場から見て性善の教育法に從へば性惡を說く必要がないといふまでのことで、理論上としては別問題である其の事も前記告子上第六章の割記を見れば明かにあるのである。兎に角性善擴充の教育法は孟子の教育方法であるが、松陰先生の說明により、吾人は一層其意義を明かにすることを得たのである。今尙ほ其の沿革を明かにすれば先生いふ。『性善を以つて專ら教の根本とするは、實に子思に始まり、孟子に成るなり。中庸の開卷に、天命之謂レ性。率レ性之謂レ道と云ふは、明かに孟子の本つく所なり、故に孟子の學は先つ性善を認むるを以つて本とす。四端の說、孺子入レ井の說、乞人不レ屑の說皆性善を認むるの術あり。苟も性善を認め得ば、是より涵養して德を成すに至るべし。』と。又公孫丑上第六章の割記には、『此章不レ忍レ人の心より遂に

四端の論に及ぶなり。不レ忍レ人は即ち惻隱の心にして、羞惡辭讓是非皆是より出る所あり。嗚呼人々此心なきはあらじ。而して凡人は皆擴充の術を知らず、以つて聖人に及はざる所なり。孺子入レ井の譬及び梁惠王上篇牽牛の說、事大に相類す。宜しく良心發見の所を見て擴充を勤むべし。擴充の二字是れ孟子人を敎るの良術なり。』とあり。是に由つて、性善擴充の敎育法の大要を察することが出來るであらうと思ふ。要するに性善擴充の法は、自己を完成し、人を敎育する上に於て重要なる根本的敎育原理である。從つて之を我が實際敎育の上に應用せば、必ずや効驗の顯著あるものがあらうと確く信するのである。

第六節　性善擴充法の實例

前節に述べたるが如く、性善擴充の敎育法は、敎育の根本的原理にして最も尊重すべき者と信ずるを以つて、之が適用を明かにする爲、尙ほ二二の實例を示して、其方法を一層明かにしようと思ふ。松陰先生の岡田耕作に示す書に、『正月二日岡田耕作至る。余爲に孟子を授け公孫丑下篇を讀み訖はる。村塾の第一義は、閭里の禮俗を一洗し、枕戈橫槊の風を爲さんすするに在り。是を以つて講習除夕に徹し、未た嘗て放學せさるあり。何如んぞ年一たび改まり、士氣頓に弛み、三元の日來つて禮を修むる者あれども、未た來つて業を請ふ者を見ず。今墨使府に入り、義士獄に下る。天下の事迫る。何ぞ除夕あらんや。然り而して、松下の士猶ほ皆此の如し。何を以つて天下に唱んや。耕作の至る。適々群童の魁を爲す。群童に魁すれば乃ち天下に魁するの始あり。耕作年甫めて十齡、亘く自ら激勵せば、其の前途寧ろ測るべけんや。書して以つて之を勵ます』と。十齡の耕作は、何氣なく業を受けに往つたのであらうが、群童に魁すれば即ち天下に魁するの始めと、之を擴充して激勵を加へられた所が、大に味ある所ではあるまいか。溝三郎の說には、『無逸三生を拉して余に造り託を爲す。曰く音曰く市、音溫にして詳、而して市顆脫、其人皆愛すべし。而して末座の一生に商家の遊倅、年甫めて十四、頗る市井の氣あり、余心に之を厭ふ。特に無逸の託を重んじ敢て拒絕せず。而して無逸盛に生を稱揚して措かず。余益々悅はず。一夜讀み訖はる。末座生進んで曰く、僕商を能めて醫と爲らんと欲す。何如。余曰く醫と爲る何の爲か、曰く商となる樂からずと。商と爲る何の爲に樂しからざるか。曰く富貴の人に諂屈する能はず。と。余曰く諂はず屈せずば、商も不可なく醫も不可なからん。今や醫の諂屈更に商より甚し。然るに君子渴して盜泉を飲ます、志士窮して溝壑を忘れず。飲まず忘れずば、醫爲すべし、商爲すべし。人各位あり。位を去つて外を願ふ。素より行の道に非らざるなり。且つ當今天下の商諂屈日に甚し。爾諂はず屈せずは、以つて天下を更むると雖も可なり。何ぞ必ず醫を爲さんやと。是に於て大に悟る。乃ち請て曰く、僕願くは焉を學はん。敢て其方を請ふと。余曰く爾の家は所謂骨董舖なり。爾其れ多く古書を蓄積して其間に坐臥し、且つ商且つ學び、渴と窮と一に患ふる所なく、富めば以つて人を惠むべく、學べは以つて人を敎ふべし。若し乃ち折閱困迫せば、盜泉飲まず、以つて溝壑に充つ。亦以つて商たるに負かざるべし。果して能く是の如くなれば、爾の立つ所或は以つて二生を壓するに足り、吾の託を受け以つて無逸に答ふるに足らん。生其れ旃を勉めよ。遂に生に名けて溝三郎と曰ふ』と。本例は醫になるか商になるかの問題より、諂はず屈せずといふ性善を見出し、寧ろ大勇猛の商人となり、天下の商風を改むることに擴充せしめらるゝのである。更に又市之進に贈る文には、『一日市之進余が側に在り。凡に凭つて書を學ふ。余命ずるに帚掃の事を以つてす。市已に諾す。書を學んで止めず。余再び之を言ふ。市云く、心に十葉を寫完せんと期す。而して二葉未た完からず、完く盡きて然る後事に從はんと。余之を言ふ

三四市猶ほ止めず。余默然蹶起、其の紙筆を奪ひ之を地に投ず、市收め取り復た二字を寫す。然る後起つて余が命に趨き事卒はる。余進んで市に謂うて曰く、爾余と抗せんと欲するか。市曰く敢てせず。敢てせず、何ぞ吾が命に趨くの緩かるや。市曰く死罪、市實は先生と抗せんと欲す。余曰く爾能く我と抗せば天下抗すべからざる人あし。能く天下の人と抗せは吾と爾と然るべからず。吾爾に假さゞるなり。市首を逸れ之を久しうす。吾れ徐に曰く、爾妙年類脫輿に道に入るべきかり。不屈不退爾の眞心是れのみ。市曰く然り。余曰く、聞く汝父を喪ひ母に事へて不恭、居處敬ならず。親戚隣里の規責に從はず、爾子弟の事且つ爲す能はず。安んぞ能く天下の人と抗せんや。苟も天下の人と抗せんと欲せは、吾れ一說あり。今より志を立て、天に升り地に入り水を踏み火に投し、人言の使ふ所死すと雖も屈せず、難しと雖も退かず。是れ不屈不退、爾の眞心を行ふに足る。然らば何ぞ天下の人抗するに足るものあらんや。と。市奮然として曰く、願くは先生の命之れ聽かん。市年十四、頑凶無賴、頗る親戚の患ふる所たり、無逸誘導書を授けて之を讀む。遂に以つて余に託す。余一見之を異とす。市果して凡兒に非らざるなり。是に於て余市と約するに、今後三十日前言を以つて踐と爲すことを。三十日後吾れ將に更に語る所あらんとす。因て書して贈と爲す』と。不屈不退の性善を擴充して、天下の人と抗すべきことを敎へ、約するに三十日を以つてし、體驗の結果更に擴充する所あらんとす。以上の諸例について之を見ば、先生が子弟を敎訓せらるゝ狀況歷然として見るが如きものあり。固よりその人その人によつて說述の方法には相違あれども、大體の調子が性善擴充の方法によられたることは明かである性善擴充の方法によれば、其の人の性の向ふ所より之を擴充するので、如何に頑迷なる者も皆之に心服するに至るのである。能く考へて其の理の存する所を知つて貰いたい

第七節　放勳の語萬古の敎道是に盡く

性善擴充說は、自已を完成する唯一の方法にして、又人を敎育する唯一の關鍵なることは、前節既に之を述べたる所なるが、抑も敎育の本義は、何處までも自覺を促かして、性善擴充を勤めしむるに外ないのであるから、從容として逼まらざる所に、其効果を奏するのである。松下村塾の諸生に示す書に、「嘗て王陽明年譜を讀む。謂ふに、門人を警發する多く山水泉石の間に於てす。竊に其理に服す。吾陽明に非らざるなり。然れども朋友切瑳亦當さに斯の如くあるべし。是を以つて會講連業、未た嘗て繩墨を設けず、交はるに諧謔滑稽を以つてす。匡稚圭詩を說く故事の如くす。近くは米を舂き圖を鋤くの舉の如き、亦此意を寓するのみ。……之を要するに、學の功を爲す、氣類先つ接して義理從融す。區々たる禮法規則の能く及ふ所にあらざるなり。」と。小田村士毅の相模に役するを送る序に、『夫れ兵の害驕惰より大なるは莫し。惰驕を生し、驕逸を生ず。今兵已に逸す。而して未た甚たしく驕からざる者は、驕を欲せざるに非らざるなり。惰極つて驕なる能はず。而して今の將吏察せず、嚴令苛法以つて之を束縛し、其發越奮勵競つて用を爲すを思ふを欲せず。士毅を左右にするに非らされば、則ち將誰か望まんや。夫れ之を敎ふるに敬を以つてすれば、則ち驕なる者肅、之を敎ふるに義を以つてすれば、則ち將誰か望まんや。夫れ之を敎ふるに敬を以つてすれば、せば、則ち以つて戰ふへきなり、以つて守るべきなり。器械行伍の末に至つては、則ち有司焉に存す。君の先つ館に在つて諸生を督勵する、顧ふに亦是に外ならす』と。又いふ、『大低聖人の人を敎へ政を行ふ、皆窮屈なる所に非す、從容たる所に妙處あり。深く味ふべし』と。又孟子盡心下第二十六章の劄記に、『是れ人を敎へ人を治め及び上に事る良法なり。如レ追二放豚一。既人二其並一。又從而招レ之の句に至つて、余又安ん

そ野山獄を回思せさることを得んや。夫れ其人罪あり、是を獄に下す。固より理なり。其往事を悔み前非を悟るに至つて、猶出るを許さず。入二其苣一又招レ之の甚しきに非すや。吾孟子を起して與に野山獄のことを謀らんと欲す」と。盡心下第三十章の劄記に、『往者不レ追。來者不レ拒。以二是心一至。斯受レ之而已矣。（館人の語）の教なれば、其勢屨を履すに至るも亦何そ傷まん。……館人の語、三復味益々盡きず。今諸君と松下村の風化を起さんと欲す。宜しく此語を以つて合甲とあすべし。遺忘することなかれ。往者不レ追。然れでも其前日の善美を忘るゝことなかれ。來者不レ拒。又其前日の過惡を記することなかれ。苟以二是心一至。斯受レ之而已矣。徒に心のみに非ず、斯面を以つて來る者と云ふとも亦是を受けんのみ』と。滕文公上第四章人之有レ道也。飽食煖衣。逸居而無レ教。則近二於禽獸一。聖人有レ憂レ之。使二契爲一司徒一教以二人倫一。父子有レ親。君臣有レ義。夫婦有レ別。長幼有レ序。朋友有レ信。放勳曰。勞レ之來レ之。匡レ之直レ之。輔レ之翼レ之。使二自得一レ之。又從而振二德之一。の劄記に、『司徒の職を論する所萬古人道是に盡く。所謂五教なり。放勳の語萬古の教道是に盡く。所謂在寛なり。玩味して一字にても疎かに讀むべからず』と。以上列擧する所によりて之を案ずるに、先生の遺り口は、何處までも從容逼まらさる態度、即ち寛大を以つて教育方法の大綱として居らるこゝとが分かる。尚ほ參考の爲、先生の語句を引用すれば、『余謂らく、古より大業を成すの人、恬退緩靜ならざるはなし。若し伊尹をして度量狹隘、褊急躁妄、果して柳子の言の如くならしめは、豈天下を任するに足らんや』と。又いふ、『拘儒一律を執つて萬人を議し、或は己を以つて人を論す。是れ青史中全人なき所以なり。又滿世界全人なき所以なり。』と。又いふ、『其人を待ち物に接するは甚寛厚にして、自ら處するは甚嚴密なる、是れ柳下惠の行あり。人能く此の如くなれば、何程壞亂の世に處ると雖とも、必ず能く志を協へ心を同ふし世道を維持するの人を得るなり。』と。又いふ、『知るべし。古の君子の人を待つ寛恕にして（仁ある故あり）私する所なきことを。（公なる故なり）今の君子は然らす、前日一過罪あれは、悔と云ふも悛むと云ふとも、曾て是を恕せす、行識るへき者は其心の必しも然らざる所を探つて是を罪す。其行偶然中正を失する者あれは更に其心の併せて是を罪す。殆んど古の君子に異なり』と。ある如く何處までも、偏狹にして悛烈なるを忌んで居らるのである。要するに、放勳の語にある如く、教育は之を自得せしむるといふことが肝心であるから、從容と寛大とを主とするにあらざれば、自得の目的を達することが出來ないのである。和氣藹々の裡に、以心傳心的に自覺を與ふるのであるから、決して嚴峻偏狹の間に之を與ふることは出來ないのである。離婁下第十六章に孟子曰。以レ善服レ人者。未レ有二能服一レ人者一也。以レ善養レ人。然後能服二天下一。の劄記に、『服レ人養レ人の公私、學者に於て最も精察すべきことなり。蓋し學の道たる、己が才能を衒して人を屈する所以に非す。人を教育して同しく善に歸せんと欲する所以なり。』

又仝第七章の劄記に。『養の一字最も心を付けて看るべし。註に養謂二涵育薫陶俟二其自化一也と云ふ。涵はひたすあり、綿を水にてひたす意あり。育は小兒を乳にてそたつる意なり。薫は香をふすへ込なり。陶は土器を灶にて燒堅むるあり。人を養ふも此四つの者の如くにて、不中不才の人を繩にて縛り、杖にて策うち、一朝一夕に中ならしめ才ならしめんとには非す。仁義道德の中に沐浴させて、覺へず知らず、善に移り惡に遠かり、舊染の汙自ら化するを待つことあり。是れ人の父兄たるの道にして、父兄のみにあらず人の上と爲つて政を施すも、人の師と爲つて教を施すも、一の養の字を深く味ふへし。』とある。これ等によりて見ば、在寛の意味が略ぼ知らるゝではないかと思ふ。是に於て本章の始に歸へり、第二節反求在身の說、第

三節情を顧みること、第四節至誠のこと、第五節性善擴充の說、第六節在寬の說等を篇と合せ考へて見たらば、求心的學究態度の何物かるかを了得することが出來やうと思ふ。然るに更に飜つて言ふ。抑も事實的學究態度といひ、綜合的學究態度といひ、求心的學究態度といひ、孰れも現今の學究態度に於て頗る閑却せられつゝある學習方法かれば、此の態度を省察することに於て、固より異存のあるべきことゝも思はれかいが、以上三方面の學習態度によりて到達し來つた、相容相含の理及び、氣の論、並に反求在身の說、乃至性善擴充の說の如き、之を理論的學術的立場より見る時は、必ずしも完全かる組織的說明を具へた者とは言ひ難いであらうが、併しながら事實實際の工夫としては、斯かる見地に立つてこそ始めて眞實の步が取れて來るのである。其處で將來假令如何なる學說が發見し得られようとも、實地實際上の心術としては、此を度外にすることは出來ないであらうと考ふるのである。夫れは單に机上の議論でなく、何處までも事實實際の上より見地を立てたる者で、現に松陰先生により此の精神を徹底的に試驗せられ、而も其効驗頗る顯著かる事實的說話である以上吾人は聊も之を疑ふへき餘地のない者であると信するのである。知らす讀者果してよく之を首肯するや否や。

第十章　結論

以上第一章より第九章に亘りて、余が言はんとする學究態度の概要を述べ終つて。第二章に於て既に之を述べた如く、余は此學究態度の研究といふことが、教育改良の根本問題であるとまで信ずるのであるが、讀者が果して之に共鳴せらるゝか否かは分らない。抑も教育の事たるや、或は身體教育といひ、或は道德教育といひ、或は國民教育といひ、或は社會教育といひ、其目的とする所決して一二に限らないのである。併し要する所、人心を正し、心の教育を施すといふこと程、重要な事柄はないのである。若し夫れ教育の最終目的茲に有りとせば、教育者の先つ研究すべき大切の問題は、心そのものゝ見解ではないか。心そのものは果して能く如何なる顯現をかし得るものなるか、將又靈と靈との感應にはいかに微妙なる作用の行はるゝものであるか。少くも此等の見解が能く氷釋せられ、心そのものが教育者の腦裡に十分理解せらるゝにあらざれば、到底眞個の教育は施し得られかいものであると思ふのである。然るに從來の心理學は果してよく右等の事象につきて的確なる解釋を與へて居るかどうか。吾人は聊か其点を疑ふのである。元來心そのものゝ解決はこれを哲學的に說き、宗教的に論して來たならば、到底容易に說明の出來るものではあるまいと思ふ。其處で吾人の要求する所は、斯かる根本的の討究を意味するのではなく、唯實踐躬行の上から見て、如何なる程度に之を解釋すればよいかと言ふのである。西洋の心理學的哲學的見解は、固より之を準據とし參考とすべきものであらうと思ふが、其の難易は暫く別問題としても、其學說が日進月步に伴うて漸次動搖しつゝあるから、必しも其の學說を固守することは出來かいのである。其處で教育の如く全く實際を本として進まねばならぬものには、甚だ心本ない次第といはねばならぬのである。茲に於て吾人の大々的一考を要することは、西洋流の學究態度と東洋流の學研態度とには、大體に於て如何なる相違があるかといふ事である。抑も此の兩者には最初より全然其目的を異にする二個の方向があるのである。此のことは第四章の所に於て既に其意を明かにしてをいた如く、西洋の學究態度は、眞理を的として進步しつゝあるものであつて、東洋の學究態度は如何にせば一層實行に切實なるやを的にして論及せられて居るものである。この學究態度の根本に於ける東西の相違といふ事は、吾人の餘程注意を要することであらうと思ふのである。余は第一章に於て余が實

際上の經路を說き、及ばずながら余は從來西洋流の敎育學說を研究し之に據りて敎育の理法を確立せんと苦心したものであるが、到底其理法が分らない、敎授のそれは暫くよしとするも訓育の失れが更に分らない。尙ほ換言すれば人物の養成は如何にすればよいかといふことが一向に分からなかつたのである。其處で防長敎育の史實及び吉田松陰先生の學說等を研究することによつて、始めて個中の消息が窺知せられ了解せられて來たやうに思ふといふことを述べて置いたが、結局此の事を概言して見ると、西洋流の敎育說に東洋流の敎育說を加味することに依つて、爰に敎育の何物たるかゝ分つたと言う事に外ないのである。元來西洋の學說は大體に於て眞理を的として進步しつゝあるのであるから、動搖するのが本體であると見ねばなるまいと思ふ。其處で着實穩健を主とする敎育方法の如きは、由來實行に切實ある如く立論せられた東洋の學說を背景としこれに新進の西洋學說を參酌しつゝ步武を進めてゆくといふことが尤も賢明にして而かも効果多き遣り方ではあるまいかと思ふのである。吾人が松陰先生を研究することによつて著しく感したことは、先生の一本論であると思ふ。萬法はすべて一理に歸するものである。然るを兎角二見の相に捉はれて居つたといふことが、抑も從來吾々の謬見誤解であつたのである。第一章より第九章に至る各章に引用した松陰先生のすべての說明を通して見れば、先生の思想の根柢に於て、常に此の萬法一理といふ事がはたらいて居るといふことが悟られるであらう。故に東西兩洋の學究態度の如きも、一方の見に偏せずして、兩者を斟酌し鹽梅するに於いて深き味があるであらうと思ふのである。然るを單に先進國の文明であるとか、或は眞理研究といふ標榜に眩惑せられて、一に西洋の敎育學說のみを漁つて居るが如きは決して具眼の士の採るべき態度ではない。以上の說明によつて學究態度の準據は了解せられたことゝ思ふが從つて心そのものゝ解釋に就ても亦同樣の注意を要することで西洋の心理若くは哲學によつて之が說明を需むることも固より必要ではあるが、古來東洋の主張に於て心そのものが如何に說明されて居るかといふことを回想することを忽諸に付してはならない。此の事は單に東西兩洋の學說を折衷鹽梅すると言ふ形式的抽象的な意味よりでなく、寧ろ事實實行に切實なる上より大に東洋在來の主張を採用した方が適切便利にして、而かも効果の擧ること〻思ふのである。理論上の良否は兎に角として余は實際的敎育の立場よりして常に斯く考へて居るのである。併し同しく東洋在來の學說とは言い乍ら、其の中に種々雜多の思想があるから一概には論ぜられないが、大體儒學の見地に本づきて心の解釋乃至一般敎育の理法を需めたいと思ふのである。此の際最も注意すべき事は是迄度々繰返し說明して來た學習態度のことである。いかに大體上儒學の見地に基づくと言つても、其學習態度如何によつては、其研究の進行と歸結とに大なる差が生して來るのである。然らば如何なる學習態度によるべきかと言ふに、そは松陰先生の取られた學習態度のそれを顧みることが、よからうと思ふのである。先生曰く『大丈夫書を讀み道を學ふ、其立志當さに磊々落々流俗の表に樹立すべし。何んすれぞ區々碌々にして止まんや。故に其學をなす、虛を去つて實に就き、冗を略して要を攬ふべし。夫れ去靈略冗あれば則ち力を用ふること約あり。就實攬要あれば効を收むること博し。力を用ふること約にして効を收むること博ければ、能く流俗の表に樹立する所以なり。』と言ひ、尙又、『兵家の學實を尙んで駁を尙ばず』とも言つて居られる。この就實攬要といふことは實に先生の學則であつたものゝやうである。斯くの如く就實攬要の學習態度によつて、紛糾雜駁を避けて往かなくては、思想の統一を圖り事理の徹底を期することが出來なからうと思ふ。此等の点より余は益々此の學究態度のことを愼重に考ふるやうになつたのであるが、東西の學究態度の

上から眺めても、亦同し東洋の學說を研究する上から眺めても、學究態度を定めて掛かるといふことは餘程大切なことである。松陰先生の就實攬要の學究態度に從へば、從來吾々が考へて以つて頗る不可解なものであつたと思ふ心そのものゝ如きも、頗る直截管明な解釋になり隨つて其の敎育方法の如きも、從來動もすれば我々が氣付かずに居た点なども多々發見せられて來るのである。以上述ぶる所により、學究態度の吟味といふことは、獨り其學習をして經濟的實用的に導くのみならず、學究の到達点にも至大の影響を及ぼすものであるといふことが分つたであらうと思ふが、更に又この學習態度の如何は人物の出來不出來といふことにも餘程關係を有するといふことである。卓犖不羈の人物を造るも、訓話考證の學に終る人物を造るも、一つは其學究態度の然らしむる所と言ふて差閊があるまいと思ふのである。現に松陰先生をして松陰先生たらしめた所以も、先生の學習態度が不識不知の間に然らしめたと想到さるゝのである。先生の學習は儒學に胚胎して、就中王陽明學に近く、加ふるに兵學の見地を以つてし、武士道の精神に基き、遙に西洋の事情をも究め、其間山鹿素行を祖述し、佐久間象山に師事し、專ら實用の學を主として、經濟を說き、史實を重んじ、其他全國の土地人情を察し、到る處知名の士に接して、各其長を取り、以て遂に就實攬要の學風を完成せられたのである。是を以つて、先生の學問見識が他に超越する者があつたのは、決して偶然であるまいと思ふのである。斯く考へ來れば、學習態度の吟味といふことは、人物の養成上頗る注意を要する條項であつて、敎育上甚だ重要な地步を占むる問題であらうと思ふのである。これ吾人が此の學習態度の吟味といふことを以て敎育改良の根本問題とまで絕叫する所以である。然らば、更に立り返つて松陰先生の學究態度を說明するには如何なる方法によるかと言ふに、余は種々考案した結果、事實的學究態度と綜合的學究態度と求心的學究態度の三者を擧ぐることが、先生の就實攬要の學究態度を表明するに、最も都合よからうと信したのである。以上三者の學究態度によれば、如何に就實攬要の意に適ふかは、第七章第八章第九章等の說述より已に承知せられたことゝ思ふが、第七章の結論たる相容相合の理、第八章の結論たる氣の論、第九章の反求在身の說、これを概括して熟考して見れば、先生が二見の相を離れて、一本論に立脚せられて居たといふことがよく分るであらうと思ふ。更に性善擴充の說に於て自己本來の面目を如何に發揚して居らるゝか。尙性善擴充の說と氣の論とを併せ見れば、吾々の心の顯現といふこともよく理解せられ更に又情の妙味と誠の德との說述を通して考一考すれば、靈と靈との感應といふ事も、或は思ひ半ばに過ぐるものがあらうと思はれる。我々は從來所謂論理的遊戲即ち單なる思想の研究にのみ沒頭して事實そのものを深刻に眺めなかつたから、斯かる平易なる眞理をも雲烟過眼して眞に徹底した事象を知らなかつたのである。一念茲に至れば事實的學究的の妙味は實に言ふに言はれぬものがある。

右等の說明によつて心そのものゝ性情が最早了知せられた上は、更に進んで今一應氣の養成と云ふことに就いて考慮せねばならぬ。氣の養成は意志の敎育に關係するのであるから、頗る重大な敎育的要件である。然るに、此の肝心の意志敎育が從來どうも其の方法が分らなかつたのである。斯くいはゞ、人或は余を以てあまりに好奇的な言辭を弄するものと思ふかも知れない。併し此の事は余一人の獨斷ではなく、現に大正七年四月早稻田同文館發行、『最近敎育學の進步』中の、文學士福島政雄氏の最近の意育問題といふ論文にも、『今日我が國學界の風潮は、常に西洋に追隨して、新說より新說を追ふといふ有樣である。然るに西洋の學界は、主知的傾向を有し、從つて敎育上の問題に於ても、知育即ち敎授の方法に於て、稍々見るべきものを

持つて居るばかりであつて、意志教育の問題に於ては、所謂今日の教育學に於ては、何等の見るべきものゝないと言つても過言ではないのである。故に最近の意育問題と言つても、特に西洋の學說の紹介に値すべきものを、吾人は不幸にして未た知らないのである』といひ又、『古來歐州の思想界は、多く主知主義に流れ、加之學術上に於ては、頗る分析的に流れて居るのであるが、意志活動の研究などは、分析も固より今日の儘では不足であるとはいへ、常に之を綜合的に觀察するといふ立脚地こそは、その研究の中心となるべきものではなからうか。而して綜合に於ては、古來東洋は西洋よりも勝れて居るのである。故に意志教育の問題の如きは、東洋思想の綜合的特色を以つて、その解決の鍵と爲したならは、必ずやその中心精髓を得るに庶幾からんことを、吾人は信ずるものである。儒教に致知格物の教あり。佛教に禪定精進の一路あり。何れも人格發動の根柢に觸れる教である。』と道破して、意志教育のことは西洋の教育學に於ては、何等の見るべきものがないのである。松陰先生はこの氣といふ事を大に尊重して居らるゝと同時に、其の養成の方法に關しても頗る徹底した考案を有つて居られたのである。氣の養成に次いでは情の問題であるが、情の味を解せしむといふことも、現今教育の最も缺けた所ではあるまいかと思ふのである。情の育成には、消極的と積極的との兩樣がある。一面は仁とか愛とか德とか積極的に情を奬勵することで、一面は制欲とか服從とか克己とか消極的に情を抑制することである。情の養成は意志の養成と離すことを得ないのであるが、兎に角感情の養成といふことに今一層の力を用いねばならかいと思ふ。知識の啓發も、從來の如く單に實質的の知識を附與するのみに止まらずして、學習の態度即ち就實攬要の工夫を授けることが肝要である。尙更に進んで教養すべきことは性善擴充の精神である。絕えず自己を擴大して往く時は或程度まで完成し得らるゝものであるから此の根本的精神を十二分に兒童に理解せしめ之が教育の方法としては、何處までも兒童本具の性能を發揮せしむるの外手段のないものであるから、其本の義を能く會得し、寬大溫雅の裡に兒童の自得を促かし、敢て强いることをせず、一々體驗によりて漸次之を擴大せしむることに注意せねばならかいのである。右につき平素留意すべきことは兒童の一感一悟である。兒童が眞に自覺して吳れたことは、はんの一感一悟であつても、夫れが頗る重大なる教育の出發点となるのである。一感一悟之を言ひ換ふれば所謂心定である。結局吾々の心は吾れこれを決するの外仕方のないものであるから、事物當然の理を見破つて心定を得るといふことは、教育最終の到達点であると思ふのである。

上來述ぶるが如く、眞個に徹底した教育を施さんと欲せば、どうしても心そのものの性情を解して來るといふことが先決問題であつて、其の心そのものゝ性情が能く理解せられて來ると、教育の方法は夫れから自然に演繹されて來るのである。此の事は誰も異議のないことであらうと思ふが、人々によつて異存の生ずるのは、根本の心そのものゝ解釋であらうと思ふ。これについては吾人は夙に吉田松陰先生崇拜の一人者であるから、敢て其れが爲め先生の說を主張するのではかいが、兎に角教育上の實舞臺に立つて、あれだけの偉功を奏せられ、殊に先生自らも、『天下の英才を教育する、吾黨の無學無識の及ふ所に非ず。況んや幽囚殘錮の餘をや。然とも幽囚殘錮の久しき、少しく自得する處ありて、平生の志を償ひ、且つ他日恩赦の日に當て、幸にして未た死せずんば、此事未た必しも全く己矣と云ふべからず。』と言うて居らるゝのであるから、其自得したと言はるゝ教育法はどんなものであるかといふことを、聊か吟味して見たいと思ふ結果、遂に先生の心の見方に接觸して來たのである。先生の教育を知らんとせば先生の心の解釋を見て來ねばなら

露光量違いの為重複撮影

ぬ。先生の心の見方を研究するには、先生の學習態度を見て來ねばならないことになつたのである。要するに先生の學說を信ずると信じないとは人々の考にあることであるから、其の事は各自の任意とするも、學習態度の吟味といふことは、人物の養成乃至は教育の改良上至重至大の關係あることはどうしても爭ふことの出來ない問題であらうと確く信じて居るのである。

教育改良の根本問題　終

大正十一年六月五日印刷
大正十一年六月廿日發行

（非賣品）

著作兼發行者　山口縣佐波郡防府町三田尻第千參百四拾五番地　居田泰輔

印刷者　山口縣佐波郡防府町三田尻第四百四拾九番地　藤田增治

印刷所　山口縣佐波郡防府町三田尻第四百四拾九番地　藤田印刷所

發行所　山口縣佐波郡防府町三田尻第四百四拾九番地　藤田印刷所

版權所有

露光量違いの為重複撮影

ぬ。先生の心の見方を研究するには、先生の學習態度を見て來ねばならないことになつたのである。要するに先生の學說を信ずると信じないとは人々の考にあることであるから、其の事は各自の任意とするも、學習態度の吟味といふことは、人物の養成乃至は教育の改良上至重至大の關係あることはどうしても爭ふことの出來ない問題であらうと確く信じて居るのである。

教育改良の根本問題終

大正十一年六月五日印刷
大正十一年六月廿日發行

版權所有

（非賣品）

發行所　山口縣佐波郡防府町三田尻第千參百四拾五番地
著作兼發行者　居田泰輔

印刷者　山口縣佐波郡防府町三田尻第四百四拾九番地
藤田增治

印刷所　山口縣佐波郡防府町三田尻第四百四拾九番地
藤田印刷所

山口縣佐波郡防府町三田尻第四百四拾九番地
藤田印刷所

253
220

終